

令和2年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録

千葉氏の領域における交通と流通 —水と陸でつながる人・モノの中世—

令和3年3月

千葉市・千葉大学

【開 会】



司会
千葉市立郷土博物館総括主任研究員
外山 信司

開催挨拶
千葉大学理事・副学長
山田 賢



趣旨説明
千葉市立郷土博物館総括主任研究員
外山 信司

【講演 1】

講師 遠山 成一



【講演 2】

講師 道上 文



【クロストーク】

進行
千葉大学准教授 久保 勇



【閉 会】

閉会挨拶
千葉市立郷土博物館館長 天野 良介



目次

開催にあたって (山田 賢)	1
趣旨説明 (司会 外山 信司)	2
【講演1】内海を臨む都市 千葉 ― 中世水陸交通の視点から ― (遠山 成一)	3
資料	16
【講演2】中世のムラ・城をめぐるモノの動き ― 遺跡からみる北総地域の物流 ― (道上 文)	27
資料	40
【クロストーク】	65
閉会にあたって (天野 良介)	71

※本講座は令和二年一二月一二日に千葉大学文学部内で収録した内容をまとめたものです。

開催にあたって

山田 賢（千葉大学理事・副学長）

千葉大学理事・副学長の山田でございます。このたびはこういった形で公開講座を開催させていただくことになりました。まずはこのようなコロナ禍の事態の中で開催に向けてさまざまな努力をしていただいた千葉市の皆さま、関係の諸先生方、そして何よりも公開講座というものは

これを視聴していただく視聴者の皆さまがいて初めて成立します。この講座を視聴して下さっている皆さまにも厚く御礼を申し上げます。

さて、今回また再び千葉市郷土博とそれから千葉大学がタッグを組みまして千葉の歴史、そこに焦点を当てながら公開講座を行うわけですけれども、歴史を考えることの醍醐味というのは社会を縦軸と横軸で考えることであろうと思います。縦軸と横軸というのとはつまり時間軸であって、過去、現在、未来、それがどのようなつながっていて私た

ちは今どのような場所にいるのか、それを考えるよすがとなる。それが歴史を縦軸で考えることのまずは一つ目の醍醐味であると思います。

それからもう一つの歴史の醍醐味というのは歴史を横軸、つまり空間的に広がりとして捉えることです。例えば今回のテーマとなります中世、この時代というのは実はユーラシア全域に目を放せば極めて商業化、人の移動が活発になった時期でありました。例えば中国の宋朝で焼かれた焼き物がインド洋を越えてアレキサンドリアに渡り、そこから地中海に運び出されてヨーロッパにまで届いているというのがまさにこれから公開講座で扱うこの時代でありました。つまりこの時代、中世というのは往々にしてかつては暗い停滞したイメージで見られていたわけですが、そうではなくて地球の温暖化とともに生産力が上昇し活発な商業化、人の移動が行われたむしろ流通の時代であったのかもしれないというのが現在のユーラシア研究の大きな動向であると思います。

そうすると関東と東国千葉というこの地域に焦点を当てることによって、それがどのように日本列島全体とつながり、さらに東ユーラシアとつながり、大きな歴史の脈動の中で流通というものが存在したのか。これを考えていくこと、おそらくこれが二つ目の歴史の醍醐味ということになるでしょう。

そして本日はこういったテーマを扱うのに最も適任な講師の先生方においでいただいております。今回は対面的開催ということは残念ながらありませんでしたけれども、これを視聴していただくことによってまた皆さまが千葉の歴史というものに新たな目を開いていただくということを願ってやみません。本日はよろしくお願いいたします。



趣旨説明

司会 外山 信司（千葉市立郷土博物館総括主任研究員）

本日のテーマであります『千葉氏の領域における交通と流通―水と陸でつながる人・モノの中世―』につきまして説明させていただきます。千葉市は令和三年（二〇二一）に市制一〇〇周年を、令和八年（二〇二六）には千葉開府九〇〇年を迎えます。こういったまちとしての大きな節目を続けて迎えることになります。ご存じの通り千葉市には加曽利貝塚、大賀ハス、千葉氏、海辺という千葉の歴史に根差した四つの地域資源があります。

これらを活用して千葉としてのアイデンティティ、つまり千葉らしさを確立することが求められています。この四つの地域資源の中で、千葉の地を名字とする武士団、千葉氏は千葉の歴史を語る上で欠くことができない存在です。平安時代の終わり、大治元年（一一二六）に千葉の町に千葉常重が本拠を移し、都市としての千葉の歴史が始まったとされるからです。千葉氏は戦国時代の末、天正一八年（一五九〇）に小田原の北条氏とともに滅亡するまで、中世という時代を通じ約五〇〇年もの間にわたって下総の国を支配してきました。またその一族は北は東北から南は九州まで全国各地に広がり繁栄しました。千葉市では千葉開府九〇〇年に向けて市民の皆さまに千葉氏についてより深く知っていただき、これを通して郷土千葉に対する愛着を抱いていただくため、千葉大学と共催して公



開市民講座を行ってまいりました。

市内の西千葉地区と郷土博物館にもほど近い亥鼻地区にキャンパスを有する千葉大学は、千葉を冠する新制国立大学として七〇有余年の長い歴史と伝統を持ち、さまざまな分野で千葉の発展に寄与しています。この講座も千葉大学の地域連携活動の一環として行われるものです。本来であれば千葉大学の会場に市民の皆さまをお招きして文字通り公開で講演会を開催する予定でしたが、新型コロナウイルスの第三波も懸念される状況のため、やむなく今年のご講演を収録し配信する形で行うことになりました。事情をご理解いただければと思います。

本日は『千葉氏の領域における交通と流通―水と陸でつながる人・モノの中世―』というテーマを掲げております。中世といえば大名や武将が各地で群雄割拠するというイメージで語られることが多くありますが、村や町といった地域の社会は道や海、湖沼、河川といった水運によって密接に結び付いていました。千葉氏の権力や支配も交通や流通を掌握することによって支えられていました。また中世の遺跡からは国内各地のみならず中国産の陶磁器なども出土し、当時の生活の様子や流通状況が分かります。人々の暮らしは自給自足といった閉鎖的なものではなく、列島規模、あるいはアジア規模の交通や流通によって成り立っていたのです。今回の講座は交通や流通といった視点から政治史の中の千葉氏の位置付けや、近年急速に進展している中世考古学の成果を踏まえ、千葉氏の領域での暮らしについて考えます。

まず遠山成一先生より「内海を臨む都市千葉―中世水陸交通の視点から―」、次に道上文先生より「中世のムラ・城をめぐるモノの動き―遺跡から見る北総地域の物流―」と題してお話いただきます。そしてお二方に千葉大学大学院人文科学研究院の久保勇先生に加わっていただきクロストークを行い、より理解を深めていただきたいと思います。以上で今回の講座の趣旨の説明を終わりにいたします。

【講演1】

内海を臨む都市 千葉 — 中世水陸交通の視点から —

遠山 成一（東金市文化財審議会会長）

講師紹介

遠山 成一（東金市文化財審議会会長・敬愛学園高校講師）

早稲田大学法学部卒業。

民間企業を経て千葉県立高校の地理歴史・公民の教員となり、八街高校、佐倉東高校、四街道高校に勤務し、現在は敬愛学園高校で教鞭を執る。

その傍ら、中世史、なかでも歴史地理学的な視野をふまえた、交通史や城郭の研究を意欲的に続け、房総における陸上交通研究の第一人者である。また、東金市文化財審議会の会長として、文化財の保護にも尽力している。

本講演に関する主な論文は、

「戦国後期下総における陸上交通について―「下総道」をめぐって―」（『千葉史学』二四号、一九九四年）

「内乱期下総における寺領経営の一側面―称名寺領上代郷と湛睿―」（『千葉県の文書館』三号、一九九八年）など。

はじめに

ただ今ご紹介いただきました遠山成一と申します。今日は『内海を臨む都市千葉―中世水陸交通の視点から―』と題しまして、中世の千葉の

町を見てみたいと思います。なお冒頭申し上げますが、今回のこの講演に際しまして、築瀬裕一氏ならびにただ今ご紹介にあずかりました外山信司氏のご研究に多く拠っていることを申し添えておきます。それでは早速中に入らせていただきます。

さて、都市千葉と申し上げましたけれども、中世の都市とは一体なんだろうかといえますと、実は高校の日本史の教科書にも中世の都市が出てまいります〔資料2〕。例えば城下町、門前町、寺内町、湊町、宿場町、市場町などであります。さらに研究によりますと守護所とか守護城下町といったものが中世の都市として挙げられております。それでは中世における千葉という町の性格は一体どのようなものなのでしょう。これから見ていきたいと思えます。中世の千葉を考える上でまず頭に入れておきたい点が一点ございます。それは一四五五年に起きた享徳の乱の余波による千葉宗家の滅亡ということですね。この享徳の乱、一四五五年の三月に馬加康胤、原胤房らによりまして宗家の千葉胤直、胤宣父子が千葉を追われ、千田庄多古町へ逃れることになりました。そして同年八月には多古城、志摩城において胤直、胤宣父子が自害して滅亡してしまふわけです〔資料3〕。こうして千葉を追われた宗家は滅亡するわけですが、この後紆余曲折を経まして千葉の町から本拠が本佐倉城、現在の酒々井町本佐倉、佐倉市の大佐倉へ移ることになります。この点、享徳の乱の前後ということに分けて考えていきたいと思えます。

一 享徳の乱以前の千葉の町

まず享徳の乱以前の千葉につきましまして、鎌倉時代の千葉の町は一体どのようなものであったか考えてみたいと思います〔資料4〕。先ほど趣旨説明で外山さんもおっしゃってましたが千葉氏の名字の地、ここ千葉庄ちかはのしょうですね。ここには千葉氏の館があつたと考えられております。千葉氏の館といいますが、ここには千葉氏の本拠は猪鼻城ではなく、沖積低地の館であつたと考えられております〔資料5〕。最も有力な説は、現在の千葉地方裁判所のあります位置。これは多くの方がおっしゃっていますが、ここに千葉氏の館があつたのではないかといわれております。そしてこの千葉氏の館を中心にして千葉氏の政治的な空間があ



つたと思われまます。一つご紹介したいのが東禅寺僧の修心房の一件です。これはどういうことかといえますと、もともと千田庄、多古町の千田庄ですね。東禅寺にいた修心房というお坊さんが、千葉侍所竹元氏たけもとによって捕えられ、千葉の町まで連れてこられます。そしてそこで関東公方の沙汰を受けるといふことに文書の上ではなっております。つまり裁判沙汰があつたといふことです。ということとは千葉の町である程度、守護所的な役割がなされていたと推定できるわけです。続きまして妙見社

があつたり、これは築瀬さんの復元された地図でご説明したいと思いますが、あるいは大日寺、来迎寺などの寺院が数多く千葉の町にはございました。こういう点からも門前町としての性格が窺えます。そして千葉の町の四至ししといえますか、四つの方角にそれぞれ守護神として結城神明、御達報ごたつほう稲荷いなり、曾場鷹そばたか、そして龍蔵権現などの社寺が設けられていたといふことも分かっています。そしてなんととっても海を臨む都市と言いましたが千葉湊。これが重要な役割を果たしていたと思われまます。これにつきましまして先ほど申し上げましたように、築瀬裕一氏の研究「中世の千葉」に拠らせていただきます。こちらが築瀬さんの推定されている千葉の復元図です〔資料5〕。ここに千葉氏の館を築瀬さんは推定されておりまして、先ほど言いました妙見社、こちらですね。金剛授寺尊光院と書いてあります。そしてその前には大日寺、こちらに来迎寺。その他にもいくつかの社寺が点在しております。これが当時の千葉の町と考えられます。そして築瀬さんの推定される千葉湊というのがここです。都川がこう流れてくるここに潟湖せきこ、ラグーンが形成されていて、この中に船が入ってきて、ここが千葉湊だつたと考えておりますけれど、おそらく間違いないと思います。左の図は明治の『迅速図』といふことで、比べていただけるとお分かりいただけると思いますが、ここに猪鼻城ですね。今、千葉市立郷土博物館の建っている場所がございまして、この微高地がこのように伸びております。この辺は低湿地になつてたわけですね。こういったものを築瀬さんは千葉の町として推定されております。さて、この今見ていただいた千葉湊なんですが、実は鎌倉時代から南北朝時代前期にかけまして、文書の上でも千葉湊ではないかと思われるものが出てまいります。それをご紹介したいわけですが、まずは全体としまして金沢称名寺の莊園、寺領じやうりやうが東庄上代郷とうじやうかしろごう、現在の香取郡の東庄町、それから旭市の北側ですね。この一画にございました〔資料6〕。こちらで取れた年貢を千葉の湊まで陸送、あるいは香取内海を

使って持ってきたんではないかと、そして千葉の湊で積み込んでそれを現在の東京湾、これを渡って称名寺の外港とも呼ぶべき六浦、横浜市です。そこまで船で運んだとこのように考えられています。ということでの千葉は中継地点として非常に重要な位置を占めていたと考えられます。これが先ほど説明いたしましたが、ここにあったと考えられる光明院というお寺、そしてそこを預かっていた恵鋌えげんというお坊さんです。彼がこの年貢運搬に関してもかなり重要な役割を負ったことが想像されます。こちらがその千葉の湊ではないかと思われる文書です〔資料7〕。これを見ますと、追って書きのほうには「大日堂坊主御言付事」とか、あるいは「かねさハの年貢事」、さらに本文のほうで「妙見」と出てまいりますし、それから「元空ら」とありますが、この元空というのは先ほど申し上げた元空房恵鋌というお坊さんです。これらが出てくることからこの金沢年貢を積み込んだ船、また「金沢年貢船二入て候か」とあります。この金沢の年貢を積み込んだということが分かります。これがおそらく千葉の湊であろうと、考えられるわけですね。そこで一つ問題がありまして、この東庄上代郷から千葉までどのように運んだのかということになります。これにつきましてはこちらの図をご覧いただきたいんですが、当時海潟湖の椿海つばきのうみというのがございました。この北側のほうに上代郷がございます。ここからおそらく陸送かあるいは黒部川を船で小見川まで出しまして、この香取内海を船で参ります。そしておそらく印旛浦を通して、土気から流れてくる鹿島川の地点まで持ってきました。ここから陸送で千葉まで持ってきた。このようなルートが推定されるわけです。この千葉の湊からは船で金沢の六浦まで運んだ。こういうふうな考えられるわけです。ということ、この鎌倉時代から南北朝期にかけて称名寺領莊園の年貢をこういったルートで運んでいた。そのために千葉の湊というのは非常に重要だと。またこれ以外にも同じく金沢文

庫の古文書に、この千葉の湊に房州に行く商人がいたと。彼に手紙を託したなんていうものも出てきまして、おそらくこの江戸内海の物流といえますか、これに千葉の湊が、もちろん他にも湊があつたはずですけども、重要な役割を果たしていたことが考えられます。

二 享徳の乱以後の千葉の町

続きまして戦国期の千葉ということで、享徳の乱以降の千葉の町を見ていきたいと思います。先ほど申したように享徳の乱によりまして千葉の本家が交代します。そして本拠も千葉の町からいったん平山、そして次に長崎、そして最終的に佐倉、これは現在の酒々井町本佐倉のことを指しますが、ここに移ったということが『千学集抜粹』のほうに出ております。そして長らくこの長崎というのはい体どこなんだということが問題になってきました。最近になりましておそらくこの長崎というのは千葉市の長峰（若葉区大宮町）であろうということがほぼ確定しました。これは黒田基樹さんがおっしゃってたんですけれども、最近築瀬裕一さんらの研究もございまして、この長峰でまず間違いないということになりました〔資料9〕。この平山とか長峰、なんでこちらに移ったのかというのは、後ほど街道との絡みでまた詳しくご説明申し上げたいと思います。

ここでは中世の千葉、戦国期以降は千葉の町から最終的には本佐倉のほうへ本拠が移ったということをお願いしたいと思います。さて、その長峰と平山、ごく簡単に地図のほうで説明しておきますけれども、こちらは生実城です。こちらが長峰ですね〔資料10〕。そしてこの都川支川の上流部に平山城、現在の緑区平山町になります。本場に奥まったところにぼつんと平山城つてのがあるんですけれども、なんでこんな奥へ行ってしまったのか。猪鼻から直線距離にして約八キロほど上流になるわけですけども、おそらくまだ享徳の乱の余波があつた時です。千葉

氏が騒乱を避けてわざわざ平山という奥地まで入り込んだのではないかと考えられます。それともう一つは、やはり原氏の本拠であった生実城とのこの関係の近さですね。これは築瀬さんもおっしゃっているんですけども、生実城から実は後ほど街道で説明しますけれども意外と平山まで近いわけですね。千葉氏を助けたといいますが、ある意味双璧だったわけですけども生実の原氏、千葉氏、これがこういう形で共存してたというふうに考えてよろしいかと思えます。そして長峰まで出てきたというのにはやはりある程度騒乱が収まって、長峰でも、比較的中心部から近いですけども大丈夫だということになって平山から出てきたのではないかと、このように考えております。

三 千葉と江戸を結ぶ道

さて、それではこれからは具体的に千葉と各地を結ぶ道について見ていきたいと思いますが、まず最初に千葉と江戸を結ぶ道ということで見てもいいと思います（資料11）。あらかたの場所はここで書きましたが、千葉から稲毛、検見川、幕張、鷺沼、久久田、谷津、現在の津田沼ですね、船橋、小栗原、中山、八幡、そして市川、そして太日川を渡りまして小岩、小松川と来て江戸の中心部へ入るわけです。さて、これに關しまして大変良い資料があります。それは連歌師柴屋軒宗長が著した紀行文『東路のつと』というものです。これは外山さんのご研究にも詳しいんですけども、この連歌師宗長、永正六年、一五〇九年に関東各地を歩いて品川まで来た後に房総へ向い、浜野まで来た時、生実にいた原胤隆に連歌会を催すという事で呼ばれます。そして彼が通った道が『東路のつと』の中に出てくるわけですが、品川から江戸、そして今井の津、これ江戸川区の今井ですね。この浄興寺というお寺に泊まった後、中山の本妙寺、現在の法華経寺です。ここへ一泊しまして、そしてその後生実にほど近い浜野本行寺へ参って、ここで宿をとるわけですね。そ

してその後一二月の一四日・一五日、千葉の妙見、先ほど申し上げました千葉の町の中心になるわけですが、ここで三〇〇正の競べ馬を見学したと、そして一六日には延年の舞というのを見学したと著されています。それだけ千葉の町はにぎやかで華やかだったということがいえるかと思えます。そしてその後一七日・一九日と生実の原胤隆の屋敷で連歌の会を催しまして、再び浜野本行寺に参りまして、その後江戸に向かって帰って行くわけなんですけど、この時に面白い記述がございます。検見川の宿についているのが出てくるんですね（資料12）。

本来検見川に泊まる予定ではなかったんですが浦風が激しく、海のすぐ近くの街道なので海から吹きつける風が相当きつかったようで、一月ということもございしますが検見川にやむなく宿をとったわけです。そして予定よりも早く着いてしまったのでこの検見川で連歌の会を催した。このように書いてございます。というわけで彼の通った行程というのはまさにこれからお話をしようとする江戸と東京を東京湾沿いに結ぶ道、これに該当するかと思えます。

先ほどの千葉市の中心部を見たものですが、これは一八八二年に測量したいわゆる『迅速図』でございします。そして千葉の中心地ですね（資料13）。こちらに左手のほうに西方向へ伸びるのが、江戸を通過して海岸部から稲毛方面に行く道。そしてこれが『迅速図』には東京道と出ておりますけども、現在の穴川から稲毛を経てこの先ほどの江戸からの道と合流する道ですね（資料14）。そしておそらく宗長が通ったであろう道は、この浜辺沿いの道を真っすぐ行くと生実のほうに下ることが出来ますので、千葉の町、そして生実へ行つて、その隣の浜野から帰る時はおそらく千葉市内を通らないでこの海辺の道を通ったのかなと私は想像して居るんですけども、こういう形ですね。当時の状況が、これ明治なんですけどもある程度反映してるのかなと考えます。ちなみにこちらの図以降も同じなんですけど、国土地理院の『迅速図』をベースにした「歴史的

農業環境閲覧システム」というものを使わせていただいています。そして続きまして先ほどの東京道ですね。こう参りまして、穴川のところからこう折れまして、現在のJR稲毛駅、そして京成稲毛駅の脇を通って浅間神社、稲毛浅間社のところへ出てきまして、あと海沿いを通る。これが一つの道です。それからもう一つは先ほど申し上げたように登戸のほうから黒砂を経て稲毛に入る。この二本の道が考えられるわけです。そしてその稲毛ですね。地図の下の方は少し途切れておりますが、東京道と書いてあります。稲毛の浅間神社のところから海沿いにこう伸びて、そしてここが検見川です〔資料15〕。実は検見川の宿というのはここに検見川神社がございまして、ここにぶつかって左に折れて、現在も字名を見ますと上宿、中宿、下宿とございまして、これはおそらく近世でしようけども、かなりにぎやかな宿だったことが分かります。この検見川の宿というのは宗長の紀行文にも載っていますように、永正の段階、一六世紀初頭で宿を持っていたということは、それ相当昔から街道沿いの重要な宿だったのかなと考えております。それはもちろん検見川神社の影響かと思いますが、門前町、鳥居前町でもあり宿駅でもあった。さらにここに流れてくる現在の花見川なんですけども、この河口部にも当たりまして、当然水運も考えられるわけです。そして現在は直線的に花見川が通ってましてここ切られているんですけども、ここに大久保城という中世のお城がありました。現在もその先端が辛うじて残っております。ですからこのお城はやはり水運とか、ちょっと離れてますけれども陸運、これをにらむことができる位置にあるのかなと考えております。そしてその北側のほうに、北西方向に幕張の町がありますが鍵の手状に克蘭クしてますね。この幕張も先ほど申し上げた馬加康胤まかやすたねという千葉氏の一族がおりますので、やはり古い町であったかと考えております。そしてこれが幕張の町なんですけど、さらに江戸方面に伸びていきますと鷺沼、久久田、谷津と、現在の津田沼と称される町場が連続してございます〔資

料16〕。鷺沼といいますと『吾妻鏡』の中に出てまいりますけど、源頼朝が安房へ上陸した後現在の東京を経て鎌倉に入る。その途中でここに宿をとつてます。そしてここへ御家人たちが参集するという記事が『吾妻鏡』の中に出てくるわけですが、頼朝がここに宿をとれるぐらいですから鎌倉時代の初期にはかなりの宿場町として存在したんではないかと、このように考えております。そしてここを過ぎますと船橋に入ります。船橋大神宮があり、そしてここに中世の湊があったというように考えられているわけですけども、この船橋につきましては後ほど道上先生のほうから詳しいご説明があるかと思えます。この船橋を過ぎていきますと中山に至るわけですね〔資料17〕。

さて、この中山にしましては一点先に飛ばしますけれども面白い記述が文書の中にあります。それは千葉市立郷土博物館に所蔵されていまして『原文書』、この中の「千葉胤富書状」というのがございますが、これですね〔資料19〕。これ郷土博物館で出されている『戦国時代の千葉氏』という図録から写真を取らせていただきましたが、この文書は何を意味してるかといいますと、小田原にいた北条氏が千葉のほうへやってくる。明後日一九、小田原を打ち出されべく分に候。次面白いですね。「市川の船橋をば、高城受け取り早々最早かけ候」。「市川の船橋」というのはなんだろうというのと太日川に、現在の江戸川に舟橋を、船を並べてその上に仮設する臨時の橋ですね。これをかけさせると。これを小金城の高城がやれと、このように言われているわけです。そしてさらにこれですね。「氏政中山辺に着陣の上」と出てまいります。この中山辺に氏政が陣をとることがこの「胤富書状」から分かります。戻させてもらいますが、これは現在の法華経寺に当たりますね〔資料18〕。本妙寺。そして小栗原村とありまして、ここずつと行きますと市川、そして現在の江戸川、太日川を渡って小岩のほうに至るわけですが、そこに船橋をかけると。そしてそれを渡ってこの中山辺に陣をとるといこう

となんですね。というわけでこの氏が行軍するルートはまさにこの道であったということが分かります。そしてその先なんです、現在の東京都に入りどうなるかといいますと、ここに市川の船橋をかけたんだと。いわゆるこれ千葉街道です（資料20）。直線に行きますと小松川を経て江戸の市中に入っていく。実は下総と武蔵を結ぶ道はもう一本ございまして、市川から北上して松戸まで上ります。そして松戸を渡って葛西、そちらから江戸に入っていく道もあるわけなんです。どちらかというとそちらのほうが一般的ではなかったかと考えられますが、行軍する関係でできるだけ最短距離を行ったんではないかと思えます。葛西を回るとかなり大回りになってしまふんですね、松戸からまた下りてきて市川に。それよりは時間を急いでますから直線的にこう入って船橋で市川を渡り、そして中山まで。ちょうど中山辺りは一日分の江戸から出て行軍して一泊するぐらいの距離というふうに考えております。というわけで今見たのは千葉と江戸を結ぶ道。これは文書史料などからも証明できたということですね。

四 千葉と東上総を結ぶ道

続きまして二本目は千葉と東上総を結ぶ道ということで、これは実は東金街道それからもう一つは大網土気街道。この二本があるわけです（資料21）。ところが現在の、私も東金の住人なんですけども、東金街道といますと都町を通って加曽利とかを経て行く道。これを思い浮かべられるのですけれども実は昔はそうではなくて、ここに書いたように猪鼻城下から真つすぐ、後で地図で見せしますが、参りました仁戸名まで行きます。ほぼ一直線ですね。現在の青葉の森公園を突っ切るわけですが、そして仁戸名で大網街道と東金街道に分かれるわけですね。東金街道のほうは川戸、それから都川支川を渡りまして、今の太宮台ですね。太宮、それから真つすぐ行って平山、そして川井、平山で実は生実のほう

からの道と合流するわけですが、さらに川井町、そして野呂で現在の国道一二六号線と一緒になるわけですが、当時は一二六号線に相当する道はなかったわけですね。細い道はあったんでしょうけども。野呂から中野のほうへ入って行って山田台、そして東金。こういう道が当時の東金街道だった。そして大網街道というのは仁戸名から分かれまして鎌取へ、野田、当時は野田といいましたが現在の緑区の誉田町です。そしてあとはいわゆる現在の大網街道とほぼ一緒ですね。土気のほうへ来て大網へ。

こういう二本のルートが考えられるわけなんです、ではこの東上総と千葉をなんで結んだかといいますと、やはり戦国時代はこの土気には土気酒井氏、東金には東金酒井氏という千葉氏とか原氏とはくつついたり離れたりする氏族がおりました。そういうことで一緒に連携してるときはいいんですけども、対立状態になりますとかなり緊張状態になったと思います。そういう意味でもこの二つの街道というのは重要だったかと思えます。

それではこの辺詳しく地図で見たいと思います。こちらが猪鼻城ですね（資料22）。猪鼻城の下を通って、ずつと行きます。これは舟田池ですね。現在の千葉県立中央博物館のあるところです。そして現在の青葉の森公園を通りまして、真つすぐこうやって来るわけです。そしてその分岐なんです、今申し上げたこの舟田池ですね。こう入ってきますまして、現在の中央区松ヶ丘町に至ります。ここで道が分かれるわけです（資料23）。真つすぐ直線で伸びるのが旧大網街道です。現在の大網街道はどうなってるかというと、メインルートはここから、東金街道はこちらに伸びるんですが、こちらへ曲がりましたここで合流します。そしてこの先は今の大網街道とほぼ同一だったかと思えます。ですから現在の大網街道はこのような形でいってわけですね。昔はここから直線で分かれて、この辺現在の千葉東病院がありまして道自体はなくなっ



けです。昔の大網街道はこのまま行つたわけですね。

五 東金街道

それではこの東金街道からご説明申し上げたいと思います。東金街道はここで大網街道と分かれまして、仁戸名から入っていくわけですが、そしてここで都川の支川しせんがありますね、都川支川、これを渡って台地上に上がり、現在の太宮台方面に行くわけです。先ほど出てきました長峰は築瀬さんのご研究によりますとこの辺一帯を指す。そしてここには彼が注目してる栄福寺というお寺がございます。そして城郭から見ますと、この渡河地点をにらむかのように城山城というお城があるわけですね。ですからまさにこちらから仮に敵が攻めてくると城山城で守るっていう意識がある。そしてさらにここ

には仁守寺じんしゆじというお寺と、すぐ隣に八坂社がございます〔資料24〕。これがなかなか面白いんですけれども、この仁守寺というのは現在曹洞宗のお寺としてありますけれども、実はこのご本尊、法衣垂下式ほうえすいかしきの木造釈迦如来です。ここにあった千葉市教育委員会の説明によりますと、ご本尊は南北朝期のもものではないかと推定されております。そしてさらにすぐ隣に市神として祭られる事の多い牛頭天王ごずくえんのうですね。王さまの王。牛頭天王を祭神とする八坂社があるということ

ですが、これは一体どういうことか。ここで一つ前に戻りたいと思いますが、もちろん一つはこの東金街道を意識したものでしょうね。寺社の位置、都川支川による河川交通、それからもう一つの陸上の道に注目したいと思います。といいますのは蘇我から小倉に抜けるこの道です。ここから川を渡って、ここは城之腰城跡じょうのこしがありますね。そしてその脇を通って小倉のほうへ、現在の小倉台まで抜けていく道です。仁戸名の西はどうなってるかという、蘇我の町なんです。蘇我の町のほうから入ってきて、大網街道、東金街道をクロスして星久喜のほうへ向う。そしてこの月ノ木貝塚ですが、これもお城だったということなんです。ここから川を渡ってここにも城之腰城跡じょうのこしがございますが、小倉方面の先はおそらく後で述べる「古東海道香取路」に合流したかと私は考えてるんですが、この南北にクロスする道、これがやはり市の置かれた一つの条件だったのかなと思います。つまり海からのものが一直線で行ってこられることができるわけです。それから東上総のほうから運ばれてきたものもここにある。あるいはこの都川支川を通じて千葉市街のほうからもものが運ばれてくるのが考えられます。非常にロケーションとしてはいい位置にあるわけですね。というわけでここに市があったという証拠はないんですけれども八坂社がある、それから水陸交通、こういう観点からここに市ができてもおかしくないのかなというように私は考えております。

六 仁戸名の位置づけについて

そしてこの仁戸名という、これも外山さん、あるいは丸井さんのご研究に出てくるんですが、仁戸名を領した千葉牛尾氏うしのおという一族がいたと、このようにいわれております〔資料25〕。この牛尾氏というのは、名字の地は実は千田庄の牛尾なんですけれども、原氏の同族です。この中原胤資なねすけが牛尾氏を初めて名乗って仁戸名に入ってくる。時代でいいますと先ほどの享徳の乱の始まりから数十年後、おそらく一五世紀終わり

近くなつてからかなと思います。この仁戸名というのはやはり原氏とも深い関係があります。仁戸名の地理的環境を見ますと、先ほど申し上げましたが都川支川に面して四キロほど上流には千葉氏がいつとき本拠にしていた平山城があります。その前面の防御的位置を占めるということがいえると思うんですね。それから二点目は先ほど申し上げましたが東上総の土気酒井氏、東金酒井氏、この本拠地向かう街道が通つてます。さらには今申し上げた蘇我から仁戸名、長峰、小倉を経て「古東海道香取路」に通ずる道。これらを考えますと、おそらく原氏がこの仁戸名にいたというのは、このためだと考えられます。

そして東金街道に戻りますが、川戸で渡つて東へ行き、現在の大宮台を突つ切つて、「中野村へ至る」とありますから、平山町になります。南西から来た道が実は生実へ直接行つていっているんですね。つまり当時の東金街道は野呂のほうから入つてきて川井町を経て、そして平山から大宮を通り、都川支川を経て川戸町、仁戸名に至ります〔資料26〕。そして途中の平山町の一画から下りる道が生実原氏の本拠である生実城へ直接通ずる道です。ですから東金酒井氏と原氏というのは実は長らく同盟関係を結んでおりましたが、その東金酒井氏から見ると、この道を通ると直接生実城へ行くことができました。ですから東金酒井氏が千葉の町へ行くのも生実へ行くのもほぼ同じような距離ということがいえただけですね。ここ平山町の合流地点を進みますと、川井町を経て野呂のところまで現在の国道一二六号線と合流しています〔資料27〕。しかし、当時はこの道しかなかつたということ。現在この先がいわゆる宮田の変形五差路といいますが、ちょっと複雑な交差点になってますが、当時はこれはなかつたのです。後に大正年間になりますと、ここから現在の一二六号線に相当する道が加曽利方面へ行くことが地図では確認できます。明治一〇年代の段階ではまだこちらの道が通つてませんでした。ですから江戸時代を反映して思うんですが、旧東金街道はこういう

かたちで伸びていたことが分かります。

七 大網街道

それでは戻りまして旧大網街道です。こちらをご説明したいんですが、仁戸名までは一緒です。その後、これは実は鎌池公園っていう、この右の写真の左手のほう公園になってますが、実は当時鎌池と呼ばれた、明治の『迅速図』に載る池があったんです。文字通り鎌のような、こういう湾曲した池でした。現在は埋め立てられてこのように公園化されています〔資料28〕。左の写真はその鎌池公園から千葉市街の方を見たところですね。坂を上つていって、仁戸名の合流地点のほうへ向かう道。こちら逆に大網方面に行くんですが、現在は、この道は千葉東病院の敷地になりました。ここにゲートがあつて中に入れません。というわけでこちらに曲がって行くしかないんですが、当時の道はこのまま真つすぐ行つて大網街道になっていたということが分かります。これを先ほどの地図で申し上げますと、これが鎌池ですね〔資料29〕。鎌のような形をしてるといふことで、先ほどちょうどここから千葉市街の方を写真撮りました。こちらから現在のこの辺、千葉東病院になっておりますけども、こちらのほうを写しました。ですからちよつとくぼんでおまして、谷津が入つていて坂になって上つていきます。一方東金街道のほうは、台地上ずつとほぼ同じレベルで行つていて、川戸町辺りから下つていくわけなんですね。どういうわけか大網街道のほうはいったん谷を下つてまた上る。そして直線で伸びる。こういう構造をとつていたわけ。そしてこの大網街道、それから生実、平山、野呂の道が先ほど交差するところをご説明しましたけれども、ここからずつと入ってきます〔資料30〕。これを真つすぐ行つて次の図になりますが、これが現在の土気城の辺りですね〔資料31〕。今の大網街道というのはこちらのほうへ伸びていまして、この地点で当時の道は土気城のほうに上がるんですが、今の道は

この下のほうを通ってこういう形で伸びております。それから台地の上を上らないで、ここに土気城があるわけなんです。この地図には城のマークはついてないんですけども、ここに大きな土気城という、土気酒井氏の本城がありました。そして下っていくと大綱のほうへということですね。東上総を結ぶ道の大綱土気街道については以上です。

八 生実と浜野の位置づけ

さて、話はまた飛びますけれども、冒頭申し上げたように柴屋軒さいおくけん宗長そうちようが品川から生実の原胤隆の館に招かれてやってくるわけですが、ここでこの生実近辺について少し見てみたいと思います。明治の『迅速図』でも当時の生実城の状態がはっきりわかります〔資料32〕。これが本丸になるんです。ここに城下町がつくられまして、ここでクランクしてこちらに伸びていくと先ほど申し上げた平山町の東金街道との合流地点に向かうわけですね。ここにおそらく原胤隆の館があったと考えられております。そしてやや離れたこの浜野の町に本行寺、宗長が宿泊した日蓮宗のお寺ですね。これは日蓮宗妙満寺派の房総の拠点になるお寺でもあります。日泰上人にったいしやうにんのお寺です。そしてこのすぐ隣といいますか、本行寺も一画に入るといふ説もありますが、ここに生実藩蔵屋敷と呼ばれる、これ実は中世の平地城、平城ひらじやうですね。これがあつたといわれています。ここは何回か発掘も行われまして当時の遺物も出ておりますが、ここに実は戦国期になると北条の軍勢などが入ってくるわけですね。おそらくこの海を渡って船でやってきたと思われませんが、「本行寺文書」の中には本行寺の僧侶がやってきた北条の軍勢に対してあいさつに行つてどうしたこうした、こういった文書も残ってるぐらいで、この浜野の湊、これ戦国期になりますと千葉の湊と同じような重要性を帯びていたのではないかとそのように考えております。先ほど東金酒井が平山町のところから真つすぐ来るとこの生実に来られたと申し上げましたが、実は「鶴沢文

書」という、東金酒井氏の家臣鶴沢氏が残した文書がございまして、それによりますと天正一八年（一五九〇）の小田原合戦のために東金酒井氏の当主政辰まさしきは小田原城に詰めております。そうすると留守を預かっていた鶴沢氏らに対していろいろ事細かく指示をしてるんですね。これが「鶴沢文書」として残ってるわけですが、その中には「浜」に、この浜野のことですが、兵糧を持つていかうかそうということがいろいろ書いてある。あるいは必要なものを「浜」へと指示しています。つまり東金酒井氏にしてみると、小田原まで物資を運ぶには千葉の湊ではなくて、この浜野湊を使つていたということが分かるわけです。天正一八年ですから東金酒井氏も北条氏の支配下に入っています。つまり原氏と同じ支配下に入ってるわけですが、その生実の原氏の支配していた浜野の湊に物資を送るといふことが「鶴沢文書」からも読み取れるわけです。この点からも東金街道、それから分岐して生実に来る道、これは酒井氏にとつてかなり重要な道だったと考えられます。そして話は戻りますけれども、宗長が帰る時に胤隆の屋敷から本行寺に来て泊まるわけですね。本行寺から千葉方面に行くわけですが、おそらくこの海沿いの道、蘇我を通過して千葉の結城、そして千葉市街を通らずにそのまま登戸のほうから来た道に合流して検見川に向かったと、このように考えております。

九 千葉と本佐倉を結ぶ道

それでは三点目なんですけれども、千葉と佐倉を結ぶ道ということでお話をしたいと思えます〔資料33〕。この千葉と佐倉を結ぶ道というのは先ほども申し上げましたように、千葉氏が享徳の乱をきっかけにして本拠地を千葉から最終的に平山、長峰を経て佐倉へ移す。そうなつてきますと千葉と佐倉を結ぶ道というのは、やはりかなり重要になつてくるというように考えられるわけです。この道はつまり「古東海道香取路」ですが、佐倉市の神門かむらというところがございまして、ここまでは佐倉藩



が年貢を寒川湊に津出しするのいつとき使っていた「南年貢道」というのに該当します。ほぼ現在の国道五一号線と考えてよろしいかと思えます。これが一本。

さらにこれは案外知られてないんですけれども、途中まではこの香取路と同じ道を通るのですが、若松町の先から実は一本違う道を通って、そこから四街道の吉岡の交差点のほうから四街道市街のほうへ参りますと現在乳酸菌飲料の工場がありますが、そこに出てきてそこからさらに山梨方面へ向かう。そして山梨から鹿島川を渡りまして、佐倉市の大篠塚というところに渡る〔資料36〕。そして大篠塚からはほぼ一直線上に現在東関東自動車道で途中切れておりますが、真つすぐ行きますと石川追分（佐倉市石川）というところに今も実は追分を冠した食堂がございます。

まして、ここで道が合流します。そこに江戸後期の道標、道しるべが今も残っておりますが、それを見ますと「千葉道」「東金道」と出ているわけですね。ですから江戸時代には確実にこの道は使われていたことがわかります。おそらく私はこれは中世までさかのぼってもおかしくないのかなって考えます。といいますのは石川から佐倉市街のほうに向かって高崎川を皿田橋という橋があるのですが、その辺りで渡って大蛇町に上がりまします。そして大蛇町から上代を経て本佐倉、酒々井町の方へ行く。

こういうルートが考えられるわけですね。これが二本目です。

そして三本目が、これは外山さんのご研究にも詳しいんですが、近世の「北年貢道」です〔資料34〕。千葉の高品、そして四街道から四街道市亀崎、佐倉市の羽鳥を経て佐倉、現在の佐倉市です。そしてそこから本佐倉に至る道。これが北年貢道です。この三本、南年貢道も含めると四本の道が考えられるわけです。

それではこれからそれを見ていきたいと思います。古東海道香取路と申し上げたのは、実は古代の研究によりますと上総国府のほうから常陸国府、現在の石岡市へ参るのにほぼ現在の五一号線のようなルートを通って行ったのではないかとされています。そして千葉市には河曲駅、現在の千葉市の中心地辺りにあったかと推定されていますが、この駅に行きますけれども、実は上総国府のほうから来てこの千葉市街にあったと思われる河曲駅をショートカットして、香取のほうへ向かう道があったと考えられています。残念ながら推定経路はまだに明らかになっていません。ただこういう道が古代からあった、そしてこの道は古代の研究家の方たちは古東海道香取路とおっしゃってます。この香取路なんですけれども、今は千葉市街のほうから来まして貝塚町を経てここでもクランク、この辺桜木霊園の辺りですが、これを北上して四街道方面に行く。それからもう一本はここですね。貝塚町から曲がって、これがいわゆる北年貢道に該当します。これは先ほど申し上げたように外山さんのご研究で詳しいですけども、ここにそれぞれお城がありまして、千葉の町が里見氏によって攻められて取られてしまう時があったわけですね。そのおかげで千葉氏の当主が千葉の妙見で元服の式を挙げられなくて、本佐倉城の妙見で元服を行ったという記述がありますが、いつとき里見氏に取られてしまった、占領されてしまったこともありまして、その関係もあってここに高品城と廿五里城というお城があります〔資料35〕。後ほど場所はお見せします。この道から本佐倉のほうへ行くのを防ぐ最

前線になっていた、そういうお城があります。というわけでこの北年貢道、それから古東海道香取路というこの二本の道、これをご紹介します。今申し上げた高品城、これ。廿五里と書いてツウヘイジと読みます。これ高品城ですね。道がこういうふうに来ておりまして、こちらのほう四街道方面に参ります。ここに廿五里城というのがあります。この廿五里城につきましては、これも外山さんのご研究に詳しいんですけども、当時、「寺山の城」というように出てまいります。文書の中で「寺山の城」と出てきて、ここに大須賀氏が、現在の成田市の松子と助崎に本拠を持っていた大須賀氏が在番していました。ところがちょうど永禄年間に里見氏が香取へ侵攻しますね。富田台（旧小見川）に里見の軍勢が上陸したので、在番が終わったばかりで悪いけどもそっちへ行ってくれというような内容の文書が出ております。この廿五里城だと考えられます。ここに在番してちょうど里見氏の脅威から守るということでしたわけですが、高品城、そして廿五里城というのが。こういうことが分かります。

十一 古東海道香取路

そして香取路のほうですね。古東海道香取路のほうですけども、途中はだいぶ省略いたしますけれども、現在の国道五一号線の脇に道があるのがお分かりでしょうか。これが先ほど申し上げた、途中から、若松の辺りから一本分岐しまして、現在も道としてしっかり残っています〔資料36〕。ここは吉岡の交差点ですね。ここから四街道市街のほうへ入っていきますと、ちょうどこの辺に現在乳酸菌飲料の工場があるのですが、ここで合流しまして、現在は四街道市街地につながる道がありますが、これには載っておりません。これを直進しますと山梨のほうへ参るわけですね。というわけでもう一本の道がここを通っています。先ほどの石川追分に抜ける道ですね。古東海道香取路に話を戻しますが、実はもう

一本この川沿いに道があるんです。ですから昔の道はこちらだったのかなとも思いますが、この辺は低湿地ということではなかなか道の維持が難しかったというせいもあって、台地上の道も使われていたという考えもございます。正直言ってどちらが本道なのか分かりませんが、この川沿いに入っていくとおそらく若松のほうで合流すると思われる道、それから台地上をフラットですから真っすぐ馬渡方面に向かった道。この二本があったと、このように考えております。そしてその四街道からさらに佐倉のほうへ向かってまいりますと、ここは馬渡の宿ですね〔資料37〕。この馬渡というのは『源平闘諍録』の中にも「白井馬渡の橋」と出てきて、かなり古くから、鹿島川の渡河点として平安時代の後半辺りから重要な道でした。そしてここに宿ができるというのは当然の流れですね。だいたい川の両岸に宿が設けられることが東海道などでもよくあります。そして私が注目したのは実はここに、現在は千蔵寺せんぞうじというお寺になっておりますけれども、馬渡馬場館跡というのがあります。現状はやはり土塁がぐるっと巡って館という雰囲気は残ってるんですが、この「馬場」という名称に注目しました。馬場というのは通常武士の館、屋敷の近くにウマの調練場といいますが、館に伴う馬場というのがございますね。ところがもう一つ馬場には物資の集積所という意味もあるということなんです。わたしはこの馬場というのは、その後者の物資の集積場ではないかと考えているわけです。といいますのはここを流れている鹿島川、かなり湾曲しておりますが、ここから印旛沼に抜けられるわけですね。冒頭申し上げた上代郷の年貢を小見川まで出して、小見川から香取内海をずっと来て印旛浦に入る。そして、印旛浦から陸送した。その一つの候補地として私はこれを考えたいんです。この辺に荷物を上陸させて、ここから古東海道香取路を陸送して千葉の湊へ持ったのかなと。これはやはり最短距離なんですね。白井まで持っていくという手もありますけども、白井から千葉の湊まではここよりは離れています。やはり一



つの候補地として、馬場という地名からなんですが、それとある程度整備された古東海道香取路が通っていた道ということからこの馬渡が上代の年貢の上陸地点というように考えております。

そして香取路は鹿島川を渡りますと坂になっておりますが、神門の交差点になります。これは、現在は十字路になっていて、佐倉市街のほうに行くのが近世では「佐倉道」と呼ばれています。この先、今は国道五一号線は酒々井方向へ真っすぐ伸びる立派な道になっていますが、当時は地図上に細い道で描かれています。当時というのは明治の『迅速図』です。しかし実際の香取路は私に次のように考えています。この先は実は本佐倉城の二十周年記念講演会のほうでお話ししまして、そちらの報告書も出てますので詳しいルートはそちらをご覧くださいただきたいんですが、佐倉市宮本から高崎という

ところが、佐倉市宮本から高崎というところへ渡って、高崎から今度八木という集落の中を経て最終的に長熊というところの台地上がってくるわけです。この八木の中に実は古代の官道ではないかという遺跡、八木山ノ田遺跡というのが発掘されています、そこから両側に溝を掘った道が検出されています。おそらく私はこれが古代の古東海道香取路ではないかと考えたわけですが、このように考えますと、やはりここから佐倉市街のほうへ行かないで、今述べたかたちで香取路が伸びていたと考えると

ります。

十二 戦国期の千葉の町

そして再び中世の千葉ということに戻りますが、千葉氏が本拠を佐倉、現在の酒々井町本佐倉、それから佐倉市の大佐倉、ここに移してから千葉の町は一体どうなっていたのかということについて述べます。これに関しましては外山さんもおっしゃってますけども、結論から言うと江戸湾の水運を背景に、妙見宮などの寺社の門前町としての性格を持った都市的な場として繁栄していた。まさにその通りだと私は考えます〔資料38〕。私はもう一歩進めて都市と言ってしまうだけでも、門前町、湊町、そして市場町という性格を戦国期は持った町場だった。それが前に述べた妙見の祭祀に表れているのではないかと考えます。ただし、この千葉の町は残念ながら千葉氏が本拠を移動させたことによりまして、千葉氏の支配下というよりは生実原氏の支配下に入ったと考えられるわけです〔資料39〕。この辺は丸井さんや外山さんのご研究にもありますけれども、千葉氏の崇拜する妙見宮、これも原氏の支配下に入ってしまったている。しかし、歴代千葉氏の当主の元服は千葉の妙見宮で行うのが原則になっていました。というわけで妙見の千葉氏の氏神としての性格は色濃く残っていたのですが、その妙見宮さえも原氏が支配する。そういう状況になってるわけです。ということと戦国期の千葉の町というのには、千葉氏の影響よりは生実原氏の影響のほうが色濃く出ていたというふうに考えることができるかと思えます。そして先ほど申し上げた浜野湊も忘れてはいけません。

以上、申し上げたことを整理しますと〔資料40〕、鎌倉期から南北朝前期にかけては千葉湊の重要性というのには、やはり称名寺を中心とする房総の律宗寺院の隆盛に支えられていました。しかし、外護者の北条氏の滅亡によってこれが衰退していくわけです。そういうこともあつ

て律令寺院が禪宗とか日蓮宗、真言宗に次々に改宗されていく中で、千葉湊の重要性は相対的に下がっていた、減じられたのかなと思います。代わって今申し上げた生実の原氏の外港ともいべき浜野湊が軍事的にも経済的にも重要視されるようになった。この辺は先ほど申し上げた「鶴沢文書」からも裏付けすることはできません。とは申し上げても、先ほど馬渡馬場館跡のところでも申し上げましたが、印旛浦から最短で陸送できる、そういう地理的な条件から千葉湊の価値は依然としてあったのではないか。ただ築瀬さんが推定されている潟湖、ラグーンとしての結城浦、あるいは船橋湊の例を見ても、中世以降次第に埋まってしまおうというところもあって、恐らく戦国時代の後半辺りは潟湖の部分ではなくて、都川の河口の寒川のほうへ移っていた可能性が高いと考えております。

おわりに

最後に本日のお話の内容をまとめたいと思います〔資料41〕。

一点目は、繰り返しになりますけれども、千葉の町というのは享徳の乱の初期に起きた千葉宗家の滅亡、これを境にしてそれ以前とそれ以後では都市としての性格は変わったんではなからうか。前半は守護所としての性格が強かった。後半は原氏の支配下に入るといこともあって門前町、湊町、そして市場町としての性格が強くなった。とはいえ千葉湊の重要性は維持できていたのかなと考えます。

二点目です。鎌倉時代から南北朝前期にかけましては、千葉湊とそしてそこにあつた光明院、これは称名寺、そして東禅寺と深いつながりのある律宗寺院ですが、その両者が下総に点在する金沢称名寺の年貢運搬のための中継地として大きな役割を果たしていました。先ほどご紹介した文書の他にも、光明院の恵釵が東禅寺の湛睿たんずいに報告してるといことも、年貢を売り払ったという文書もございます。これを見ると千葉湊に

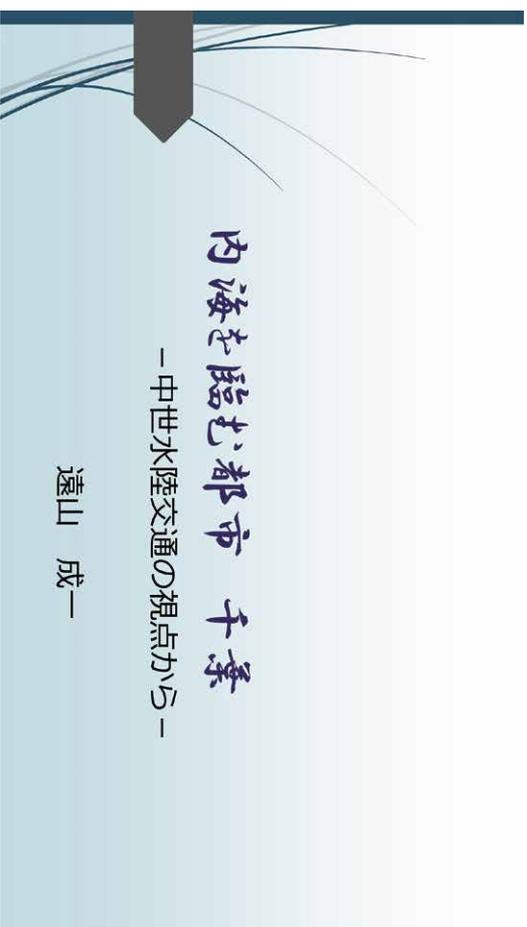
はそういう昔でいう「問と」です。ね。「問丸とまる」とも言いますが、これに相当するような業者もいて、年貢を預かっていてそれを売却する。あるいは年貢を保管しておく。千葉にそういう問とがあったという証拠はないんですけども、富津などには「問と」があったと「金沢文庫古文書」にも出てまいります。おそらく千葉にも同じような業者がいたのではないかとはいふうに考えてます。というわけで千葉湊と光明院が大きな役割を持っていた。

そして三番目です。鎌倉時代の北条氏の滅亡後、律宗寺院がどんどん衰退していくことによって千葉湊の重要性はやや落ちたと思われませんが、先ほどから申し上げてるように古東海道香取路の存在、これは香取内海と江戸内海、二つの内海を最短距離で結ぶという重要な道もあつた関係で、浜野湊と並んで内海の湊として重要な位置を占めたんではないかと思われれます。

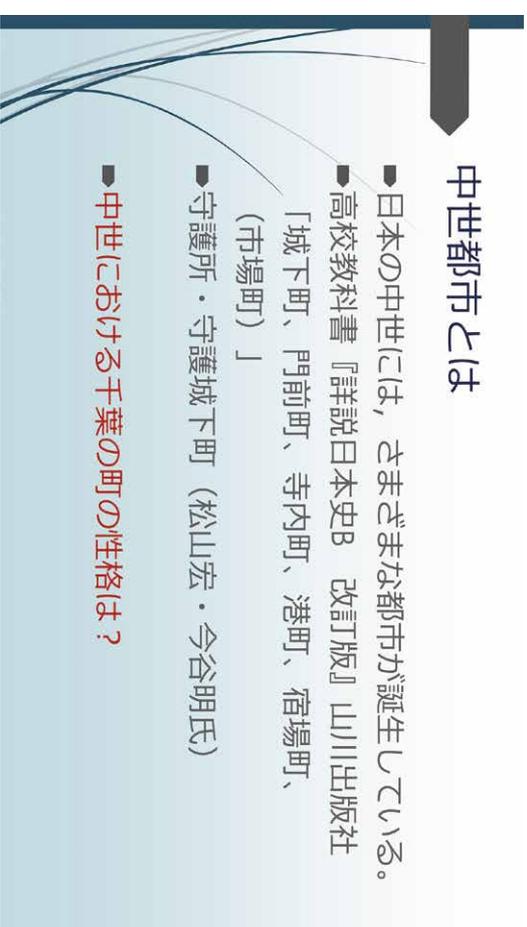
そして四点目ですが、享徳の乱以後は文明年間には千葉氏の本拠が本佐倉へ移りました。ですから千葉の町は今までの主である千葉氏がいなくなつたわけです。代わりに生実の原氏の勢力下に置かれることとなります。しかし冒頭申し上げた宗長の記した『東路のつと』でも分かるように町衆ちやうしゆといいますが、町の人たちの力はまだまだあつたと思われれます。妙見の祭礼に見られる都市のにぎわい。これは千葉氏が去つた後も生き続けたということがいえるかと思ひます。

以上をもちまして私のお話は終わりにさせていただきます。と思います。

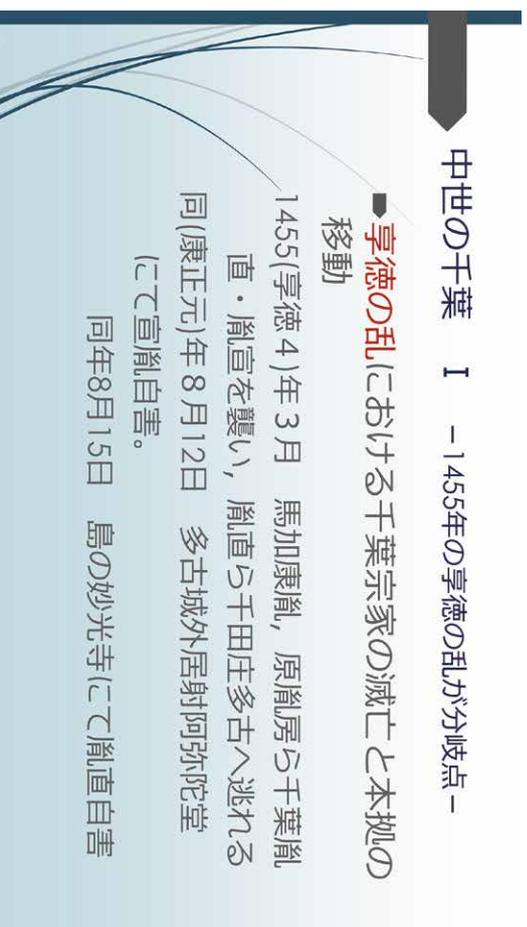
資料 1



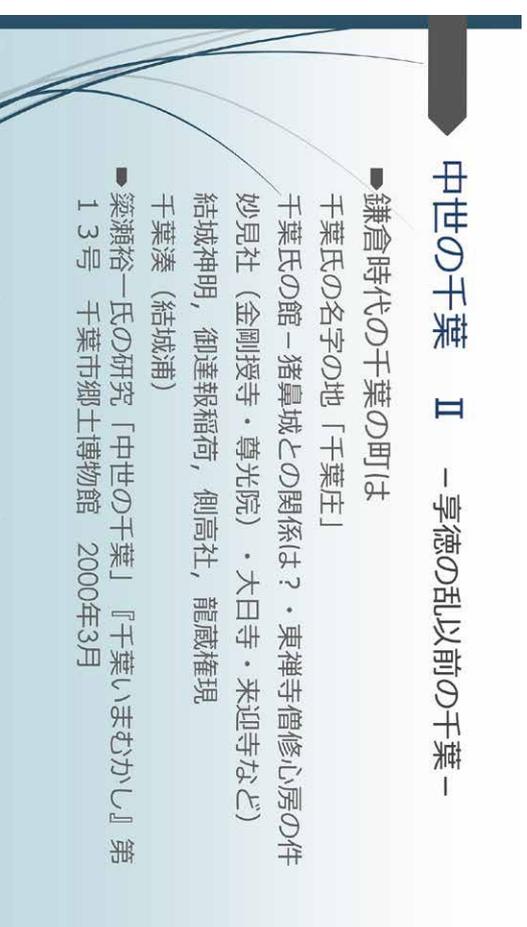
資料 2



資料 3



資料 4



資料 5

中世の千葉の町推定図

築瀬裕一氏作図 (出典: 「中世の千葉」 『千葉いまむかし』 第13号)
 「迅速図」との比較 (歴史的風景再現協議会スライド)

資料 6

鎌倉時代～南北朝時代前期の千葉湊

- 金沢称名寺の寺領東庄上代郷(現香取郡東庄町・旭市)
- 年貢運搬の中継地としての千葉湊
- 千葉堀内光明院の恵劔
律宗寺院金沢称名寺と千田庄東禅寺との結節点
宗学面および称名寺領の経営の面の両面
- 上代郷年貢の推定運搬ルート
- 上代郷～千葉湊(光明院)～(江戸内海)～六浦湊一称名寺
- 「一結に十四合売候之間、此にて取候へく候」
→「建武二年閏十月八日付温齋宛恵劔書状」

資料 7

千葉湊

「某書状」(「金沢文庫古文書」)
 出典 『千葉県の歴史 資料編 中世4 (異外文書1)』

- 「大日堂坊主御事付事」
- 「妙見」
- 元空とは恵劔を指す
光明院において、金沢と東禅寺
温齋との間の連絡を中継

⇒これらの事から、この書状は
千葉湊のことを伝えている

- 「かねさしの年貢事」
- 「金沢年貢船二入て候か」

⇒**千葉より六浦へ年貢を船で輸送**

資料 8

金沢～千葉湊～上代郷

(蒲川恒昭氏原図を遠山改変)
 出典: 「内乱期下総国における寺領経営の一面」 『千葉県の文書館』 第3号

上代郷年貢をどのように千葉湊まで運搬したのか?

推定ルート
 上代郷～小見川～香取内海～
 印旛浦～馬渡(佐倉市)～千葉
 (～は陸送, ～は水運を表す)

資料 9

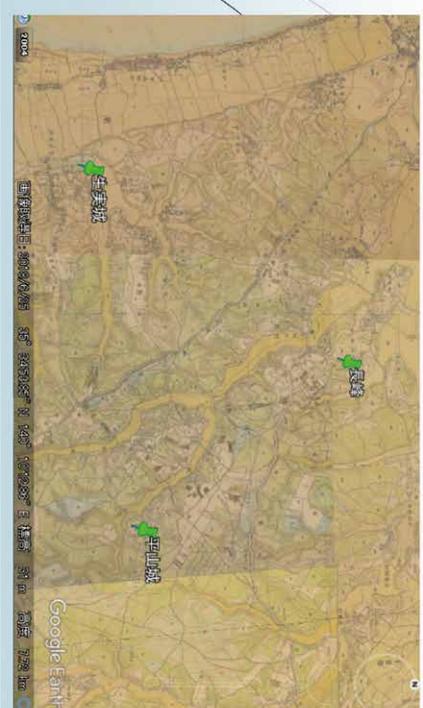
中世の千葉 Ⅲ 一戦国期の千葉一

- 本佐倉城への本拠の移転 文明 16年頃築城
平山→長崎→佐倉（『千学集抜粋』）
- 「長崎」とはどこを指すのか？
長崎＝長峰（黒田基樹説）でほぼ確定
- 長峰とは旧長峰村（千葉市若葉区大宮町）
栄福寺（北斗山金剛授寺）の存在
- 平山は千葉市緑区平山町を指す

資料 10

長峰と平山

（歴史的農業環境閲覧システム）



資料 11

1. 千葉と江戸を結ぶ道

千葉→稲毛→検見川→幕張（馬加）→鷺沼・久久田・
谷津→船橋→小栗原→中山→八幡→市川→（太田川）→小岩
→小松川→

資料 12

連歌師宗長の泊まった検見川の宿 生実の原胤隆に招かれ市川と生実を往復

永正6年(1509)

〔往路〕

- 品川→江戸→今井の津（浄興寺）→中山本妙寺→浜野本行寺
11月14日15日、千葉妙見宮で300疋の競へ馬を見学。16日には延年の舞を見学。
17日, 19日 生実の胤隆の屋敷で連歌の会を催す。

〔復路〕

- 浜野本行寺→検見川宿→市川→東小岩善養寺
宿泊の予定ではなかつたが「浦風」が激しく宿をとる。
まだ日が高かつたので、連歌の会を催す

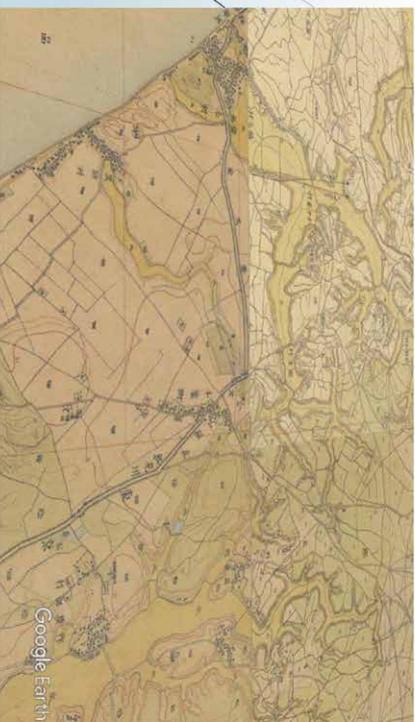
資料 13

歴史的農業環境閲覧システムより (大日本帝国陸地測量部1882年測量 [迅速図])



資料 14

千葉～穴川～稲毛 (歴史的農業環境閲覧システム)



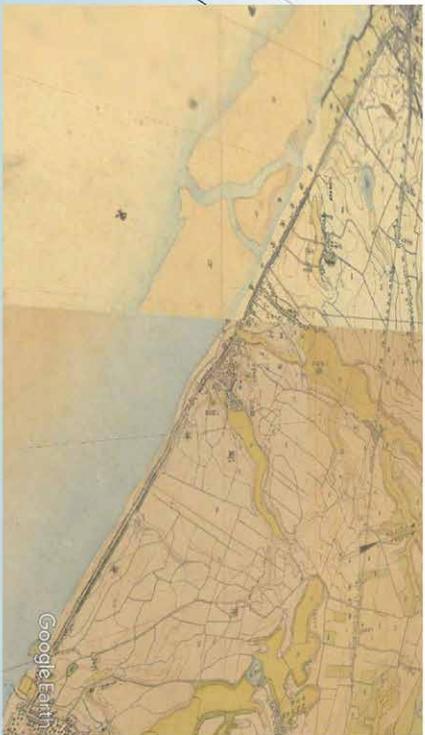
資料 15

稲毛～検見川～幕張 (歴史的農業環境閲覧システム)



資料 16

鷺沼・久々田・谷津～船橋 (歴史的農業環境閲覧システム)



資料 17

船橋～中山 (歴史的農業環境閲覧システム)



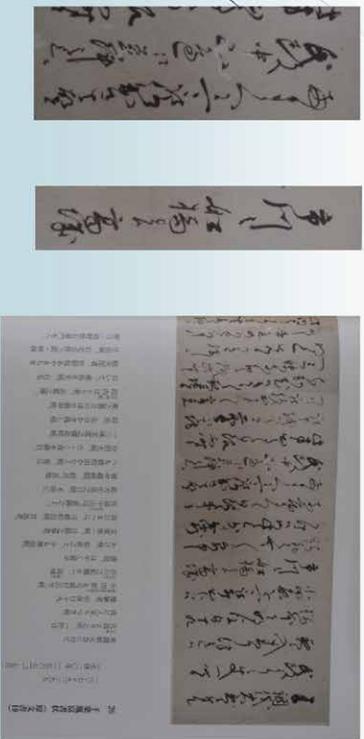
資料 18

中山～八幡～市川 歴史的農業環境閲覧システム



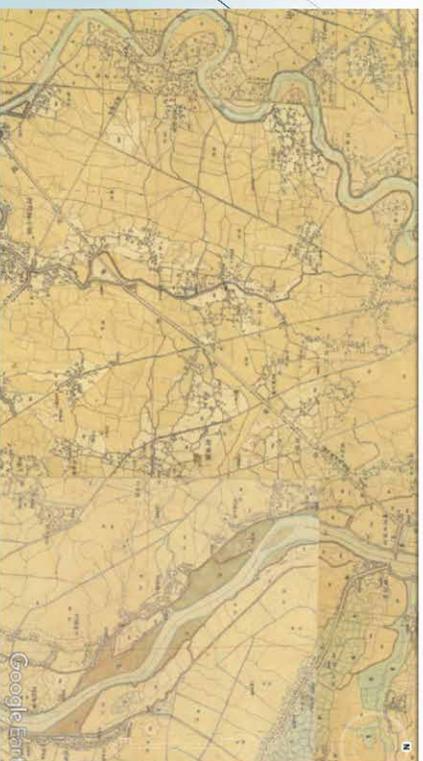
資料 19

「市川の船橋」「中山辺、着陣之上」
『千葉胤高書状』(原文書19) 『戦国時代の千葉氏』千葉市郷土博物館 2017年



資料 20

市川～小岩～小松川 (歴史的農業環境閲覧システム)



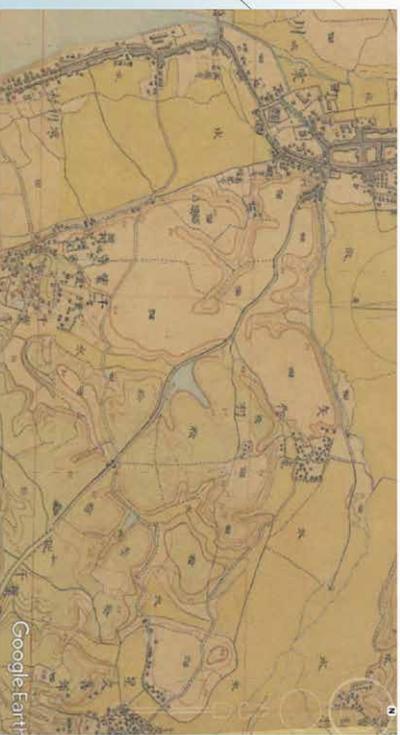
資料 21

2. 千葉と東上総を結ぶ道

- (1)猪鼻城下ー仁戸名ー川戸ー大宮ー平山ー河井ー野呂ー中野ー山田台 (八街) ー東金
- (2)猪鼻城下ー仁戸名ー鎌取ー野田(緑区菅田)ー土気ー大網

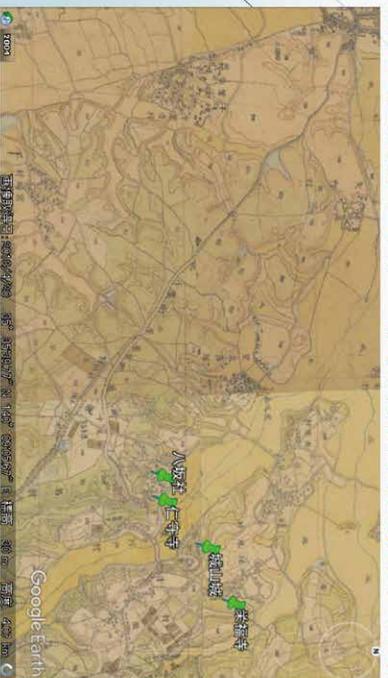
資料 22

猪鼻城下ー仁戸名 (歴史的農業環境閲覧システム)



資料 23

仁戸名の東金街道と土気・大網街道の分岐 現中央区松ヶ丘町 (歴史的農業環境閲覧システム)



資料 24

仁戸名から東金街道へ 仁守寺と八坂神社

- ➡ 法衣垂下式の木造釈迦如来坐像を本尊とする曹洞宗寺院 仁守寺
- 市神として祀られることの多い 午頭天皇を祭神とする八坂神社



資料 25

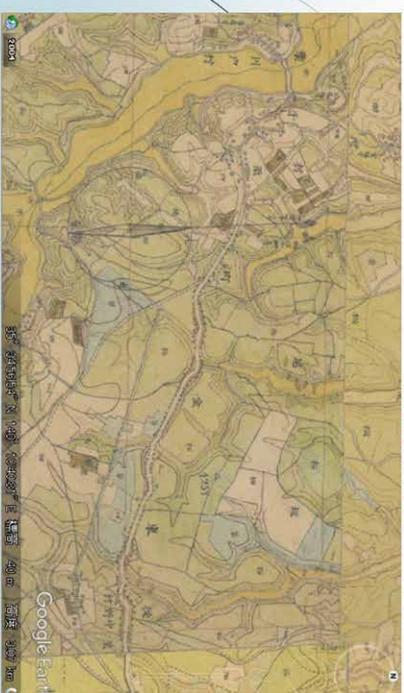
仁戸名を領した千葉牛尾氏

- ▶ 15世紀後半、小弓原氏の一族で千田庄牛尾（多古町牛尾）に由来する牛尾氏を名のる胤資が、仁戸名に入る。
- ▶ 仁戸名の地理的環境
 1. 都川支川に面し、4 kmほど上流には千葉氏が一時本拠とした平山城があり、その前面の防御的位置を占める。
 2. 東上総（土気・東金酒井氏の本拠）に向かう街道が通る
 3. 蘇我から仁戸名～長峰～小倉を経て、古東海道香取路に通ずる。

資料 26

東金街道 川戸町～大宮町～平山町

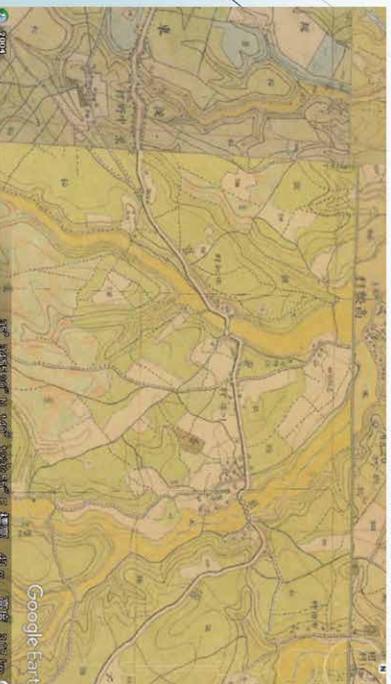
(歴史的農業環境閲覧システム)



資料 27

東金街道 平山町合流地点～川井町～野呂町

(歴史的農業環境システム)



資料 28

旧大網街道 (鎌池公園付近)

左写真 街道分岐点方向

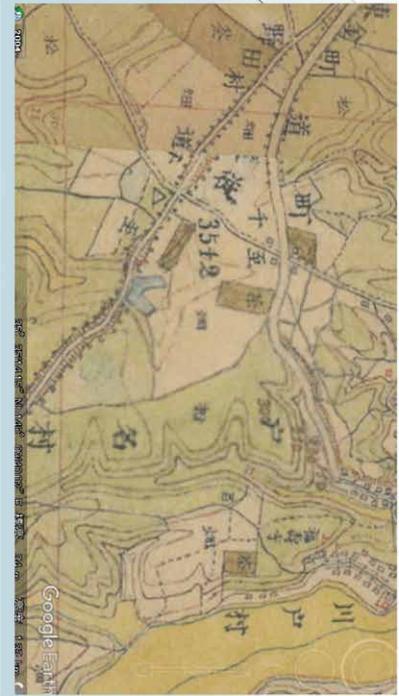
右写真 画面左が鎌池公園



資料 29

仁戸名町鎌池公園

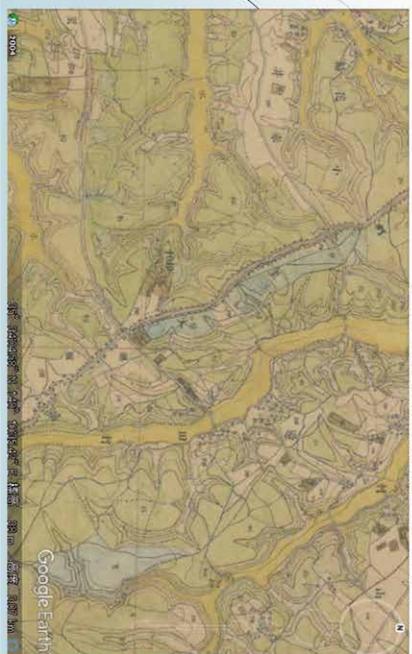
(歴史的農業環境閲覧システム)



資料 30

大網街道と生実～平山～野呂の道が交差

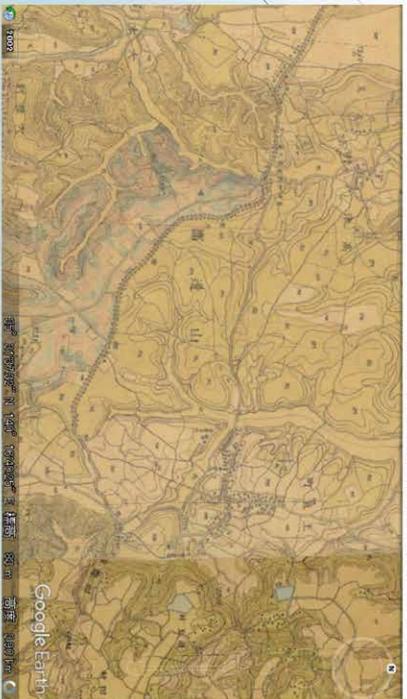
(歴史的農業環境閲覧システム)



資料 31

野田村(緑区誉田町)～土気城

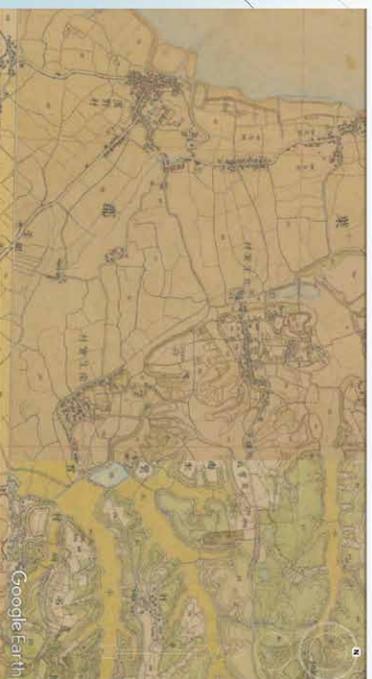
(歴史的農業環境閲覧システム)



資料 32

生実城 (北生実城・南小弓城) と浜野
生実藩蔵屋敷

(歴史的農業環境閲覧システム)



資料 33

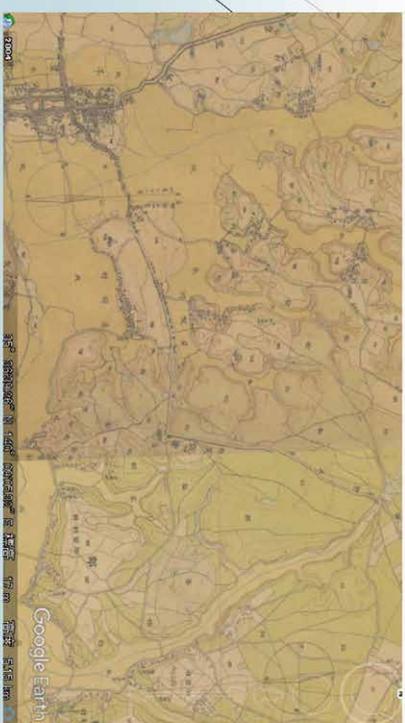
3. 千葉と佐倉を結ぶ道

- (1) 古東海道香取路 (佐倉市神門までは近世の「南年貢道」)
- (2) 山梨～大篠塚～石川追分～上代～本佐倉
- (3) 高品～四街道～亀崎～羽鳥～佐倉～本佐倉 (近世の「北年貢道」)

資料 34

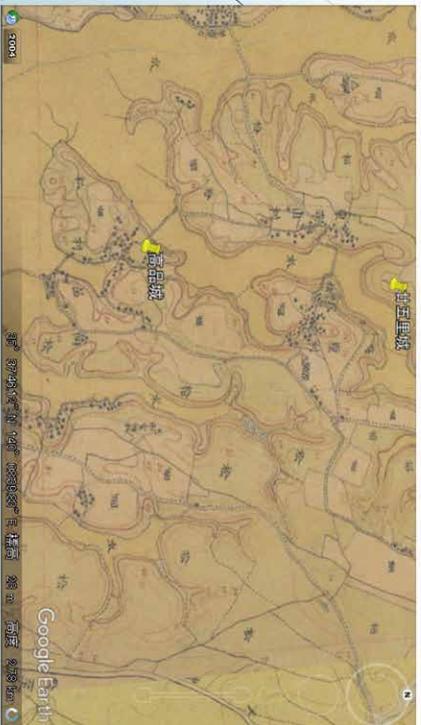
古東海道香取路と「北年貢道」

(歴史的農業環境閲覧システム)



資料 35

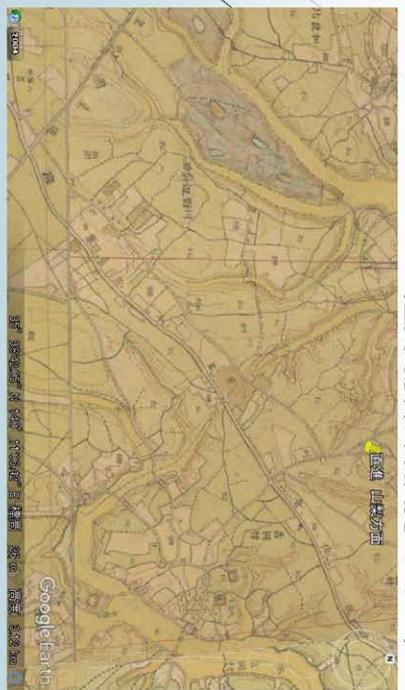
「北年貢道」と千葉の町を防衛する城郭 (同前)



資料 36

山梨～鹿島川渡河～大篠塚～石川追分

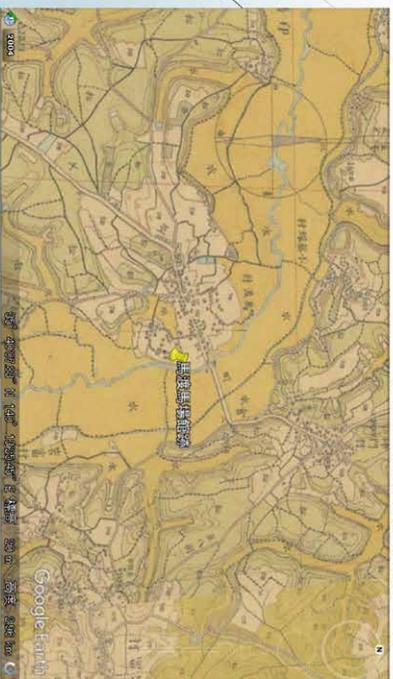
(歴史的農業環境閲覧システム)



資料 37

印旛沼と千葉湊を最短で結ぶ道

(歴史的農業環境閲覧システム)



資料 38

中世の千葉 IV-1

- 千葉氏が本拠を佐倉(現酒々井町本佐倉・佐倉市大佐倉)に移してから、千葉の町はどうなったのか？
- 宗長『東路のつと』の記載
妙見宮の祭りに、300疋の早馬が行われる
→外山信司氏によれば
「江戸湾の水運を背景に、妙見宮などの神社の門前町としての性格をもった、都市的な場として繁栄」していた

資料 39

中世の千葉 IV-2

- 生実の原氏の実質的支配下に
生実城を本拠とする原氏(里見氏)に攻撃され、臼井に本拠を移すこともあった)が千葉の町を支配していたことが、『東路のつと』の記載からもうかがえる。
- ・千葉氏の崇拜する妙見宮も原氏の支配下に
- ・歴代千葉氏の当主の元服は、千葉妙見宮で行うのを原則とした。

資料 40

中世の千葉 IV-3

千葉湊と浜野湊

- 鎌倉時代から南北朝前半の千葉湊の重要性は、称名寺を中心とする房総の律宗寺院の衰退(禅宗や日蓮宗、真言宗に改宗される)にともない、相対的に減じられた。
- 代わって、千葉の町も支配下においた生実城の原氏は、浜野湊を軍事的にも経済的にも重要視した(「鵜沢文書」)。
- とはいえ、**印旛浦から最短で陸送**できる千葉湊の価値は依然としてあったと考えられる。

まとめ

- ▶ 1. 千葉の町は、享徳の乱の初期におきた千葉宗家滅亡を境に、それ以前と以後では都市としての性格は変化した。
- ▶ 2. 鎌倉時代～南北朝時代前期にかけて、下総に存在する金沢称名寺領の年貢運搬のための中継地として、千葉湊と光明院が大きな役割を果たしていた。
- ▶ 3. 北条氏滅亡後の律宗の教線衰退により、千葉湊の重要性はやや落ちたと思われるが、印旛浦（香取内海）水運と江戸内海（現東京湾）水運を最短で結ぶ古奥海道香取路の存在もあり、浜野湊と並んで内海の湊として重要な位置を占めたと考えられる。
- ▶ 4. 享徳の乱以後、文明年間には千葉氏の本拠は本佐倉へ移り、千葉の町は生実の原氏の勢力下に置かれることになった。しかし、16世紀はじめに千葉を訪れた連歌師宗長も記したように、妙見の祭礼にみられる都市の賑わいは、千葉氏が去った後も生きつづけた。

参考文献等

- ▶ 小笠原長和「僧惠鈔について」『金沢文庫研究』106号 1964年
- ▶ 浜名敏夫「中世江戸湾の海上交通」『千葉史学』第19号 千葉歴史学会 1991年
- ▶ 丸井敬司「千葉牛尾氏に関する考察」『館報』千葉市立郷土博物館 1993年
- ▶ 外山信司「下総高品城と陸上交通」『千葉城郭研究』第4号 千葉城郭研究会 1996年
- ▶ 福田久「上総酒井氏について」『中世房総』10号 房総中世史研究所 1998年
- ▶ 遠山成一「内乱期下総国における寺領経営の一面面」『千葉県の文書館』千葉県文書館1998年
- ▶ 築瀬裕一「中世の千葉」『千葉いまむかし』No.13 千葉市立郷土博物館 2000年
- ▶ 外山信司「戦国の房総を訪れた連歌師宗長」『公開講座 人物で語る日本文化講演録2』城西国際大学 2011年
- ▶ 遠山成一「本佐倉城と陸上交通」『本佐倉城跡国史蹟指定20周年記念事業講演会記録集 敵を阻む城、にぎわう城下』佐倉市・酒々井町 2020年
- ▶ 築瀬裕一「本佐倉城とその城下の景観復元」(同前)
- ▶ 農研機構農業環境変動研究センター「歴史的農業環境調査システム」

【講演2】

中世のムラ・城をめぐるモノの動き

—遺跡からみる北総地域の物流—

道上 文（船橋市飛ノ台史跡公園博物館学芸員）

講師紹介

道上 文（船橋市飛ノ台史跡公園博物館学芸員）

聖心女子大学文学部古代史専攻、明治大学文学部考古学専攻卒業。船橋市役所に勤務し、三十年以上にわたり文化財の保護・調査に取り組み。船橋市教育委員会文化課主幹を経て、現在は船橋市飛ノ台史跡公園博物館に勤務。

船橋市内の中世遺跡や出土遺物に注目して研究を進め、船橋市郷土資料館では特別展「中世の船橋〜掘る・読む・訪ねる〜」を担当した際は、考古資料はもとより、文献資料、宗教資料などを駆使して、広い視野から船橋地域の中世像を描き出した。

本講演に関する主な論考は、

「船橋市峰台遺跡の研究―中世前半期における船橋低地の様相―」

（『房総中近世考古』第一号、二〇〇三年）

『八千代市の歴史 通史編上』（第三編中世の第七章「市域の中世遺跡」、二〇〇八年）など。

はじめに

ただ今ご紹介にあずかりました船橋市飛ノ台史跡公園博物館の道上です。どうぞよろしくお願いたします。私は考古学が専門で、長年船橋市の職員として船橋市内の遺跡の保護や発掘調査の仕事をしてまいりました。船橋も中世においては千葉氏の領域であります、地元に残る文

献資料である古文書などがとても少ない地域です。しかし発掘調査で見された遺跡や出土した資料、すなわちモノから見ることによって、これまでわからなかった中世の村、館などの歴史が少しずつわかってきました。今日はこのようなモノを通してみた当時の様子やモノの流通状況について、特に千葉から西の船橋を中心にお話したいと思います。

先ほどご紹介いただきましたが、一八年ほど前に船橋市郷土資料館に勤めていた時に、このような「中世の船橋」という企画展を担当して行い、図録を刊行しました〔資料1・2〕。船橋市のみならず、千葉市の生実城跡や高品城跡などの資料などもお借りして展示したことがあります。今日はこの図録の写真なども使いながら、遺跡から出土した中世の資料についてお話ししたいと思います。

言わずもがなですが、最初に時代の呼び方について確認をしておきたいと思えます〔資料3〕。鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、そして千葉を含む関東地方では安土桃山時代を含む室町時代の後半を戦国時代と呼んでおり、これが中世です。今日の私のお話は、発掘調査の成果から見た中世の生活および出土資料にはどのようなものがあるのかを紹介し、そこから当時の物流について考えたいと思います〔資料4〕。特に私の研究フィールドである船橋地域を中心として、千葉市の資料も交えながら千葉県北部、北総地域における中世の交易品およびその輸送経路である陸路、水路などについてお話をいたします。



一 中世房総の自然的・歴史的環境

縄文時代ほどではありませんが、古代から中世にかけて今よりもやや気候が温暖になり、海面が上昇したと考えられています。低い谷の部分には海水が浸入し海進現象があったと推定されています。その結果、現在の霞ヶ浦、印旛沼、手賀沼が太平洋岸から西側にかけてつながり、中世には「内海」と呼ばれていました。東京湾も「内海」と呼ばれていました。房総三国には二つの内海がありました〔資料5〕。古代から中世にかけての歴史を考える上で、今とは違った当時の自然環境についての考察を欠かすことはできません。房総は陸、海、河川の自然に恵まれていました。

現在の千葉県は下総、上総、安房の三国に分かれていました。それぞれに国の都である国府がありました。下総国府は現在の市川市、上総国府は市原市、安房国府は現在の館山付近(旧三芳村)にありました。こちらで見ると赤丸のあったところになります。黄色は船橋市の遺跡の位置です。古代においては東海道で結ばれていました。これが中世の道のベースになっていると考えられます。

先ほどの地球温暖化について気温の変化で見えます〔資料6〕。縄文時代は地球が温暖化して気温が今よりも二度くらい高くなりました。また古代、

奈良平安時代から中世前半も今よりも少し気温が高くなり、そして海面が上昇しました。鎌倉幕府ができた頃は中世の温暖期に当たり、現在よりもやや温かい気候でした。そして海進し、海水準が上昇して潟湖(ラグーン)が形成されました。この潟湖を利用して日本各地に湊(かた)ができたと考えられています。その後、西暦一三〇〇年〜一八五〇年頃は小氷期と呼ばれておりまして、現在よりも年平均気温が〇・五度〜一・〇度ほど低くなったようです。

これは東京湾をめぐる図です。滝川恒昭さんがお作りになった図に加筆させていただきました〔資料8〕。主な遺跡と湊、街道を示しています。船橋市は千葉氏の本拠である現在の千葉市、そして下総の国府があった市川市の中間地帯に位置しています。そして先ほどお話ししましたように、二つの内海がありました。ほかに今は埋め立てられた樺海が太平洋岸にはありました。

赤い印は戦国時代の「後北条氏朱印状」という古文書に記された主要な湊です。船橋も下総の主要な湊の一つとして記されています。現在の東京湾とその周辺には鎌倉をはじめとする湊がありました。房総では船橋、千葉、先ほど遠山先生のお話にもありました浜野、それから椎津、富津などです。「津」は湊の意味です。現在の地名にも残っています。また古代の東海道を一部踏襲するような形で東京湾沿いには千葉街道があります。船橋から臼井・佐倉方面へ向かう佐倉道もありました。これが現在の国道二九六号線の前身となりました。船橋を例に挙げれば、湊と陸路との陸海交通の交差点であったことが分かります。

房総各地の古代の終わりから中世前半ごろの荘園の分布図です〔資料9〕。赤字で書いたものは千葉県域におかれた御厨(みくりや)です。御厨は伊勢神宮の荘園でした。海や湖、沼の近くに設置されたことから「湖沼の荘園」ともいわれました。なぜ湖沼や海のそばに荘園ができたのか、それは伊勢神宮への貢ぎ物である貢納品が船、水運で運ばれていたからです。各

地の御厨は伊勢にある大湊おおみなとと海路で結ばれていました。船はたくさんの重い荷物を一度に運ぶことができませんので、当時は海路などの水上交通がとて重視されていました。水路とともに陸路も発達し、互いに重要な関係性がありました。

この図のほうを少し拡大しました〔資料10〕。西から現在の葛飾区かさいのみくりやの葛西御厨、我孫子市辺りの相馬御厨そうまのみくりや、船橋の夏見御厨なつみのみくりや、別名船橋御厨ともいいます。それから船橋北部から八千代市には萱田神保御厨かやだじんぼのみくりやがありました。成田市には遠山方御厨とやまがたのみくりやがありました。御厨は千葉氏の勢力と深く関係していたと考えられています。

四方を海に囲まれていた日本列島ですが、「津々浦々」という言葉がありますけれども、津は湊の意味、浦は海、湖、沼などのことで日本全国に見られます。さまざまな品物が湊から湊へ運ばれました。遺跡から出土する焼き物なども船で運ばれて関東地方へもたらされました。

二 発掘資料からみる中世の生活とモノの動き

(一) 中世前半期～峰台遺跡の調査成果を中心に

では次に、中世の前半、一二世紀・一三世紀・一四世紀と中世の後半、一五世紀・一六世紀に分けてお話をしたいと思います。県内全体を見ましても、中世前半期を中心とする遺跡の数は、中世後半期に比べるととても少ないのです。遺跡の性格としては館、それから集落跡と呼ばれる村、人を埋葬したお墓などが挙げられます。その中でもやや珍しい湊に關わる船橋市の遺跡についてお話をいたします。

これから紹介する峰台遺跡は現在のJR船橋駅前の一帯に位置しております〔資料13〕。現在の船橋の中心部はこの辺りになりますけれども、標高約四メートルの低い砂州上に発達した町です。峰台遺跡はここになりますね。そして中世海進でこのような潟湖が形成されていたと考えられています。「夏見潟」と呼んでいますけれども、ここに湊があったと

考えております。そしてここが船橋大神宮ですね。平安時代の文獻に載っている式内社意富比神社おひで、夏見御厨の中心地であったと考えられます。このピンクの範囲、もつと北のほうまでいきますけれども、これが夏見御厨のおおよその範囲であったと考えています。そしてここには後でご紹介する夏見大塚遺跡、それから西のほうにいきますと印内台遺跡群、東中山台遺跡群がございます。この茶色いところ、これは古代の東海道を踏襲した道と考えています。左の方、西の方へ行きますと、市川にあった下総の国府、それから東方向こちらが千葉へ向かう道です。

では、次に地理的な環境をみていきます〔資料14〕。横線は高台となる台地、それから白いところは低い谷に当たる低地、網点は砂州または砂丘ですね。船橋大神宮は砂丘の小高いところに築かれています。海から入ってくる船橋大神宮がランドマークのように見えたと思います。そして先ほど紹介した夏見潟がこの位置になりますね。峰台遺跡はここです。中山台から西側は現在の市川市になります。市川の台地上にも遺跡が広がっています。国府台には下総の国の役所である国府がありました。下総国府は鎌倉から室町時代前期の下総守護の本拠地でもありました。砂州は東京湾沿いにほぼ一直線上に発達しています。この砂州上には古代には東海道が作られていたと考えられています。ここが栗原郷の推定範囲で、古代の「下総の国葛飾郡栗原郷」に比定されています。中世には印内台、東中山台の辺りは栗原六ヶ郷といわれていたようです。船橋市東中山台は下総国府からわずか五キロメートルの近さで、古代から中世にかけての大集落遺跡があります。対岸の北側には日蓮と親交が深い千葉氏被官の富木常忍の館（中山法華経寺の奥の院）がありました。これが船橋大神宮ですね〔資料15〕。非常に宅地化が著しくなっておりますが、小高い砂丘の上にあります。

さて本題の峰台遺跡です〔資料16〕。これがJR総武線ですね。西側が船橋駅、東側が東船橋駅になります。標高約四メートルの低地の遺跡

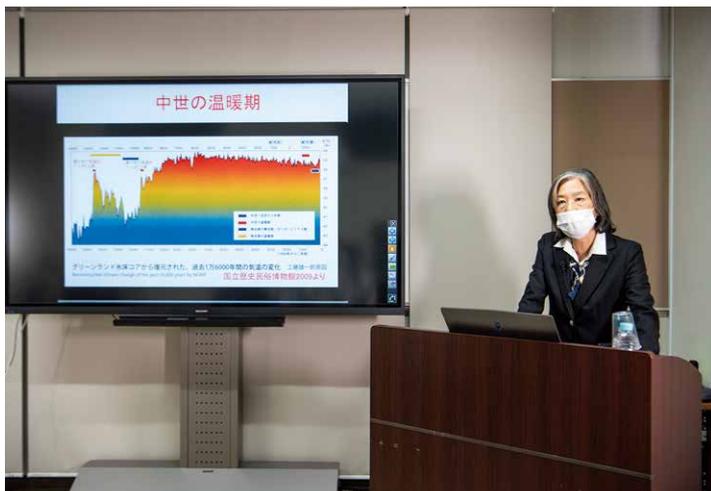
です。峰台遺跡は東京湾に近い船橋中心部に所在しています。遺跡の南側の台地上には峰台小学校があります。台地の下の低地にさしかかる斜面地を調査いたしました〔資料17・33〕。時期は中世前半を中心としています。特に二三世紀ごろの貝殻敷の道路跡や井戸を3基検出しました。また、台地裾部をテラス状に造成した跡などが発見されました。この台地の上には峰台小学校があつて発掘調査されていませんが、ここに館があつたという伝承もあり、そこから流れ込んだ中世の遺物もかなりあつたと考えています。こちらの高台が峰台小学校、その下の斜面地にかけては調査したところ、北側がJR総武線、調査前の様子を東から見たところ、斜面を調査しています。台地の下を東西に伸びる中世の道路跡が見つかっています。ここは低地で水が湧きやすいので、台地の裾部を段状に造成工事していました。道路部分にも土を盛って、そしてテラスを作り出し、なおかつ貝殻を舗装材として敷いております。土は硬く締まった状態でした。道の幅は約四メートルから六メートルと比較的広いものです。貝殻の舗装部分は幅一・五メートル前後、調査区の中では東西約四〇メートルを確認しています。井戸も近くにあることから屋敷の下を巡る生活道路であり、また周辺にいくつもある台地同士を結ぶ道路であつたと考えられます。南側との高低差が分かる写真ですね。ここに現在は峰台小学校があつて、テラス状に作り出してここに道路、北側は湿地帯になります。西側から道路を見たところですね。道の両側には側溝があります。排水機能を持たせるためだと思われます。道路を発掘中の写真です。白く貝層が見えています。人の大きさと比較すると、この遺跡の規模が分かるかと思えます。南側にあるテラスは人工的に作り出している大規模なものです。

井戸が三基見つかっています。直径三メートル前後です。井戸の中から木材や木製品が出土しています。現在も水が湧くところ、水中では空気が遮断されて木材が腐らないので、遺跡では珍しい木製品が出て

います。井戸の中からは木製品の他に常滑焼の鉢なども出ておりまして、そこから年代が分かるのですが、この井戸は二三世紀ぐらいのもので、井戸は二回掘り直していました。低地なので一メートルも掘ると水が湧くという利点があつたようです。

話を整理します。盛土造成をしてテラスを作り出して、道路を四回ほど作り替えていました。この井戸は埋め立てられて、その上に道路が作られている状況が分かりました。この峰台の道はどこにつながっているのでしょうか。峰台遺跡のすぐそばのJR東船橋駅の周辺に宮本台遺跡群という遺跡があります〔資料34・35〕。そこに区画整理前の古い倉道が東西に通つていたことが分かっています。実際に発掘しますと、道路が見つかりました。遺物を見ますと、一六世紀ぐらいの常滑焼の甕や瀬戸・美濃焼の播鉢すりばちが出土しています。この道路は中世前半期にもさかのぼる可能性があると考えています。峰台遺跡はこの旧佐倉道につながり、陸路、海路の結節点となつていた可能性があります。

峰台遺跡から出土した二三世紀を中心とした遺物についてご紹介いたします。これが集合写真です〔資料37〕。東海地方の愛知県常滑市とこなめから運ばれてきた常滑焼の焼き物、愛知県瀬戸市で作られていた瀬戸・美濃焼の焼き物、それから輸入された白磁や青磁といわれる中国産の焼き物などです。そして井戸からは腐らないで残っていた珍しい木製品が見つかります。後で詳しくご紹介いたします。中世の遺物は大半のものが破片の状態です。後で詳しくご紹介いたします。中世の遺物は大半のものが破片の状態です。現在の我々と同じで、割れて使えなくなつて捨てたものが基本的には出土しますので、こういう破片がとて多いのです。ただし破片といえどもとても重要で、このように復元できます〔資料38〕。こんな小さなお茶碗の底も、実は山茶碗といわれるもので、東海地方ではたくさん出土しますが、房総ではとても珍しいものです。一方、こちらの常滑産の高台付片口鉢こうたけつひかたぐちばち、これは現在の播鉢と同じで、捏鉢ねばちともいいます。これはたくさん出土します。一方で中国から輸入された陶磁器、



これはそんなに数は多くないのですけれども、例えばこの白磁といわれる白い破片ですが、本来はこんな形をしていました。こちらは青磁といわれるオリブ色の磁器ですが、もとはこんな形です。これは鎌倉市の大倉幕府周辺の遺物ですね。鎌倉幕府のあったところで出土していたものと同じようなものが、峰台遺跡でも出土しています。

先ほどの常滑焼の話に戻りますと、捏鉢^{ねいぱつ}だけではなくて、こういった壺もたくさん出土しています。これはいわゆる登窯^{のぼりかま}で作る焼き物、非常に硬く締まった焼き物で、ものによっては釉薬^{ゆうやく}がかかっていたりします。一方で中世の時代もこういった素焼きの土器、窯で焼くのではなくて、地面に穴を掘って焼く素焼きの土器というものもたくさん用いています。例えば杯^{さき}のようなカワラケ、こういったものも素焼きの土器です。

その中でこういったちよつと面白い形の土器が出土しています。このような破片で、刷毛でなでたようなハケ目がついていることが特徴です。小さな破片なのですが、とても重要なもので、これを南伊勢系土鍋^{みなみいせけいどなべ}と呼んでいます〔資料39〕。これは南伊勢地方で作られたお鍋です。こういう形をしています。大変珍しいものですね。厚さが実は数ミリほどしかないのですが、火にかけて黒く煤けています。一五年ぐらい前に調べた時には、県内でも一〇遺跡一一地点でしか確認できませんでした。

一遺跡に一個体から三個体に相当する小さな破片がちよつと出土するのみ。今でもあまり増えてないと思いますが、珍しい土器です。先ほどご紹介しました愛知県の常滑焼などの焼き物は、日常雑器として千葉に運ばれてきた、つまり商品としての交易品であったということですが、この南伊勢系の鍋^{おみ}というのは商品ではなくて、伊勢の大漆^{おみ}を出発した交易関係者の持ち物であり、それがこの峰台遺跡にもたらされたのではないかとというように考えられます。二〇〇六年頃に私はこの鍋のことを調べました。この南伊勢系土鍋が出土している遺跡を調べたのですが、船橋、それから市原、袖ヶ浦、木更津、茂原で出土しています〔資料40〕。千葉市では二〇〇六年当時は確認されていません。直径は二五センチほどのものですけれども厚みが二、三ミリ程度。薄手軽量で熱効率が良いものです。伊勢との強い結び付きを示す遺物ということになります。先ほどお話ししたように、船橋には船橋大神宮を中心として夏見御厨という伊勢神宮領があったということに結び付きます。

左上は葛飾区鬼塚遺跡出土の南伊勢系の鍋です〔資料41〕。葛飾区には葛西御厨がありました。この鍋は葛西御厨に関連すると考えられます。夏見御厨では伊勢神宮へ白い布を納めていたことが記録に残されています。先ほどもお話ししましたように伊勢神宮への貢納物を船で運ぶために船橋の湊と伊勢神宮の大湊は航路で結ばれていたと推定されます。大湊はこの鍋の生産拠点に近いと考えると考えられます。南伊勢系土鍋の出土遺跡は、必ずしも御厨のあるところではありませんが、ほぼ海路沿いにこの鍋の出土地が分布しています。

少しまとめてみましょう。房総では一〇遺跡一一地点でとても数が少ない。東京湾岸にはほぼ集中している。海上、陸上交通の要所で出土する。また、中世前期の有力者階層の屋敷、寺社、港湾周辺の流通拠点に出土する傾向があるようです。峰台遺跡は国産の常滑焼、渥美焼、瀬戸・美濃焼、そして湖西窯の山茶碗、それから中国産の陶磁、南伊勢系土鍋の

出土などから、港湾周辺の流通拠点ではないかと考えています。そしてこの南伊勢系土鍋は、いわゆる商品ではなくて特殊品、例えば常滑窯製品が流通する際のおまけのようなものですね、「副次品」として受け手の側が特権的に入手していたものではないかと考えられます。また一方で船運関係者が携帯していたものではないかという説もあります。御厨特有の遺物ではありませんが、御厨の立地を含めた伊勢神宮および伊勢地方の人々の関与をうかがわせるものということですね。

次に峰台遺跡の木製品ですね〔資料43〕。井戸から出土したものです。これは曲物の側板がわいた、それからこれは桶の側板、3・4・5は曲物の底板です。それから用途不明の板状の部材なども出ています。これらは使われなくなつて井戸に捨てられたものですね。遺跡から出土する中世の生活道具は、土器、陶磁器、石製品、木器、鉄器、青銅製品などですが、考古遺物は地中に残るものに限ります。金属や木は腐つてほとんど残りませんので、中世の遺物に限りませんが、考古学で出土した遺物を見るときは本来はあつたもの、例えば木のお椀などもたくさん使われたと思うのですが、そういったものは腐つてなくなつていくように差し引いて考える必要はありません。したがって出土遺物は土器、陶磁器が主となりますが、それだけを見ても中世になると、器種と産地がとて多様化しています。

峰台遺跡の調査成果をまとめてみます。伊勢神宮、夏見御厨、海上交通と関連する南伊勢系土鍋および海運に伴う流通品が豊富に出土。建物跡は未発見ですが、豊富な遺物から考えて調査区外の台地上には館があつたと推定しています。そこに在地の有力者層の存在を想定しています。そして夏見潟湖の近くに想定される船橋湊の存在および海上交易への関与があつた遺跡ではないかと考えています。船橋湊、夏見の入江のイメージ図です〔資料46〕。

中世前半の交易品は峰台遺跡以外にも見つかっています〔資料47〕。

京成線東中山の周辺の船橋市本郷台遺跡（東中山台遺跡群と同じ）からも南伊勢系土鍋が出土しています。それからこういった青磁、白磁といった中国産の輸入陶磁器も出土しています。そしてこれは大変珍しいのですが、こういう小さい破片ですが、青白磁梅瓶めびんといった鎌倉幕府があつた鎌倉市などではたくさん出土する遺物ですが、地方では珍しいものです。当時の高級陶磁器で、ブランド好みの武士がステータスとして所有していたといわれています。ほかには、これもとても珍しい資料です。峰台遺跡の北側の夏見大塚遺跡というところで見つかっていますが、長崎県西彼杵半島にしそのきはんとうで作られたと考えられる石鍋です〔資料48〕。現在の石焼ビシンの鍋に似ています。滑石かっせきでできています。これもめつたに出土しない資料です。鎌倉幕府ではたくさん出土しますが、関東地方の村ではとても珍しいものです。こういった石鍋は薬草などを煎じたのではないかといわれています。一遺跡に一点あるかないかといった出土率。高級品であるといわれています。実はウシ四頭に値する価格であつた。財力があり身分の高い人が夏見大塚にはいたと考えられます。

ここで中世前半の物流について見てみたいと思います〔資料49〕。中国産の福建省や浙江省などで生産された焼き物は船で鎌倉へ運ばれています。さらに鎌倉から船橋へもたらされたと考えられます。国産品については日本全国で見ると、遠くから運ばれる広域流通品といわれるものはいろいろありますけれども、こういった四角で囲んだものが船橋で出土しています。これは関東地方、千葉も含めた房総地域で出土しているものと考えていたのだと思います。鎌倉ほどバラエティーはないのですけれども、赤粋で囲んだものは房総で出土しています。愛知県の常滑焼が一番多くて、他に同じく愛知県の渥美半島にあつた渥美焼、それから愛知県の瀬戸市などにある瀬戸・美濃焼がとて多く見られます。

さて、ここで当時の政治の中心地である鎌倉幕府とその湊、鎌倉幕府

で出土した遺物を見てみたいと思います〔資料50〕。交易の中心であった鎌倉の武家屋敷からは最高級ランクの焼き物が出土しています。右側は西国、西日本で作られて鎌倉へ運ばれてきたものです。京都で作られたカワラケ、それから京都の亀山焼、京都の楠葉くすはの小皿、備前焼の播鉢や茶碗、兵庫県の東播焼、そして南伊勢系土鍋、それから例の滑石製の石鍋などが出土しています。左側は中国産の焼き物が大集合しておりまして、鎌倉の武家屋敷でステータスシンボルとして所有されていた青磁、白磁などの高級陶磁です。大きな鉢、壺、茶碗など実にさまざまな形があります。この中で先ほど見た船橋出土の遺物は鎌倉出土の遺物と共通するものがあります。丸で囲んだものです。この出土した遺物から見ると、船橋がまるでミニ鎌倉のような様相であったといえるのではないかと思います。ただし皆さまお分かりの通り、所有している焼き物の種類を見ることが身分差が表れているということもお分かりいただけるかと思えます。

物流を示す出土資料、中世前半について少しまとめてみました〔資料51・52〕。いわゆる「広域流通品」、搬入品ともいっていますが、遠隔地から海を介して運ばれてきたもの。まず陶磁器。東海地方の諸窯からということ、瀬戸・美濃、常滑窯製品、渥美窯製品、それから山茶碗といったものがあります。次に輸入品としての陶磁器。中国産青磁、白磁、青白磁などです。それから土器としては南伊勢系土鍋、石製品としては先ほどの滑石製土鍋。今日は紹介しませんが板碑などもそうですね。

一方で「狭域流通品」というものがあります。在地品、在地系と呼ばれています。関東近辺で作られたもので、おそらく陸路、河川交通等を利用して運ばれているものです。中世前半でいえばカワラケ、それから木製品もどこで作ったか分かっていませんが、関東近辺ではないかと考えています。ほかに金属製品として短刀とか銅製の鏡なども出土していますが、これらの製作地はまだよく分かっていません。大まかにこの

ような状況です。

(二) 中世前半の墓について

次に中世前半のお墓についてお話をしたいと思います。中世前半のお墓は、船橋市東中山台遺跡群、先ほどのいろいろ陶磁器などが見つかった本郷台遺跡と同じ遺跡です、それから印内台遺跡群で発見されています。下総の国府から約五キロメートルと近い距離にあり、古代は大集落でした。古代も国府の衛星都市的な集落として繁栄しました。なおかつ両遺跡とも古代末期、一一世紀まで村が営まれていたことがわかっておりまして、中世への連続性が確認できる貴重な遺跡と考えております。両遺跡は中世の栗原六ヶ郷の範囲に含まれます。

では本郷台、東中山台遺跡群の中世前半のお墓について紹介したいと思います〔資料54〕。穴を掘って土葬にしたお墓を土坑墓どこうぼと呼んでおります。土の中に埋まっていたので骨の保存状態があまりよくありませんが、こんな感じになっておりまして、こういう屈葬くつさうという体を折り曲げるスタイルで埋葬されています。これは西方浄土に向かって合掌している姿と考える説もありますが、実際に発掘をしていますと、反対側の東を向いていたり上を向いたりしている場合もあります。こういったお墓の特徴はカワラケと呼ばれる杯のような素焼きのお皿、それから短刀などが副葬品として添えられています。この本郷台のお墓の主は、骨を調べると老人でした。ただ保存状態が良くないので男性か女性かは分かっていません。カワラケ4点と短刀が副葬されていました。短刀は魔よけの守り刀と考えられます。出土したカワラケの形から考えて一二世紀後半ごろの墓と考えています。

下は西船の印内台遺跡群から見つかったお墓です〔資料54〕。これは上のものより保存状態がいい人じゃないかなと思います。この人も屈葬されています。背中、つまり背面に短刀が副葬されました。骨を調べた結果、女性でした。この近くには合計で四人の成人女性と二人の幼



児のお墓が集中している状況でした。

他に、お墓の副葬品としては、こういった五つの花びらをかたどった五花鏡ごかきょうとそれを納めた鏡筥きょうぼが出土しております〔資料55〕。これは船橋市の指定文化財になっております。女性のお墓の副葬品です。ここも骨の残りが良くなかったのですが、屈葬スタイルの女性のお墓でした。そして上腕骨、腕の骨の上にこの鏡が鏡筥に納められて副葬されてきました。この鏡筥は人間国宝の室瀬和美先生に復元していただいて、梅の花を描いた漆塗りの木製鏡筥であったということが分かっています。船橋郷土資料館に展示しておりますので、ぜひご覧いただければと思います。鏡の表側は鳳凰、それから中国風のおめでたい花、瑞花すいかをあしらったものですね。裏側はいわゆる鏡面、顔を映す鏡になっていまして、鏡面を

上に向けて鏡筥に納めていたと考えられます。出土した時もそういう状況でした。こういった五花鏡は神社などの伝世品にはみられますが、発掘で見つかることはとても珍しいです。県内では香取神宮の伝世品に似たものがあります。

この左下も副葬品の鏡です。それから右側は一四世紀の井戸のそばで見つかったものです。穴が開けられていたのでお墓の副葬品ではなくて、懸仏として掛けて使われたと考えられます。和鏡、短刀、カワラケなどを副葬品として組み合わせる葬

法が一三世紀から一四世紀にかけては見られて、印内台遺跡群、本郷台遺跡・東中山台遺跡群からは合計一五体以上見つかっています。この墓に埋葬された人たちは一体誰なのだろうということになります。ここに古代からの大集落を営んできた栗原郷の有力者の末裔であったと私は考えています。古代流に言えば地元じよんの豪族と考えられます。なぜならばこういった中世のお墓は、古代の集落の掘立柱建物跡という倉庫などが集中する集落の中核部近くや古代のお墓などがあつたところ、まるで聖域のようなところですね、そこに今度は中世のお墓も引き続き作る様子が認められます。古代の記憶のある場所に中世初期の墓が造営されている。この墓も東中山台遺跡群（43次）で見つかっていて、中国産の白磁が添えられていました。

さて、千葉市の事例に目を向けますと、千葉市中央区葛城の県立千葉高校の近くの新田遺跡からも同じような土坑墓が見つかっています〔資料57〕。全部で四基見つかっているんですね。これも一二世紀から一三世紀にかけてのもので、船橋の先ほどの事例と同じ時期です。ここではこのカワラケが副葬されていました。新田遺跡ではやはり古代の集落跡が見つかっています。この遺跡では中世前半は船橋の資料ととてもよく似た中国産の青磁、白磁、渥美焼や常滑焼がたくさん出土しています。

次に猪鼻城跡で火葬された骨を納めた骨蔵器の壺が見つかっています〔資料58〕。これは千葉氏の関係が考えられる有力者のお墓です。壺は全て交易品です。これが古瀬戸こせと、瀬戸焼の壺、それからこれは常滑焼の壺、こちらが大変珍しくて中国産の褐釉の四耳壺しじこです。関東地方では鎌倉を除いてとても珍しいものです。いずれも一二世紀から一三世紀頃のものです。これは猪鼻城の土塁を発掘している途中で見つかったということ。ということとは、土塁を作る前にすでにお墓があつたということ、猪鼻城が作られる前は、城の主郭、この辺り、南側は千葉市の郷土博物館になりますけど、この主郭の付近に墓地があつたと考えられます。つ

まり中世前半の猪鼻城跡は、城ではなくて千葉氏の聖域、墓域ですね。お墓があったようです。これが下総国における最もトップクラスの埋葬方法ですね。先ほど見た土坑墓に葬るのはその下のクラス、地元の豪族といつていいのでしょうか、在地有力者クラスと考えられます。お墓の作り方にも階層性があるということが分かります。出土した遺物を見ると、そういったことを頭に入れておく必要があります。

(三) 中世後半(一五〜一六世紀)のムラ

→東中山台遺跡群の調査成果を中心に→

次は中世後半期、一五、一六世紀の室町、戦国時代の遺跡についてお話をいたします。県内全体を見ても中世前半期に比べてとても遺跡の量が多くなり、情報量も多くなります。遺跡の性格としては城、館、村が代表的なものです。

最初に船橋市東中山台遺跡群について、京成東中山駅の周辺、約四五万平方メートルと広い遺跡になりますけれども、ここで発見されている中世後半の遺跡について紹介したいと思います〔資料60〕。ちなみこの西側対岸三百メートル先が、先ほど遠山先生のお話にも出てきましたが、中山法華経寺です。そして南側は東京湾、今は埋立てが進み、海が遠くなっていますが、戦国時代の『東路のつと』で有名な連歌師宗長はこの辺りを「葛飾の浦」と呼んでいます。宗長は中山法華経寺に立ち寄って、その後は船による海路で千葉市中央区浜野の本行寺、遠山先生のお話にもありましたが、そちらへ向かって行ったようです。東中山のこの近くに海路があったということですね。宗長もこの東中山にあった中世の屋敷を見たのではないのでしょうか。

では、東中山台36次の調査についてお話をします。ちなみに東中山から北側三〇メートル先は、中世前半期の千葉氏の被官であった富木常忍の館、若宮城があったところですね。では、中世後半の掘込型屋敷についてご紹介します〔資料61〜67〕。中世の屋敷区画全体を深さ二メー

ルほど掘り下げた特殊な形の屋敷です。中世の時代から二メートルほど掘り下げますが、後世に社宅建設のため盛土造成されて現在の地表面からはこの屋敷の底面までは五メートルぐらいあります。長軸五メートル、短軸二九メートル、面積一、五〇〇平方メートルほどありまして、マンション一棟分ぐらいの大きさの屋敷です。この屋敷区画の中には建物跡、それから門の跡、井戸、そして黄色いのは地下式坑という穴倉を地面に掘った跡。そしてこれは水ためですね。排水施設などもあります。先ほどお話ししましたが、鎌倉時代からの政教の要衝地に東中山台遺跡群はありました。そこに一五世紀後半から一六世紀末葉の掘込型屋敷という深く掘り込んだ屋敷が検出されました。約一五〇年間居住したと考えられ、在地の土豪の屋敷と推定されています。出土した遺物は、中世後半の中国産の青磁碗、国産陶磁は常滑焼、瀬戸・美濃焼、志野焼、それから静岡県の志戸呂窯製品など。土器類は在地系のカワラケ。それから、これは中世後半になって現れるものですが、土器で作った土製の播鉢、土製の鍋、内耳土鍋といえます。ほかに東海系の羽釜ですね。伊勢地方で作られた羽釜形土器、土製の火鉢・香炉などが出土しています。遺構の全測図を見ても分かりにくいので、私のほうでイラストを描いてみました〔資料68〕。南北五二メートル、東西約二九メートル、面積一、五〇八平方メートルですね。入口があって、門があって、主屋、それから副屋、貯蔵施設の穴を囲んだと思われるエリア、そして厩屋。ここには埋葬されたウマも見つかっています。それから井戸。排水用の穴もこの辺りに設けられています。それから畝が見つかっています。畑を作っていたとみられます。地下式坑という地面を掘りこんだ穴倉がこの時代はたくさん見つかるんですが、その穴倉の入口である壁坑がこの屋敷の周囲に設けられていました。

実は千葉市の南屋敷遺跡、若葉区源町で発掘調査が行われていますが、東中山台とよく似た構造の屋敷が発見されています。これがその復

元イメージ図ですね〔資料69〕。東中山台遺跡群の復元イメージもこれをもとに作ってみました。主屋、副屋、井戸、そして門。土塁が基本の構造です。特徴的なことは建物のある区画を大規模に二メートルぐらい掘り下げ、周辺に土を積み上げて土塁を作るといふスタイルですね。東中山は残念ながら屋敷の周囲は現在道になっておりまして、土塁は残っていませんでしたが、あれほど大規模に掘るといふことは、その排出土をどこかに処理する必要がありますので、土塁を作っていたと考えられます。通常の城だと土塁の外側には堀があるはずですが、この手の屋敷は基本的には外側に堀を持っていません。例えば四街道市の池ノ尻館跡ですとか、佐倉市の臼井屋敷跡などが同じタイプの屋敷跡です。先ほどの南屋敷の事例をもとに千葉市立郷土博物館におられた築瀬裕一さんが「掘込型屋敷」と命名したことが始まりです。このようなタイプの屋敷は土豪と呼ばれるような地元のお侍、地侍の屋敷と考えています。南屋敷は東中山のものよりかなり大規模です。

東中山台遺跡群の実際の調査の状況を見ていききたいと思います〔資料71〕。これは主屋。ちよつと時間の都合で飛ばしていきませんが、井戸状の遺構と大型竪穴。それから副屋と考えられるシンプルな建物。先ほど主屋は庇ひさしを持っていましたが、こういったものは庇がありません〔資料72〕。また貯蔵用の四角い穴がたくさん見つかります。調査では建物の柱跡が無数に見つかります。何回も建物を建て替えるので、柱の跡がたくさん出てきます。建物を構成するために組み合わせとなる柱穴を現場で検証することも大事な仕事です。ほかには粘土を貼った土坑や素掘りの穴もたくさん見つかりまして、いずれも貯蔵用の穴ではないかと今のところ考えていますが、用途のよく分からないものもあります〔資料74〕。

この時代の最も特徴的な遺構は地下式坑ですね。竪坑があつて横方向に地下室を掘った構造です。地面からはこういう丸い入口しか見えませ

んが、地下へ降りていくと四角い室になっているという構造です〔資料75〕。屋敷の建物とセットになつていているんですね。昔はこれがお墓ではないかと考えられていたのですが、お墓ではなくて屋敷に付属する穴倉という説が最近は有力です。船橋ではこの説を補強するような貴重な事例が見つかつていて、炭化したお米のようなものが大量にこの地下式坑の中にありました〔資料76・77〕。灰になつた繊維がちよつとこの辺りで見えるかと思うんですが、どうも袋に入れてこの穴の中にたくさん置いていたようです。これを分析しますと、コメのように見えたものは本当にコメだった。炭化した米がたくさん見つかりました。そして水田の雑草であるエノコログサ属も見つかつていますので、これは収穫した後のコメをそのまま貯蔵していたが、なんらかの原因で火災に遭つてしまつたようです。

中世後半の生活道具を見ていききたいと思います。なんといっても代表的なのはこの内耳ないじの土鍋なべというものです〔資料78〕。内側に耳がこちら側に二個、反対側に一個、全部で三ヶ所についている土製のお鍋です。これは鉄製の鍋をまねして作られたものと考えられています。それでは中世前半期はどういったもので煮炊きしていたのだらうと思われるでしょうが、ほとんど煮炊きの鍋類は出土しておりません。それはなぜかといいますが、おそらく鉄で作られたお鍋が用いられていたので、鉄は土の中で腐つてしまふということと、あとは溶かしてリサイクルして他のものに使つてしまふので、考古学の発掘では見つからないと考えられています。中世後半にも鉄の鍋は少し出土しますが、しかし房総ではなんといつてもこの内耳のお鍋ですね。特に房総北部のほうでたくさん出土していますので、北総では内耳土鍋を使つていたと考えられます。また瀬戸・美濃窯の播鉢はくちもたくさん出土します。常滑産の片口鉢かたぐちもあります。播る道具がとて多くて、中世は粉食の時代だといわれています。臼も出てきます。

茶の湯の道具、天目茶碗なども出土します〔資料79〕。すごく生活感のある遺物とともに、このように茶の湯をたしなんだ様子も見られます。ここに古瀬戸製品としたものは、お香をたく香炉、それから仏壇に供える花瓶といわれる花瓶なども見つかっています。あとは瓦質の火鉢ですね。これは火鉢の脚です。火鉢は最近まで使われていたと思うのですが、中世では暖房の道具を所有しているのは身分の高い階層でした。

一六世紀初頭の様子ですね〔資料80〕。後ほど東海地方の伊勢のほうからもたらされた中世後半の羽釜についてもお話したいと思っています。先ほどお話した千葉市の南屋敷からも船橋市東中山台遺跡群とでもよく似た種類、組み合わせの遺物が出土しています〔資料81〕。遠山先生のお話にもありましたが、原氏の本拠地であった千葉市生実城跡からもこういった生活の道具がたくさん出土しています。図録から写真をお借りしてきました〔資料82〕。これは土製の播鉢です。播り目がついています〔土器播鉢〕。こちらは内耳土鍋ですね。三ヶ所に耳がついている。ちよつと深いタイプで、これは鉄鍋をまねした内耳土鍋です。これは一五世紀のもですが、一六世紀になると少し浅い形になって、そして一七世紀の近世になるとさらにもっと浅くなり、焙烙の形になります。皆さんもこういうものをご覧になったら、深いのか浅いのか見ただけでいいと思います。

さて、話を戻しまして東中山遺跡群の掘込型屋敷ではどのようなものが出土しているのか、地元土豪クラスの生活の道具というのはどういうものなのかをグラフと表にしてみました〔資料83の表13・14、グラフ1・2〕。中世前半と比べると全く組み合わせが違ふんですね。まず内耳土鍋。それから土器播鉢。それから瀬戸・美濃焼の製品が圧倒的に多くなります。特に鍋、鉢類の組み合わせを見ますと、内耳土鍋が一番多くて、瀬戸焼の播鉢、それから土器播鉢となります。出土破片の点数を数えて集計しています。元の個体の実態を反映していると考えています。

ここで面白いのは、播鉢は瀬戸焼の鉄錆釉がかかった陶器製の播鉢と、それから地元で作ったと考えられる土製の土器播鉢と両方出ているということですね。遠くから運ばれてくる広域流通品である瀬戸の播鉢以外に、地元で播鉢を生産するようになり、用いたという様子が分かります。内陸のほうですと、瀬戸焼の播鉢の量が少なくて土器播鉢の比率がやや高くなるようで、その遺跡の立地によって出土する播鉢の組み合わせ比率も変化します。

中世後半の交易品についてまとめますと、地元産の狭域流通と、遠隔地から運ぶ広域流通品があります〔資料84〕。瀬戸・美濃焼、常滑焼は広域流通品。石臼は近くの石材産地からもたらされている可能性がある。あるので狭域流通品と思われれます。カワラケも関東近県で作られていると考えられます。それから中世後半になると銭貨がたくさん出土します。基本的には中世の日本ではお金を作っていません。中国からの輸入銭が基本です。偽金などを国内で作る例はあるんですが、中世の銭貨は輸入銭に頼っていました。これはもちろん広域流通品ということになります。そして先ほどの内耳土鍋、これは関東近県で作られていた狭域流通品です。内耳土鍋はどこで作られていたのでしょうか。船橋で出土しているものを分類してみました〔資料85〕。A型は少し深いタイプのものですね。胎土に雲母がたくさん含まれてきざらしている鍋なんです。これはおそらく茨城のほうで作られた常総型と考えられます。それからもう一つ、もっと浅いタイプのものですね。これも雲母がたくさん入っています。とても目立つ土器ですが、茨城県真壁市の源法寺焼系といわれています。源法寺焼は今でもある焼き物の産地ですね。それから全く形の違う小型の内耳土鍋もあります。これは松戸市の根木内城跡で出土しているものとても似ていて、一つのタイプとして把握できます。ほかにもこういう焙烙形に近い浅いタイプも船橋では出土しています。これは埼玉や群馬など、北関東のほうでたくさん出土することが分かっています。



りなものが出土しています。あとこれは小さい破片ですが、実は先ほどの生実城跡で見たような深いバケツ形のもので、これは鉄鍋模倣型ですね。船橋ではとても出土例が少ないです。ほかに葛西城跡出土タイプと同じものもあります。このように船橋の遺跡では、さまざまな関東近県で作られた内耳土鍋が出土しているということが分かります。

さて、次に中世後半にも伊勢地方で作られた羽釜、鍋についてみてみます〔資料86〕。これは羽釜形と呼んでいます。佐倉市の高岡遺跡群でも出土しています。厚さは薄い部分は二ミリぐらいしかありません。熱効率がとてもいいです。船橋では羽釜形が出土していますが、先ほどの内耳土鍋に比べると出土数はとても少ない。一遺跡に数点レベルです。このような茶釜形は船橋では出土していませんが、千葉市の生実城跡では出土していますね。これは鉄製品の釜をまねしている形ですね。この土器は煮炊き用の鍋というよりは湯沸かしが目的ではないかと思えます。羽釜形をしています。カマドにかけるのではなくて囲炉裏で使用する。と考えると、このようにふちに穴を開けてつるしたり、あるいは五徳にかけていたようです。生実城跡では珍しい湯釜形が見つかっています〔資料87〕。茶の湯道具としてお湯を沸かしていたのではないのでしょうか。生実城跡ではこういった茶の湯用の天目茶碗もたくさん見

すので、その辺りから見たらされたものと考えられます。それからこちらです。これは房総で作られているものか、ちょっとこれはよく分かりません。仮に下総型としておきましたが、四街道市の池ノ尻館跡でもそつ

つかっています。

東海系の羽釜の出土分布ですけれども、伊勢から東海地方、そして房総にかけて認められます〔資料88〕。中世後半は房総では一遺跡に数点レベルとはいえ出土量が増えてまいります。こういった黒丸のところですけれども、中世前半に比べて増えています〔資料89〕。千葉氏の本拠であった本佐倉城のある印旛沼周辺も増えていますね。それから遠山先生のお話にあった千葉湊、浜野城でも確か一〇点以上出土しています。ちなみに房総の東部は空白になっています。こちらは在地で作られた土製の釜が多く出土する傾向があるようです。東海系の羽釜は房総では三九遺跡で四五地点の出土を確認しております。一遺跡に数個体レベルしかない希少品です。主な出土遺跡は城跡、主要な集落跡ですが、中世前半に比べると分布範囲が広域になっています。立地は東京湾岸、主要河川の河口、それから印旛沼の流域、太平洋岸と東京湾をつなぐ分水嶺のようなどころ、例えば茂原の辺りですね。そして在地系の土製釜があり、出土しない地域ということになります。出土遺跡の性格としては、河口に湊が想定される集落跡、前半期でいうと峰台遺跡、東中山台遺跡群。流通の核となるような主要な城跡などです。瀬戸・美濃窯の製品とともに流通していた可能性があります〔資料92・93〕。

（四）物流を示す出土資料

さて、中世前半・後半の物流についてまとめてみました。特に狭域流通品が中世後半にはとても増える。いわゆる在地品ですね。先ほど申し上げたように内耳土鍋は武蔵型、常陸型、下総型というようなささまざまな形（生産地）のものが増える。土器播鉢も内耳土鍋と一緒に生産流通していた可能性があります。どこで作られていたかは今のところ分かりませんが、瀬戸・美濃の製品をまねして生産しています。また土製釜は在地系釜で、県の北東部に出土する傾向があります。

カワラケの流通は、戦国大名と深く関わって流通している状況がこれ

までの研究で分かっているんですが、今日は省略します。土製釜というのはこういう形をしています。八千代市の下宿遺跡で見つかっています。八千代市では東海系羽釜も出土しておりまして、必ずしもどちらかだけではなくて両方見つかるようなところもあるということですね。

三 中世の湊町船橋

最後に中世の湊町船橋に関して、大神宮の門前町、湊町としての景観について少しご紹介しておきたいと思います。滝川恒昭さんにより船橋に関わる「後北条氏朱印状」が発見されまして、そこに「下総船橋、彼津」と記されていたことから、中世前半のみならずおそらく潟湖が海退によって消滅しても、船橋の海老川河口には湊があったことが、二〇年ほど前に判明しました。また船橋大神宮の由緒には湊郷という呼称も残っています。高城氏などの印判状には五日市場、九日市場という地名が出てきて、市立てされていたことがわかっています。戦国時代末期を描いた「下総之国図」という古地図などにも陸海の要所であったことが分かるものが残っています〔資料97〕。

船橋市の本町には徳川家康による船橋御殿が江戸時代の始めに作られますが、これは戦国時代、海老川西岸にあった船橋大神宮宮司の富氏の居館をもとに建てられた御殿であったと私は考えています。今日はこのお話は詳しくはしません。ということ、あとは都市の宗教的環境を示す寺社ですね。戦国時代起源の寺もたくさんこの周辺には作られているんですけれども、中世前半期には都市的な場であり湊であったわけですが、それを継承するようなかたちですね。中世前半期においては夏見御厨、それから今日はちよつとご紹介する時間がありますね、律宗系寺院の存在をうかがわせる西福寺に残る巨大五輪塔ですね、そういったものの存在。また天台宗の僧侶が船で浅草寺へ向かったという古文書も残っていますけれども、そういった中世前半期の状況を継承して後

半期にも船橋が湊町でありまた門前町であったということが分かっています。

これは船橋市西図書館が所蔵している「下総之国図」と呼んでいますけれども、戦国時代の末期を描いたものでして、ここが船橋になりますね。陸路、海路の結節点です。東京湾は内海と書かれています。

おわりに

中世の特徴についてざっくりまとめますと、現在の都市の原型が成立した時代といえると思います〔資料98・99〕。そしてその出土したもの・道具類を見ても、現在の生活様式の基本パターンが生まれた時代と考えられます。全国各地に要津、すなわち主要な湊が存在しまして、陸上・水上交通の隆盛した時代ということになるかと思っています。駆け足でしたが、私のお話をこれで終わらせていただきます。ありがとうございます。

中世のムラ・城をめぐるモノの動き ～遺跡からみる北総地域の物流～

資料 1

中世とはどんな時代？ ～武士の時代のはじまり～

| 戦国時代 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 1400 | 1450 | 1500 | 1550 | 1600 | 1650 | 1700 | 1750 | 1800 | 1850 |
| 室町時代 |
| 1574 | 1600 | 1615 | 1639 | 1688 | 1703 | 1716 | 1735 | 1764 | 1792 |
| 徳川幕府 |
| 1603 | 1615 | 1639 | 1688 | 1703 | 1716 | 1735 | 1764 | 1792 | 1868 |
| 徳川幕府 |

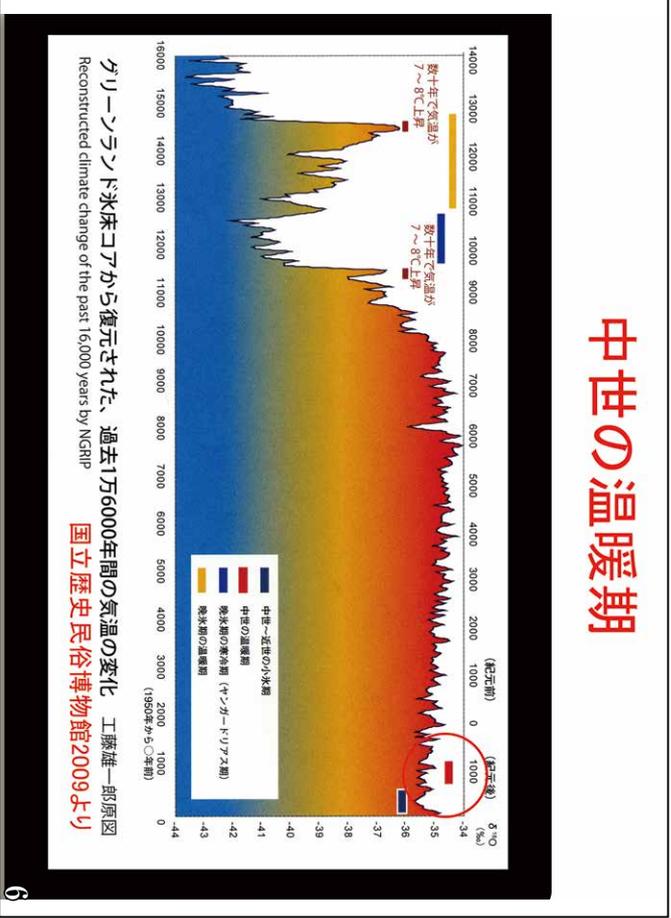
2002年 船橋市郷土資料館

2

- 骨子**
- ◎発掘資料からみる中世の生活とモノの動き
千葉から西側～船橋～ における北総地域の物流について
 - 特に千葉氏の領域であった船橋地域をモデルの中心として
 - ・出土した中世の交易品について
 - ・想定される輸送経路(陸路・水路)など



5



6

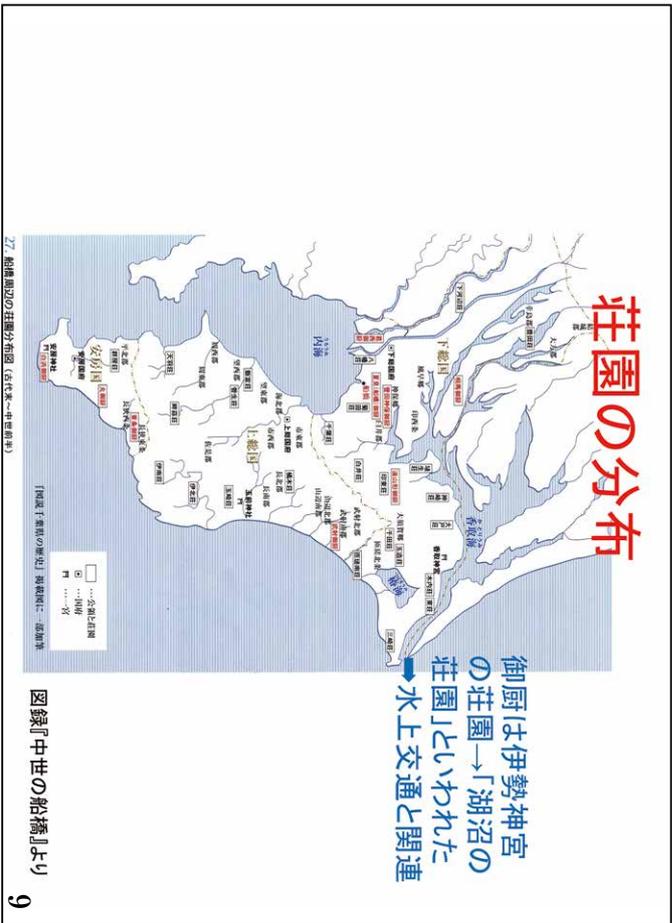
○気 候：地球規模的な温暖化現象の時代

- 鎌倉幕府ができた頃は「中世の温暖期」にあり、現在よりもやや暖かい気候だった。
- 中世海進→海水準が上昇して潟湖を形成→日本各地に湊ができた
- 西暦1300年～1850年頃は小氷期と呼ばれ、現在よりも年平均気温が0.5～1.0℃程度低くなった。

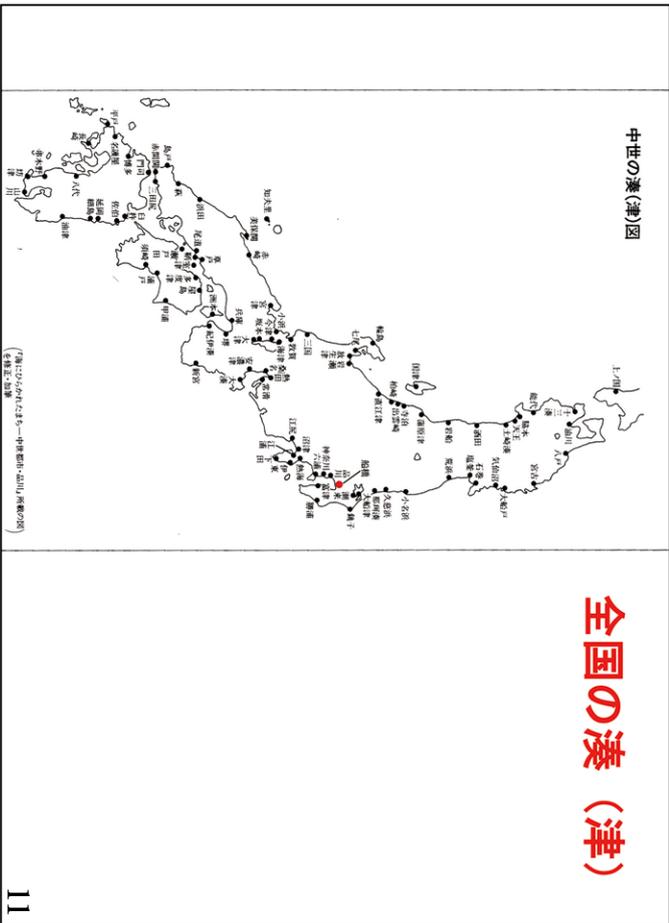
7



8



9



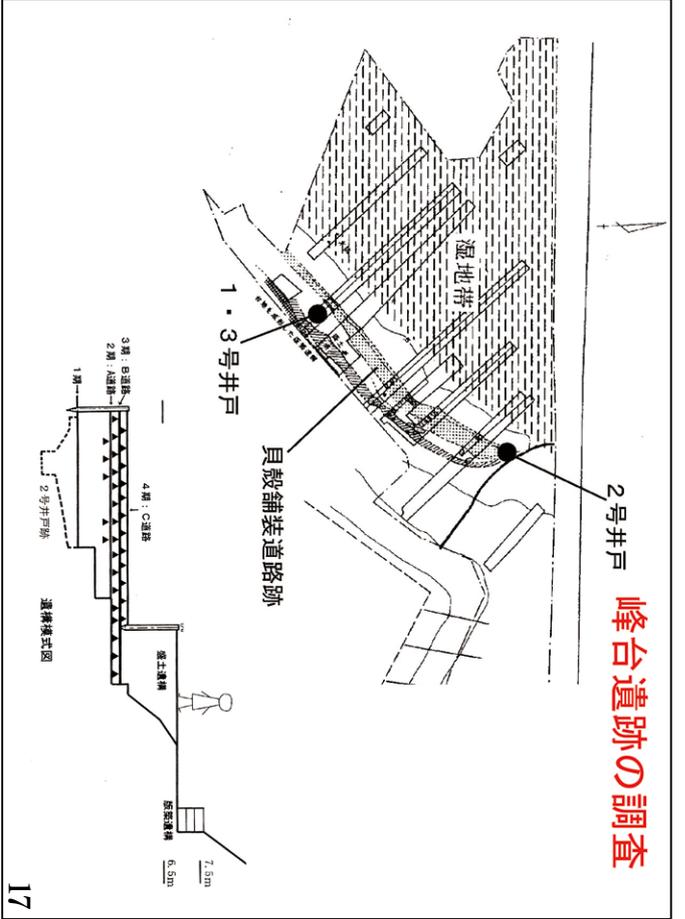
中世前半期(12.13.14世紀)

当時の高級陶磁器
中国で作られた青磁や白磁 本郷台遺跡第7次

1100	平安時代	末影絵の流行により磁薬土が用いられる
1100	鎌倉時代	1191 源頼朝 鎌倉幕府を樹立
1100	室町時代	1374 一統 文永 弘安の(元寇)
1100	徳川時代	1603 徳川家康 徳川幕府の成立
1100	江戸時代	1603 徳川家康 江戸幕府の成立
1100	明治時代	1868 明治維新 日本国号の改称
1100	大正時代	1912 大正 大正維新 大正改革
1100	昭和時代	1926 昭和 昭和維新 昭和改革
1100	平成時代	1989 平成 平成維新 平成改革
1100	令和時代	2019 令和 令和維新 令和改革

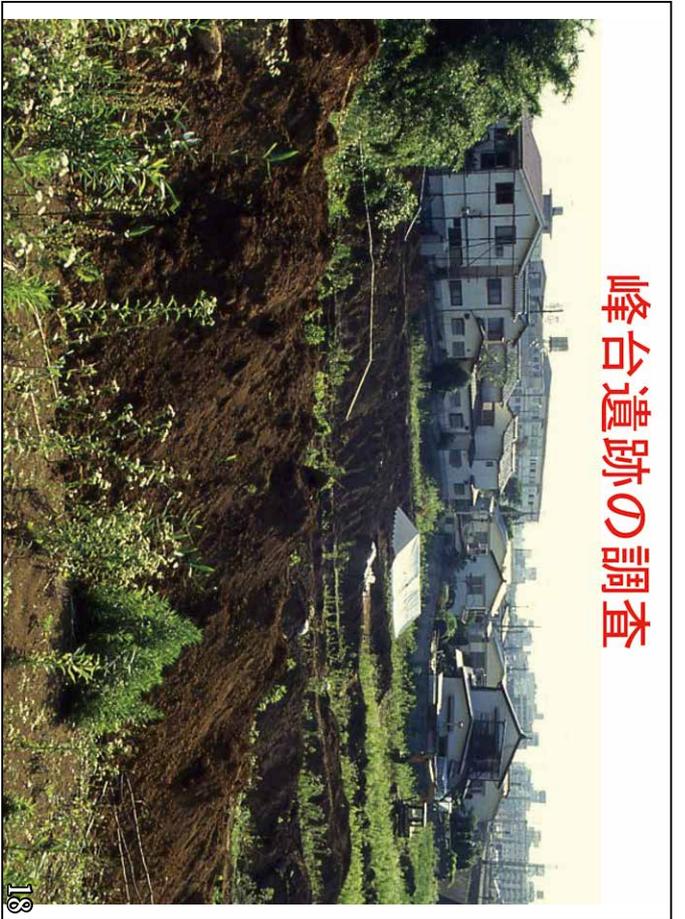
12

峰台遺跡の調査



17

峰台遺跡の調査



18



19



20





25



26

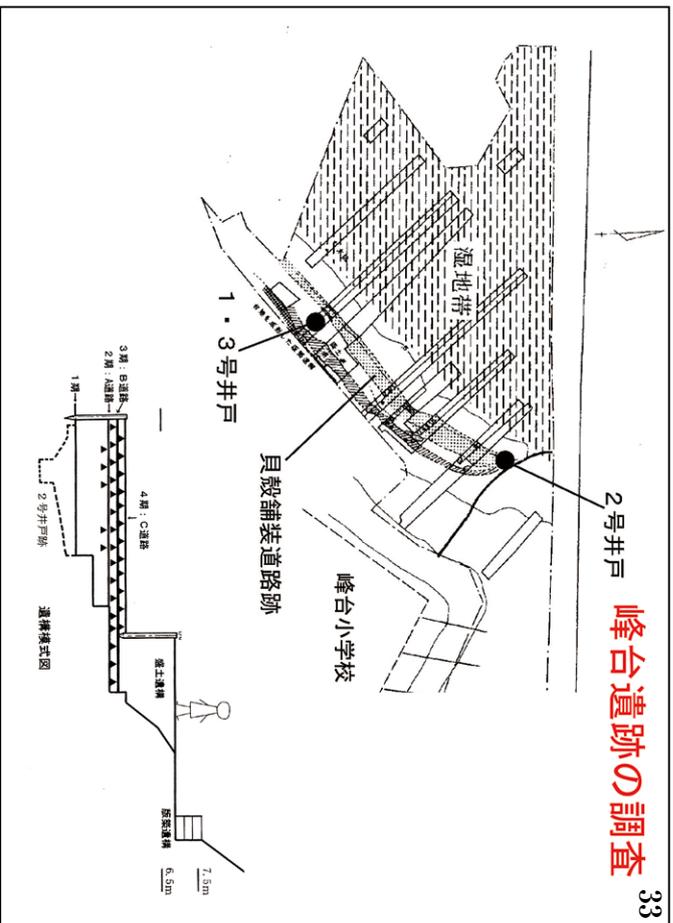


27



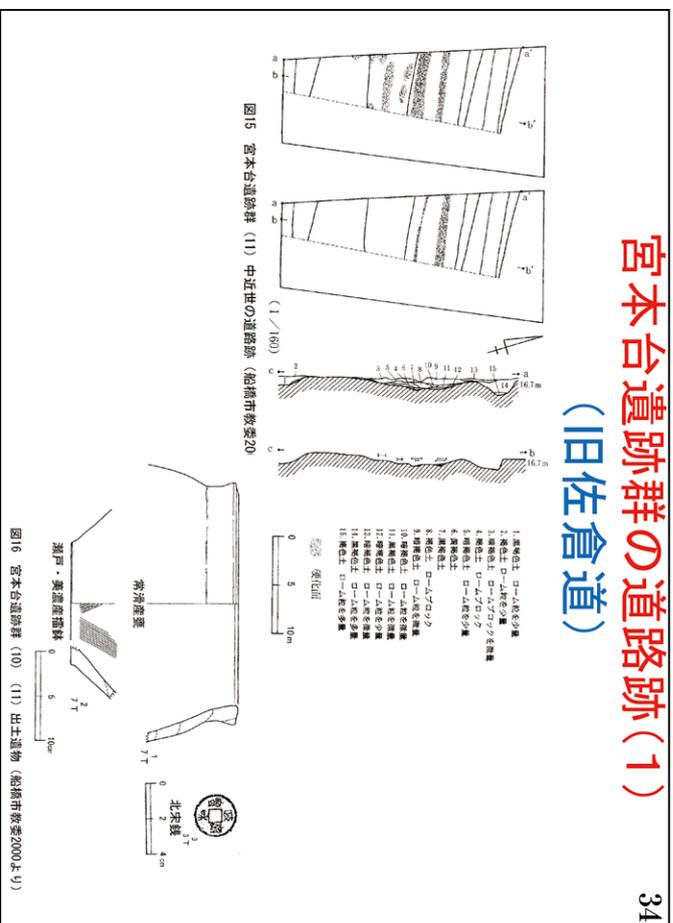
28





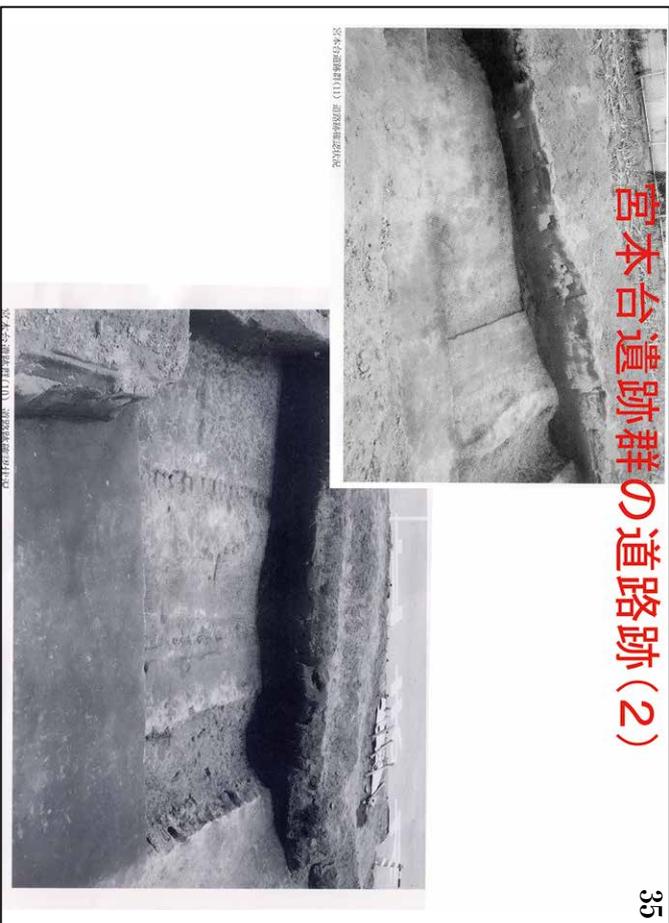
峰台遺跡の調査

33



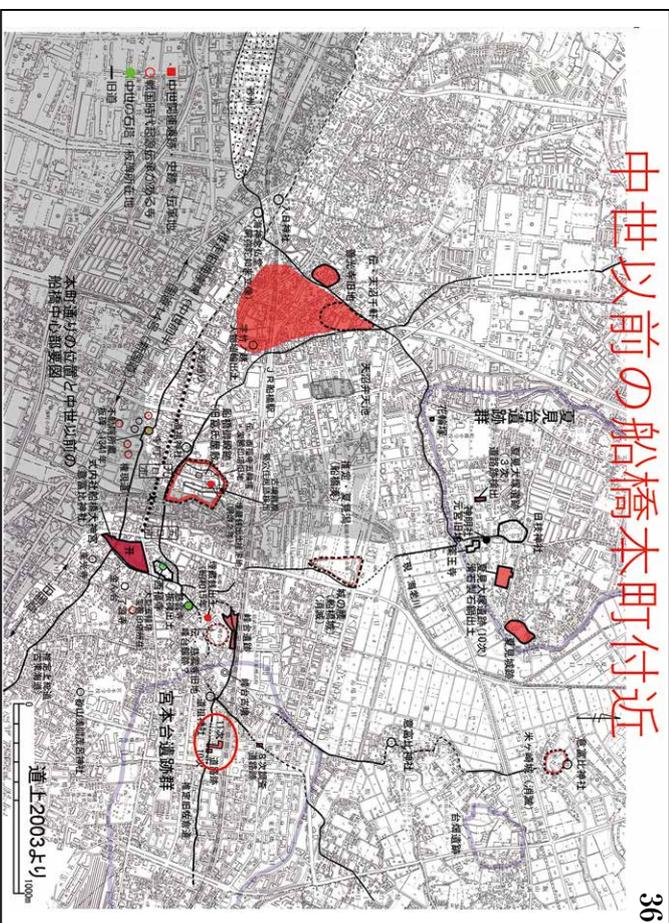
宮本台遺跡群の道路跡(1)
(旧佐倉道)

34



宮本台遺跡群の道路跡(2)

35



中世以前の船橋本町付近

36

峰台遺跡の遺物集合

13. 中国から輸入された高級陶磁器
 上段左から船橋市峰台遺跡：白磁碗底片(12世紀)、3磁口茶碗片(14世紀)、青磁碗底片(13世紀)、下段左から船橋市本郷台遺跡7次：青磁劃花文碗2片(12世紀後半)、青磁蓮井文碗(13世紀)(東京産産)、青白磁梅瓶片(13世紀)(須賀崎系産)

44. 東海産の陶器 船橋市峰台遺跡出土
 1・2・7・8・10(常滑産高台付片口鉢片(備録)(13世紀)、3山茶碗底片(須賀崎)(13世紀)、4~6(備美産・片口鉢片(12世紀)、9(常滑産碗底片(井戸から出土)割れた裏の裏をこね鉢としてリサイケルしている。(13世紀)、11~15(常滑産高台片(13世紀)水かめや煎茶用に使用され、多くの破片が出土。

45. 井戸から出土した木製品
 船橋市峰台遺跡出土(13~15世紀)
 1. 土物の厚板、2. 漆桶の厚板、3~5. 土物の底板、6. 板状の銅材

図録『中世の船橋』より

37

峰台遺跡の遺物(1)

13. 中国から輸入された高級陶磁器

44. 東海産の陶器 船橋市峰台遺跡出土

54. 常滑産高台付片口鉢
 鎌倉市大蔵藩府周辺遺跡群出土
 55. 左・山茶碗(13世紀) 右・山皿(13世紀)

図録『中世の船橋』より

38

峰台遺跡の遺物(2)

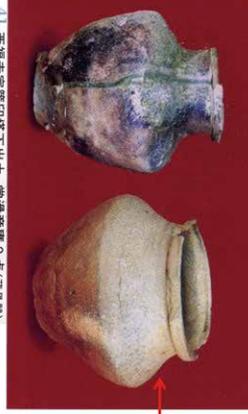
~中世前半・伊勢との関連~

29. 南伊勢系土鍋(復元)
 葛飾区塚塚遺跡出土(13世紀)
 (葛飾区塚塚と本文の博物館写真提供)

常滑焼壺(かめ)

カララケ

南伊勢系土鍋



41. 西福寺宝篋印塔下出土 常滑産壺2点(復元)
 (13世紀後半) *写真提供



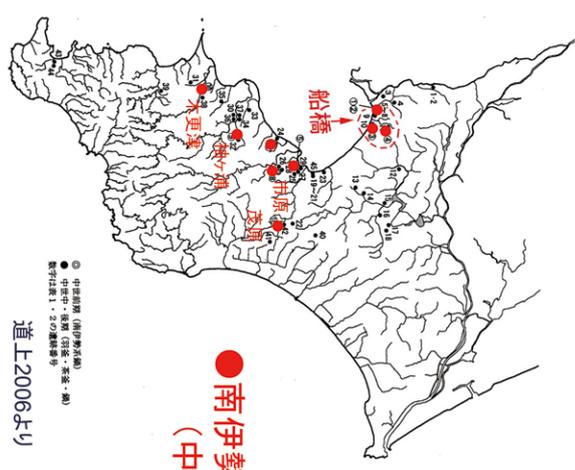
←常滑焼の壺も出土

図12 峰台遺跡出土遺物(常滑焼) 常滑産壺・壺
 常滑産壺・壺
 図録『中世の船橋』より

39

房総出土の東海系土器

●南伊勢系土鍋の分布
 (中世前半)



道E2006より
 第3回 房総出土の東海系土器分布図

40

南伊勢系鍋の分布(中世前半)



29. 南伊勢系土鍋 (復元)
 恵節区鬼塚塚遺跡出土(13世紀)
 (福原区郷土と天文の博物館 写真提供)

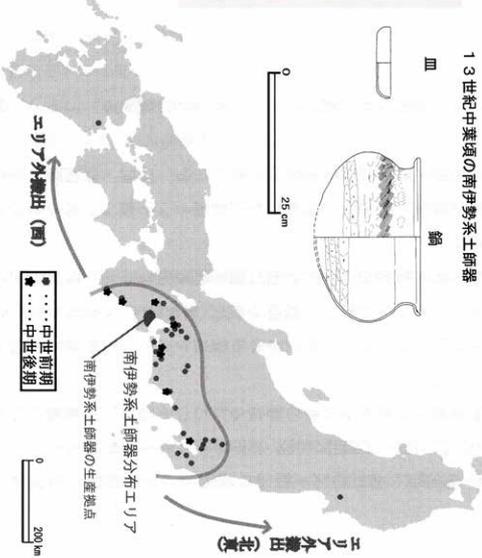


図29 南伊勢系土師器の分布図
 伊藤裕偉『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』より

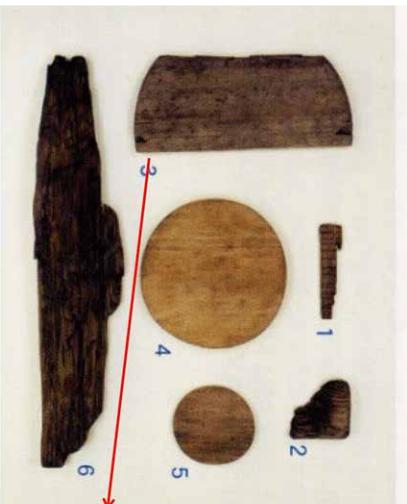
41

南伊勢系鍋の分布(中世前半＝鎌倉時代)

- 房総では10遺跡・11地点で確認 (少ない)
- 東京湾岸にほぼ集中
- 海上・陸上交通の要衝で出土
- 中世前期の有力階層の屋敷・寺社
- 港湾周辺の流通拠点(峰台遺跡)
- 「商品」ではなく「特殊品」(常滑窯製品が流通する際に副次品として特権的に入手したか)
- 船運関係者の携帯品か
- 御厨特有の遺物ではないが、(御厨の立地を含めた)伊勢神宮及び伊勢地方の人々の関与をうかがわせる (貢納品の輸送網等との関連)

42

峰台遺跡(3) 木製品(井戸出土)



図録『中世の船橋』より

43

～中世の生活道具の種類～

○土器・陶磁器・石器・木器・鉄器・青銅製品など

- ・但し考古遺物は地中に残るものに限る
- ・金属や木は腐って殆ど残らない

→中世の出土遺物は土器・陶磁器が主
 ※陶磁器は器種と産地が多様化する

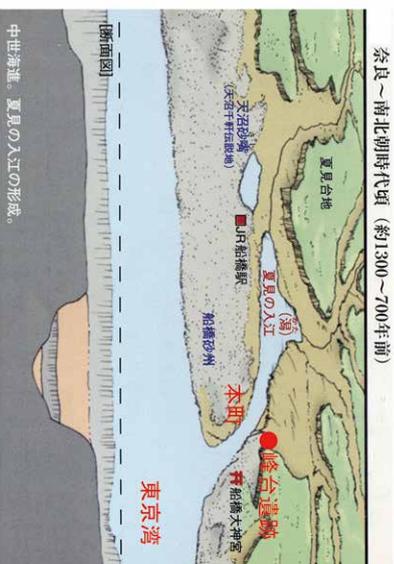
44

峰台遺跡の調査成果 (県内では数少ない中世前半の遺構・ 遺物が主体の遺跡)

- 中世前半期の夏見御厨及び伊勢神宮、また海上交通と関連する南伊勢系土鍋及び海運に伴う流通品（東海系陶器類）が豊富に出土。
- 建物跡は未発見だが、豊富な遺物から考えて、調査区外の台地上には館跡があったと推定⇒在地の有力者層の存在
- 潟湖の近くに想定される船橋湊の存在及び海上交易への関与を想定。

45

中世前半頃の船橋（推定図）



藩口昭二氏原図

46

滑石製石鍋～肥前産～（船橋市夏見大塚遺跡）



48. 滑石製石鍋破片
船橋市夏見大塚遺跡10号出土 (13世紀)



=牛4頭に値

48

中世前半の交易品（船橋市本郷台遺跡）

～中世前半・伊勢との関連を示す～



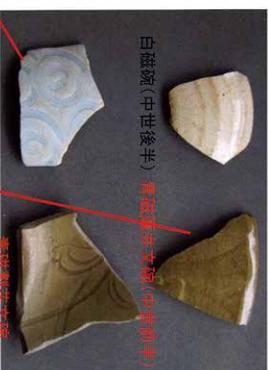
28. 南伊勢系土鍋破片
船橋市本郷台遺跡7号出土
(12世紀後半～13世紀初め)

29. 南伊勢系土鍋（復元）
夏見大塚遺跡出土（13世紀）
(夏見大塚遺跡出土の博物館写真提供)

青白磁酒甕



『日本の美術』第410号より



白磁碗（中世後半） 青磁滑石文鍋（肥前産）
当時の高級陶磁器
中国で作られた青磁や白磁
本郷台遺跡第7号
出土
(中世前半)

図録『中世の船橋』より

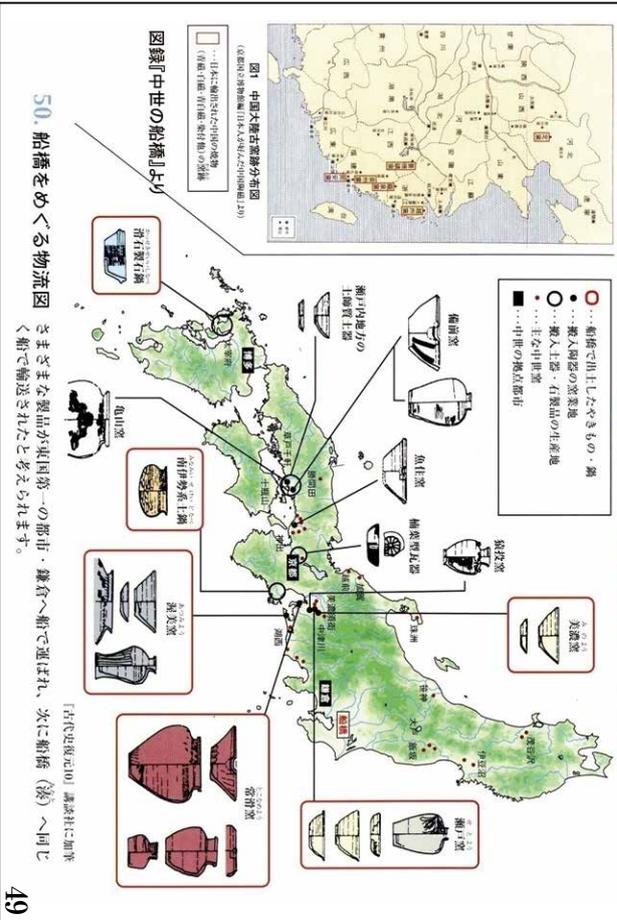
根津美術館『蘇る鎌倉』より 47

図録『中世の船橋』より



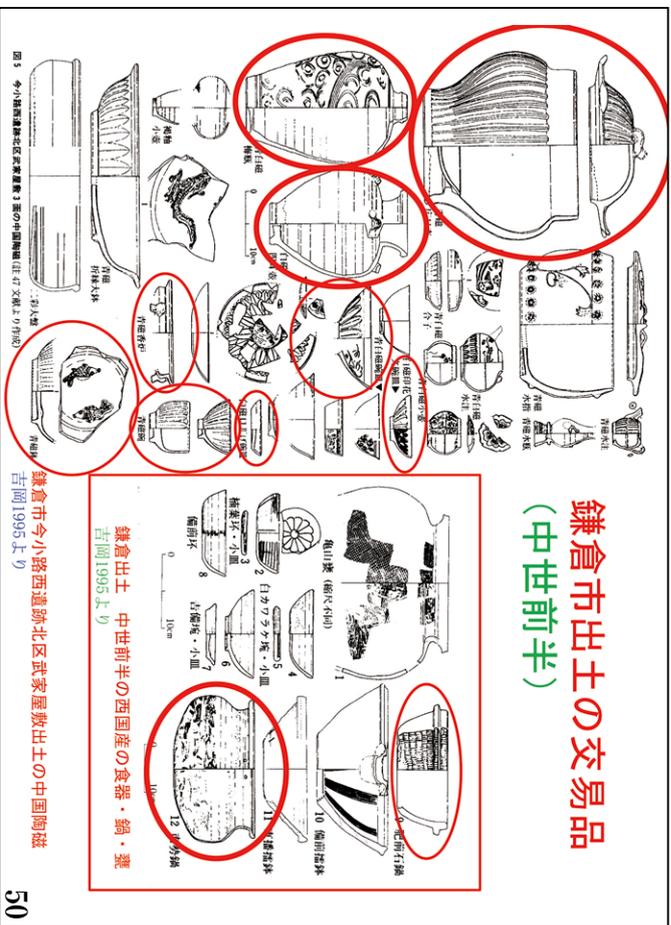
49. 滑石製石鍋
鎌倉市東勝寺跡遺跡出土 (13世紀)
鎌倉市教育委員会所蔵

出土資料にみる物流 (湊と海上交通)



49

鎌倉市出土の交易品 (中世前半)



50

県内では数少ない中世前半の遺構・遺物が出土
遺物のもつ意味→当時の盛んな海路による交易を示す(船で一括して大量に輸送)

- 夏見御厨・伊勢神宮、海上交通と関連する南伊勢系土鍋の出土
- 貿易陶磁(中国産)、瀬戸・常滑窯など東海地方で作られ、運ばれてきた陶器類が出土

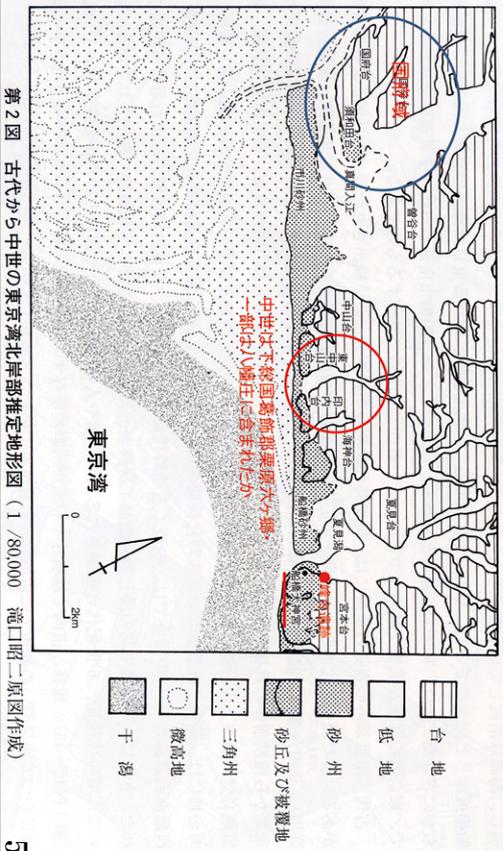
51

物流を示す出土資料 (中世前半)

- ①搬入品 ②在地品
- 広域流通 =搬入品(遠隔地) おもに海を介した交易品
1. 陶磁器(国産品) 東海地方の諸窯から〜
瀬戸・美濃窯製品、常滑窯製品、湖西産山茶碗
貿易陶磁：中国産青磁・白磁・青白磁
南伊勢系土鍋
滑石製石鍋(長崎県など)、板碑(北関東)
 2. 陶磁器(輸入品)
 3. 土器(国産品)
 4. 石製品(国産品)
- 狭域流通 =在地品(関東近県) おもに陸路・河川交通等
1. 土器 カワラケ
 2. 木製品 結桶、曲物等
- ※産地？金属製品 鉄製短刀、銅製鏡

52

古代から中世の東京湾北岸部推定地形図 陸海交通の要衝、国府近郊に立地



53

船橋市印内台遺跡群(27) 瑞花双鳳五花鏡と梅花文鏡蓋(きょうぼこ)

1. 瑞花・雙鳳(白銅文鏡) 直径18.6cm
A. 鏡蓋を覆った状態で出土。A'は鏡蓋の裏面。A''は鏡蓋の裏面に刻まれた瑞花・雙鳳の文様。A'''は鏡蓋の裏面に刻まれた梅花の文様。

2. 梅花文鏡蓋(白銅文鏡蓋) 直径18.6cm
A. 鏡蓋の裏面に刻まれた梅花の文様。A'は鏡蓋の裏面に刻まれた梅花の文様。A''は鏡蓋の裏面に刻まれた梅花の文様。

3. 船橋市印内台遺跡27次調査出土
瑞花双鳳五花鏡(白銅文鏡) 直径18.6cm
A. 鏡蓋を覆った状態で出土。A'は鏡蓋の裏面。A''は鏡蓋の裏面に刻まれた瑞花・雙鳳の文様。A'''は鏡蓋の裏面に刻まれた梅花の文様。

4. 瑞花・雙鳳(白銅文鏡) 直径18.6cm
A. 鏡蓋を覆った状態で出土。A'は鏡蓋の裏面。A''は鏡蓋の裏面に刻まれた瑞花・雙鳳の文様。A'''は鏡蓋の裏面に刻まれた梅花の文様。

5. 船橋市印内台遺跡27次調査
五花鏡・鏡蓋出土状況
五花鏡の出土状況

6. 船橋市印内台遺跡21次調査出土
水鏡双鳳鏡(白銅文鏡) 直径18.6cm
A. 鏡蓋を覆った状態で出土。A'は鏡蓋の裏面。A''は鏡蓋の裏面に刻まれた水鏡・雙鳳の文様。A'''は鏡蓋の裏面に刻まれた梅花の文様。

7. 船橋市印内台遺跡13次調査出土
帝釈天鏡双鳳鏡(白銅文鏡) 直径18.6cm
A. 鏡蓋を覆った状態で出土。A'は鏡蓋の裏面。A''は鏡蓋の裏面に刻まれた帝釈天・雙鳳の文様。A'''は鏡蓋の裏面に刻まれた梅花の文様。

図録『中世の船橋』より

55

本郷台遺跡(東中山台遺跡群) ~中世前半の土坑墓~

カララケと短刀を副葬した墓

←参考→
印内台遺跡群(21)
短刀を副葬した女性の墓

図録『中世の船橋』より

54

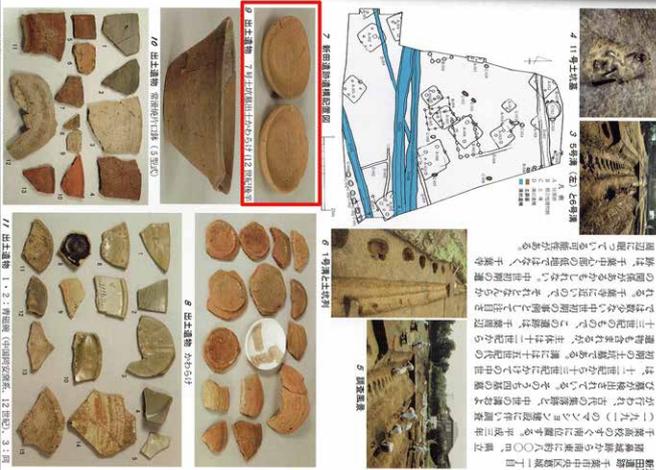
東中山台遺跡群(43) 中世初めの墓

・副葬品: 中国産白磁
楯描文碗の破片が出土

・伸展葬
・成人男性

56

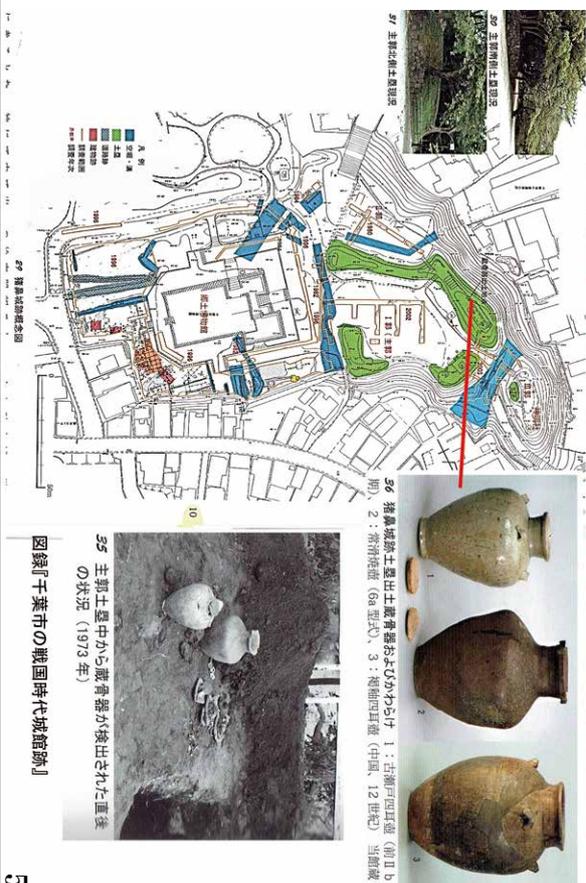
千葉市新田遺跡土坑墓



図録『千葉市の戦国時代城館跡』

57

千葉市猪鼻城跡出土骨蔵器(火葬)



図録『千葉市の戦国時代城館跡』

58

中世後半期(15・16世紀)

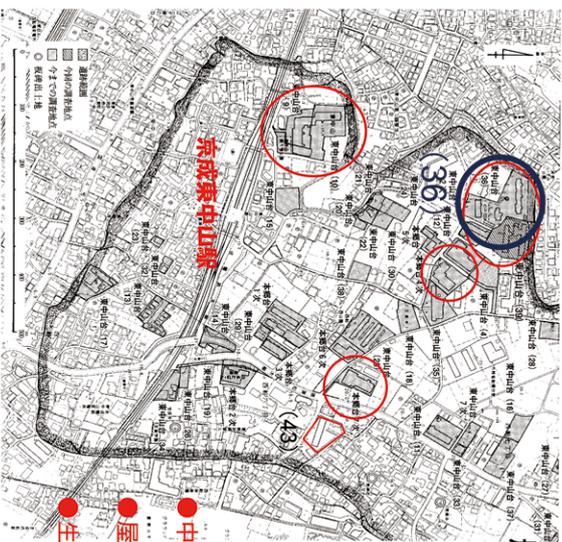


船橋市東中山台遺跡群(36)出土



59

中世後半のムラのようす(15～16世紀)



船橋市東中山台遺跡群
(本郷台遺跡含む)
調査地点図

- ◎面積 約45万㎡
- ◎30年間に50地点以上を調査
(全体の1/7、6万3千㎡)
- ◎古代・中世を中心とする

- 中世後半になると遺跡の数が増加
- 屋敷跡などの居住域を明確になる
- 生活感あふれる遺物が多く出土

60

中世後半・掘込型屋敷(ほりこめがたやしき)



東中山台遺跡群(39)
地点出土の陶器・土器

東中山台遺跡群(36)
地点の中世屋敷

61

船橋市東中山台遺跡群(36)地点 ～台地上に作られた掘込型屋敷～

所在地: 東中山2丁目。京成線東中山駅北側。

現在はマンションが建つ。

調査年: 平成17～18年本調査(3,104.99㎡)

立地: 東京湾に面する若宮(市川市)低地を囲む台地上、

標高19m。300m西側の対岸に日蓮宗名刹中山

法華経寺(もとは法華寺・本妙寺)が所在。

・東中山から北方向には興の院は若宮城跡、千葉氏

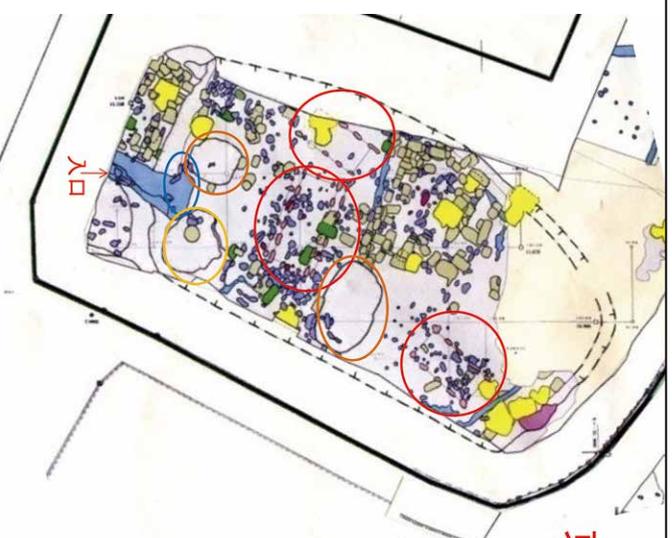
被官・下総国府文書官標の富木常忍の館といわれる。

■鎌倉時代から政教の要衝地に隣接。

※日蓮おりと伝説地、戦国時代は連歌師宗長がかつしか浦→
(千葉市)浜野本行寺へ海路で向かった足跡あり

63

東中山台遺跡群(36) 中世屋敷 (掘込型屋敷)



◎南北50m x 東西推定30m

◎15世紀後半から16世紀末葉まで
約150年間居住

62

調査の成果(1)

15世紀後半～16世紀末葉の掘込型屋敷を検出。

約150年間居住したと考えられる在地の土豪

層屋敷と推定。

◎遺構

屋敷区画全体を深さ2mほど掘下げる特殊な形態の屋敷。

規模: 長軸52m x 短軸(推定)29m。

面積: 1,508㎡。

64

調査の成果(2)

- 屋敷の区画内に掘立柱建物跡3棟(主屋1棟・副屋2棟)以上(数回建替える)
- 地下式坑(穴倉の一種)11基、道路跡、門跡
- 井戸跡1基、大型堅穴(排水施設)3基
- 土坑・粘土貼土坑(貯蔵用穴カ。素掘りと粘土貼りの両方あり)多数
- ほかに屋敷の内外で土坑墓3基、馬葬坑1基、屋敷の外部にも地下式坑5基等を検出。

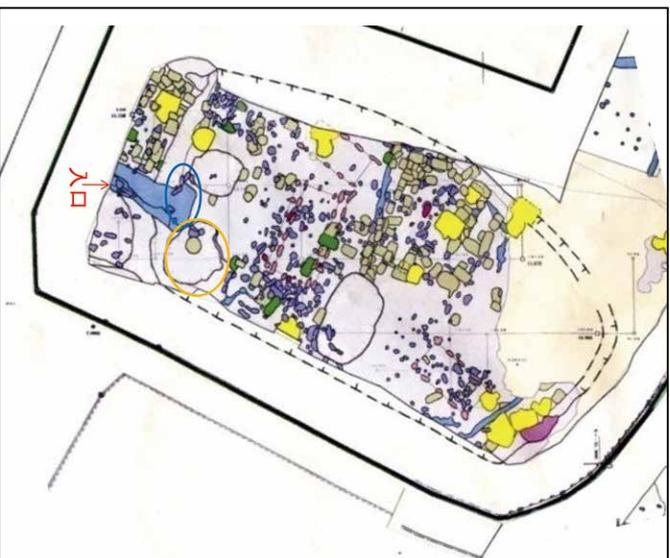
65

調査の成果(3)

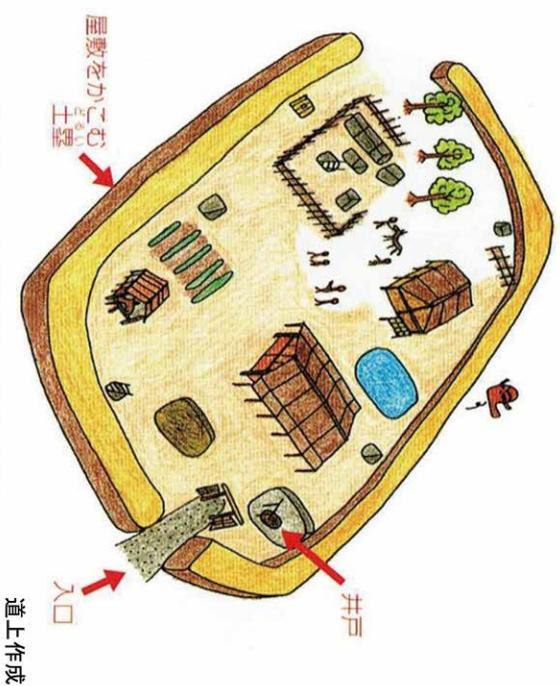
- ◎遺物(15世紀～16世紀代中心)
- 貿易陶磁(中国産青磁碗)
- 国産陶器(愛知県常滑窯・瀬戸・美濃窯・志野窯・静岡県志戸呂窯製品)
- 土器類(在地系カラケ・土器播鉢・内耳土鍋・東海産羽釜・火鉢・香炉等)
- 石製品(板碑・石臼等)
- その他: 銭貨等

66

東中山台遺跡群 (36)中世屋敷 (掘込型屋敷)



67



南北52m×東西約29m。面積1,508㎡
戦国時代の掘込型屋敷復元イメージ図(東中山台遺跡群)

68

千葉市南屋敷 (掘込型屋敷の典型)



図41 青風館遺跡復元模型図(複製権一気体・住居存一併認)
2-2の部分からなる小規模な城郭跡、主郭の掘り下げにより掘込型屋敷を示す。木造の交配である土家智の痕跡である。

『千葉県の歴史 資料編考古3』より
築業裕一監修・佐藤善一郎画

69

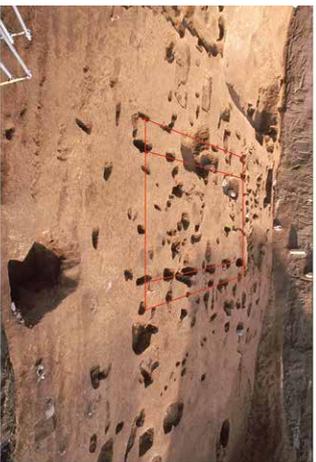
千葉市南屋敷 (千葉市若葉区源町)

- 東西45m、南北38m
(土塁外側)
- 面積2,000㎡
- 土塁内部を約2m
掘り下げる
- 四街道市池ノ尻館跡
とも類似

図録『千葉市の戦国時代城館跡』

70

掘立柱建物跡(主屋)・井戸状遺構 船橋市東中山台遺跡群(36)



二面底の掘立柱建物跡(主屋)
5間×1間 9.9m×4.2m 柱間約2m
面積 約42㎡



井戸状遺構と大型竪穴
戸:直径1.64m 深さ3.2m
大型竪穴:7m×6.5m 深さ67cm

71

掘立柱建物跡(副屋) 船橋市東中山台遺跡群(36)



掘立柱建物跡(副屋)
4間×1間 8m×3.5m 柱間約2m
面積 約28㎡



72

東中山台遺跡群(43)中世土坑墓、ピット群(掘立柱建物跡)



73

中世のさまざまな土坑(穴)



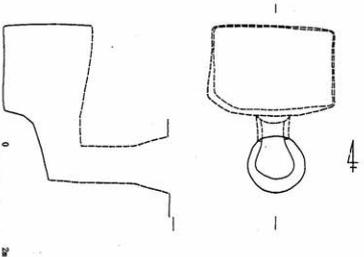
粘土貼土坑



方形土坑・地下式坑

東中山台遺跡群(39) 74

地下式坑の構造



東中山台遺跡群39次地下式坑
 竪坑直径1m、深さ2.1m、
 竪坑上面～地下室底面まで3m、
 地下室奥行1.6m x 幅2.2m、
 地下室高さ1.6m



75

地下式坑出土炭化米
 東中山台遺跡群(8・9)の事例



76

東中山台遺跡群(8・9)地下式坑 から出土した炭化種実

表1 東中山台遺跡群(8・9)出土炭化種実類

種類	資料番号	1	2	3	4	5	6
炭化米	容量(cc)	200	200	400	200	100	200
キビ		104	126	210	211	1600以上	1400以上
エノコログサ属		1	1		1	2	3
ホタルノ属							1
その他		37	22	2	3	7	2

77

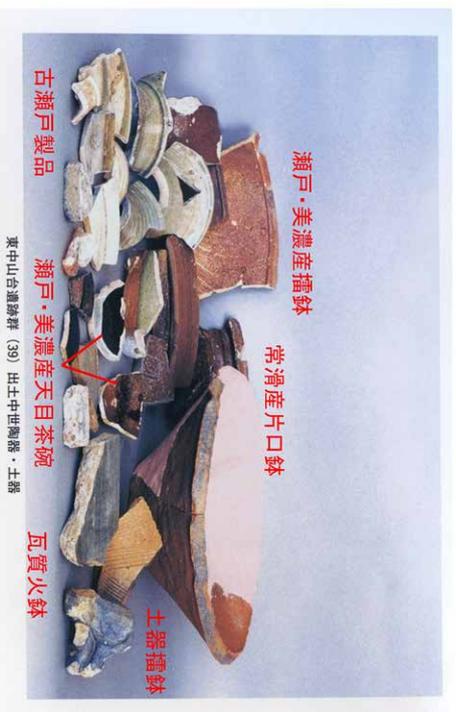
中世後半の生活道具

東中山台遺跡群(36)掘込型屋敷



78

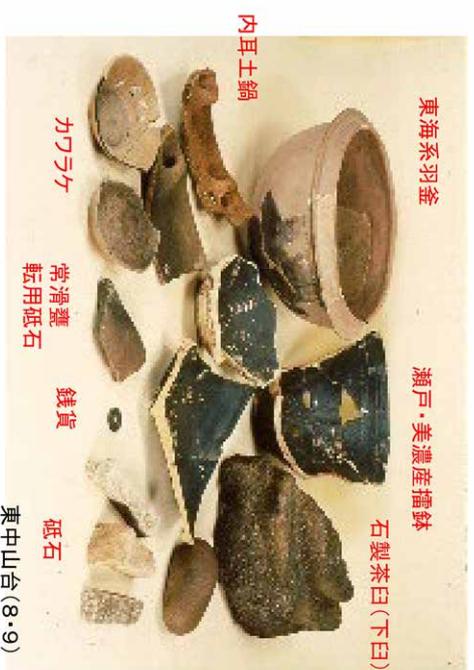
中世後半(15世紀代中心)の遺物



79

中世後半(16世紀初頭中心)の遺物

すし道具がふえる=粉食の時代



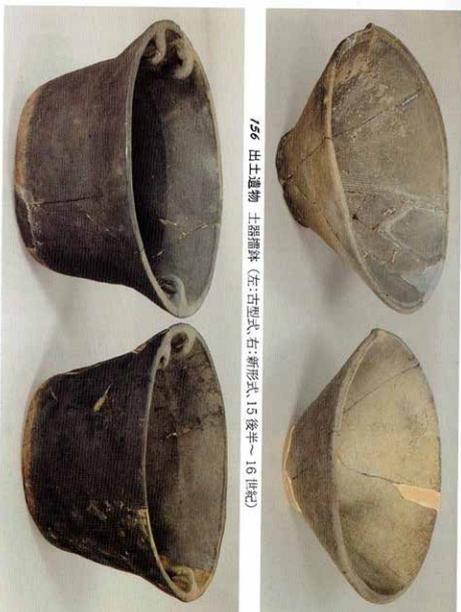
80

千葉市南屋敷 出土遺物



図録『千葉市の戦国時代城館跡』

千葉市生実城跡出土



156 出土遺物 土器甕鉢 (左:古型式,右:新形式,15後半~16世紀)
157 出土遺物 内耳土器 (15世紀後半)

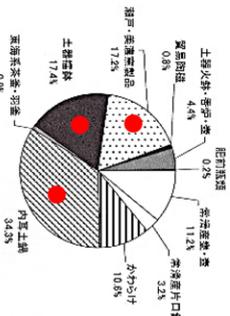
図録『千葉市の戦国時代城館跡』

東中山台遺跡群(36)掘込型屋敷

表13 東中山台遺跡群(36)中世遺物集計表(17c含む)

産地・形種	点数	採取口数
赤羽焼・産	59	10
常陸河内口	15	3
カララケ	53	172
内耳土鍋	172	1
形有赤羽焼	3	8
土器甕鉢	57	94
通耳・東海茶碗	84	92
内耳土鍋	1	4
瓦土器	1	1
瓦土器	2	2
長尾火鉢	13	1
土器火鉢	1	1
磁器瓦器	1	1
合計	501	

グラフ1 東中山台遺跡群(36)中世遺物産地・器種別組成



グラフ2 東中山台遺跡群(36)銅・鉄類組成

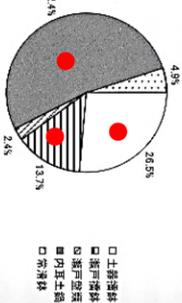


表14 東中山台遺跡群(36)銅・鉄類集計表

産地・形種	点数
土器甕鉢	87
銅製刀剣	45
銅製土器	8
銅製土鍋	172
銅製鉢	16
合計	328

中世後半の交易品(狭域流通と広域流通)



東耳・東海や常陸産品の出土品類
東中山台遺跡群(36)(10)

広域流通品

土器の形産(上)
石臼(下)
東中山台遺跡群(36)(9)

東中山台(8・9)
カララケ(狭域流通品)

内耳土鍋(狭域流通品)

東中山台遺跡群(36)

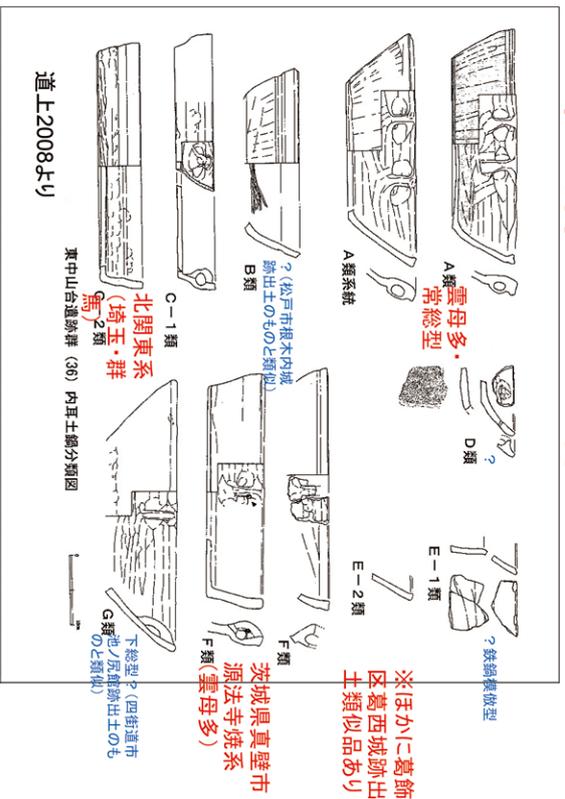


図録『中世の船橋』より



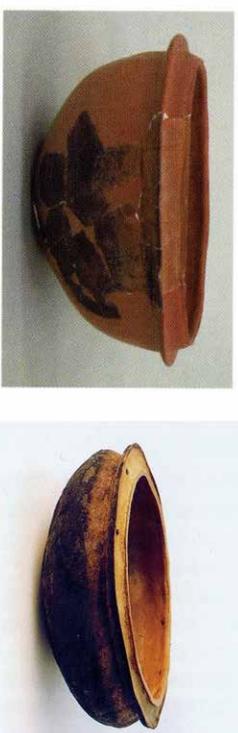
東中山台
銭貨(中国銭)
(8・9)

内耳土鍋はどこで作られたのか



85

東海系羽釜の分布 (中世後半期＝戦国時代)



船橋市東中山台遺跡群 (8・9) 地点出土

佐倉市高岡大福寺遺跡出土

『ふるさと読本 中世の佐倉』より

○超薄手 (min 2 ミリ) で熱効率が良い。船橋では羽釜形が多く出土。鍋形は稀少品。茶釜形は出土していない。
 ○鉄製品模倣。湯沸し。羽釜形だがカマドにかけるのではなく、囲炉裏の使用を想定 (五徳にかける、または吊り下げる (穿孔品 (穴あきあり))) 。

86

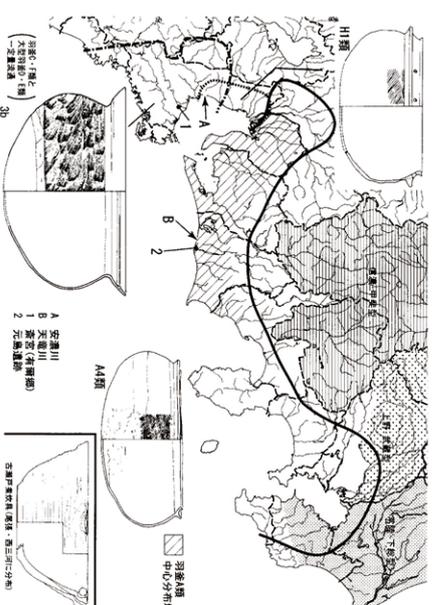
千葉市生実城跡 東海系湯釜



図録『千葉市の戦国時代城館跡』

87

東海系羽釜の出土分布 (中世後半)



第5図 15世紀前半 (内耳鍋出現以前の様相 (S=1/8))

金子2005より

88



房総出土の東海系土器 (中世後半)

- 39遺跡45地点で出土 (2006年現在)
- 一遺跡に数個体レベルの出土
(瀬戸・美濃窯製品に比べると非常に少ない稀少品)
- ①おもな出土地 城跡、主要集落(分布が広域になる)
- ②立地
 - ・ 東京湾岸
 - ・ 主要河川の河口
 - ・ 印旛沼流域
 - ・ 太平洋岸と東京湾をつなぐ分水嶺 (交通の要衝)
 - ・ 在地系土製釜 (房総東部に分布) が出土しない地域

東海系羽釜にみる物流 (中世後半=戦国時代)

- ③出土地の性格：
 - 河口に湊が想定される集落跡 (峰台遺跡・東中山台遺跡群など)
 - 流通の核となる主要城跡
- ④その他の特徴：
 - 瀬戸・美濃窯製品とともに流通した可能性

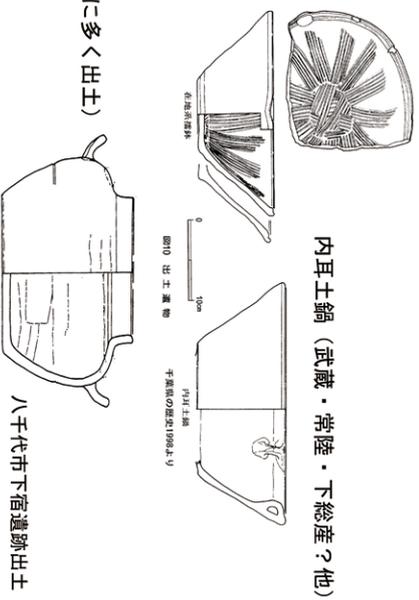
東海系羽釜にみる物流 (中世後半=戦国時代)

3. 物流を示す出土資料 (中世前半・後半)

- ①搬入品 ②在地品
- 広域流通品 = 搬入品 (遠隔地) おもに海を介した交易品
 1. 陶磁器(国産品) 東海地方の諸窯から～
瀬戸・美濃窯製品、常滑窯製品、瀬美窯製品、湖西産山
茶碗
 2. 陶磁器 (輸入品) 貿易陶磁：中国産青磁・白磁・青白磁・染付
 3. 土器 (国産品) 東海系土製煮炊具 (南伊勢系土鍋、東海系羽釜等)
 4. 金属製品 (輸入品) 銭貨 (中国) 北宋・明銭等
 5. 石製品 (国産品) 滑石製石鍋 (推定長崎県)、板碑 (北関東)
 6. 木製品 (国産品) 結桶、曲物等
- 狭域流通品 = 在地品 (関東近県) おもに陸・河川等・・・内陸の産地から
内耳土鍋 (武蔵・常陸・下総産?他)、土器擂鉢 (内耳土鍋と共通か)、
土製釜 (県北東部に多く出土)、カラケ等

狭域流通品 = 在地系土器 (関東近県)

おもに陸・河川交通等・・内陸の産地から
土器種録 (内耳土鍋と共通か)



93

3. 中世の湊町(みなとまち)船橋 (中世後半期)

～湊町・大神宮門前町としての景観～
(文献・地形・地理・気候・古地図・寺社・宗教遺品・伝承などから総合的に考える)

○船橋の中心地: 旧船橋町(本町・宮本・海神東部)
= 近世の九日市村・五日市村・海神村

○地理: 東京湾、海老川、諸街道……水陸交通の要衝

○地形: 低地、砂丘、砂州、台地、海、川
(中世前半には潟湖を推定)

94

○文献: 湊・交通・交易の状況を示す

e.g. 後北条氏朱印状の発見「下総船橋津」
と表記。

「湊郷」の呼称(船橋大神宮文書)

= 湊町(みなとまち)の存在をうかがわせる

○「五日市場」「九日市場」(高城氏印判状)
= 市立て。大神宮門前町(神明の御町)

○古地図・絵図: 下総之国図(船橋は街道交差点)、船橋御殿地絵図(推定中世富氏居館)等

95

○寺社:

・船橋大神宮(式内社意富比神社)

……9世紀の文献で確認。約1200年間、
守る 船橋を見

砂丘上のランプスーク、神官富氏の存在

・寺町・漁師町の推定戦国時代起源の寺院群

～中世前半期からの都市的な場・湊を継承する～

- ・夏見御厨
- ・推定律宗系寺院(西福寺石塔)
- ・天台宗系寺院の存在(船で浅草寺へ向かう)

96

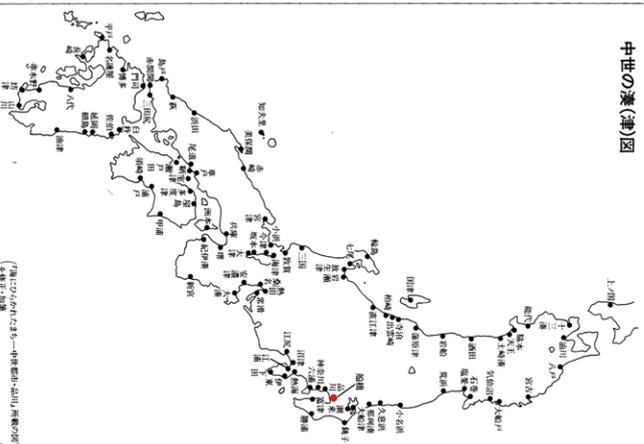
下総之国図(戦国時代末期を描く)



陸海交通の結節点
船橋市西図書館所蔵

97

全国の湊(津)



98

中世の特徴

- 現在の“都市”の原型が成立した時代
- 現在の生活様式の基本パターンが生まれた
- 全国各地に要津(主要な港)が存在する
→陸上・水上交通が隆盛となる

99

参考文献

- ・伊藤裕隆『中世伊勢海岸の湊津と地域構造』岩田書院 2007年
- ・今井区郷土史『日本の美術 朱・元の青磁・白磁と古瀬戸』第410号 至文堂 2000年
- ・葛師雄一郎『原図「クワリ」の物語 特別展「下町・中世再発見」』1996年
- ・工藤雄一『国立歴史民俗資料館「クワリ」の物語』2009年
- ・河川恒昭『戦国期の歴史民俗資料館「クワリ」の物語』2009年
- ・千葉県『千葉県の歴史 資料編』2002年
- ・千葉県『千葉県の歴史 資料編 中世1』1998年
- ・根津美術博物館『探る鎌倉』1996年
- ・船橋市郷土資料館『印内台遺跡群(二)』1998年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書』2000年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(十一)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(十二)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(十三)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(十四)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(十五)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(十六)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(十七)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(十八)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(十九)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(二十)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(二十一)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(二十二)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(二十三)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(二十四)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(二十五)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(二十六)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(二十七)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(二十八)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(二十九)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(三十)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(三十一)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(三十二)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(三十三)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(三十四)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(三十五)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(三十六)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(三十七)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(三十八)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(三十九)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(四十)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(四十一)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(四十二)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(四十三)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(四十四)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(四十五)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(四十六)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(四十七)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(四十八)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(四十九)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(五十)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(五十一)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(五十二)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(五十三)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(五十四)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(五十五)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(五十六)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(五十七)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(五十八)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(五十九)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(六十)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(六十一)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(六十二)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(六十三)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(六十四)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(六十五)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(六十六)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(六十七)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(六十八)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(六十九)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(七十)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(七十一)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(七十二)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(七十三)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(七十四)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(七十五)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(七十六)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(七十七)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(七十八)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(七十九)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(八十)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(八十一)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(八十二)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(八十三)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(八十四)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(八十五)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(八十六)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(八十七)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(八十八)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(八十九)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(九十)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(九十一)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(九十二)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(九十三)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(九十四)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(九十五)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(九十六)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(九十七)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(九十八)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(九十九)』2018年
- ・船橋市郷土資料館『船橋市遺跡調査報告書(百)』2018年

100

「クロストーク」

久保 勇（以下久保）

久保です。よろしくお願ひします。非常に大量な情報のご講演をいただきまして、私の方でもまだ全体的として消化しきれない状態ではありますけれども、「クロストーク」ということで、まず遠山先生から道上先生のご講演に対する感想や質問がありましたら、そちらからお聞かせいただきたいと思います。お願ひします。

遠山成一（以下遠山）

それでは申し上げます。道上先生のご講演、船橋を中心としたものだったと思うのですが、今日私を取り上げた千葉と江戸を結ぶ道、その中継点といえますか、その途中にあります船橋のことをかなり詳しくお聞かせいただいて、大変勉強になりました。私自身ももうだいぶ前になりますけれども、私の所属しております千葉城郭研究会のほうで、それこそ道上先生にお世話になりました。船橋を中心とした研究会といえますかシンポジウムを開かせていただいたんですけれども、改めて今日のお話をうかがって船橋の持つ位置、これが千葉と非常によく似ているな、という感じがいたしました。



例えば一点挙げますと、千葉は妙見宮とか大日寺・来迎寺というお寺、あるいは神社がありますけれども、その門前町として栄えていた。船橋は船橋大神宮

の門前町といえますか、鳥居前町として栄えたという点。さらには千葉湊、それに対する船橋湊。もちろん宿駅といえますか宿場町としての町場構成。こういったものを考えますと千葉の町と船橋の町がよく似ている。ただ一点違うのは前のシンポジウムでも問題になったんですけども、千葉の町のほうは、たとえば千葉氏とかそのあとは原氏という権力がある程度町場を掌握していた。それに対して船橋というのはそういう大きな権力というのがなかなか見えない。戦国後期になりますと高城氏なんかも関係してくるんですけども、中世を通じてそういう権力といえますか、そういうものが入ってこれなかったというか入らなかったというか、その辺が大きな違いかな。それ以外に関してはかなりよく似てるのかな、という感想を持ちました。以上です。

久保

ではお答えは後ほど、ということ、逆に道上先生から遠山先生にご感想なり質問等ありましたら、まずお聞かせください。

道上 文（以下道上）

遠山先生が使われた「歴史的農業環境閲覧システム」は明治時代の彩色地図ということ、非常に分かりやすく、今後自分自身も中世のルートを見ていくにはあれをもっとよく見る必要があるなと思いました。それから今おっしゃったように、船橋には戦国時代の大きな城跡があるわけではなく、私がフィールドとしている船橋では、どうしても中世後半については地侍級の館であったり村の遺跡が研究の対象になってきます。実際に中世の村はどういう状態であったのかということに関心がいくわけですが、そういう中で先生のお話ではいろいろなルートの途中に中小の小さな宿が展開していた。例えば川の渡河点に館があり宿があるというお話について大変興味を持ちました。それがいわゆる中世集落とどのように関わってくるのか、今後勉強したいなと思っております。以上です。

久保

遠山先生から道上先生へ、「船橋」という土地の特性―交通としても基点となった寺社を中心とした町―という点で千葉の町と非



道上 常に似ている。けれども、中心となる権力と言いますか、有力氏族の存在が中世後期にならないと見えてこない、という相違点についてです。私もうかがっていて、例えば大きな屋敷の遺跡とか、その館の規模とか、どの程度「有力」なのかという問題が、他の地域の発掘成果と相対化して、ある程度想定できるのではないかと思います。けれども、そうしたものが出ている所と出ていない所の比較が難しいというのは、やはり考古学では「掘れてないところ」の問題があると思います。「船橋」の状況としては、中世後期の高城氏が出る以前を、どういったイメージでわれわれは想像すればいいのか、何かお見通しがありましたらうかがいたいと思っていたのですが、いかがでしょうか？

それは特にそういう屋敷が出現する以前の中世前半期の様相ということですか。

久保 そうです。

道上 説明が詳しくなかったかもしれないのですが、例えば印内台遺跡群、東中山台遺跡群では鏡や短刀、カワラケを伴うお墓がある程度見つかるんですが、実は居住した中世前半期の建物は台地上には見つかっておりません。ほかに検出された遺構としては道路（溝）跡などですね。道路跡も溝を掘って突き固めるような構造なんです。溝の形をしているものからそこを掘りますと、中世前半期の陶磁器など生活感のある

ものが出てくるんです。台地上も人の住んだ痕跡があると。しかし建物跡が見つからない。そしてお墓にはそれなりの身分を示唆するお墓が見つかるという状況が実態でございます。

北総地域の台地上では皆似たような様相かなと思いますけれども。だから今後は建物跡を見つけることが課題だって昔から言っているんですが、私が最近思っているのはおそらく地面に痕跡が残らない建物跡、例えば東北の事例では根太を置いてその上に柱を建てる建物が見つかっています。考古学では地面を掘って建物を作らないと痕跡が残らないので分からなくないわけですが、実はそういった構造の建物だったのかなってちよつと考えております。そういう中では建物跡を探すというよりは、やはりもう少し遺物の分析を進めていくということが大事だと思っています。前半期においては遺物の内容、組み合わせ、「組成」であるという段階性というのは追えると思っています。例えば鎌倉幕府の最高級ランク、それから房総の名主級というんでしょうか、豪族級というふうな階層性を出せると思っております。

久保 最後におまとめになった、広域流通で中世前期から出てくるものが、けつこう大陸やアジアのものであり、中世後期になると狭域流通となつて、非常に狭い地域で流通した生活用品等が出てくる、というお話でしたけれども、その大陸のもの等が出てくる中世前期の階層性（発言者注：領主の経済力等の問題）とでも言うのでしょうか、どういふふうイメージすれば良いのか、そのあたりも教えていただきたいと思っております。

道上 そうですね。一つ訂正しますと、中世後半期も中国産の焼き物というのはたくさん出てきます。ちよつと説明が足りなかったかもしれませぬ。ただしそれが非常に多い遺跡と少ない遺跡という差が中世後半期もあるということですね。そこで、前半期に関しては、すみませぬ、もう一度質問をお願いします。



久保

大陸の磁器等が中世前期の館跡から出てくる、というお話だったと思いますが、大陸のものを入手するという（手段）が、それを求めて購入したのか、それともたとえば鎌倉から下賜されたものなのか、それとも贈答品なのか、という問題。その広域流通品がそこにあった理由と言えましょうか、流通の実態をどういうふうにか考えれば良いのかという、素朴な疑問として思ったのですが。

道上

たとえば青白磁の梅瓶という徳利形のもですね。それはブランド好みの武士に好まれたといわれています。そういう贈答品類もあったと思いますが、白磁とか青磁のお茶碗とか皿の形をしたものも出てきて、それは贈答品というよりは、求めて購入して、普段使いすることによって自分のステータスとしていたと思われるところもあります。

ちょっと話が離れるかもしれないんですが、出土破片の点数を数えてグラフとか表にするという統計法を用いるのが中世の遺物の分析方法として、盛んにこの二十年ぐらい行われています。平方メートルあたり例えば中国産のものが何点出土するのか、瀬戸・美濃焼が何点出土するかといった点数を集計するということを、県内でも共同研究しておりまして、そういう中では平方メートルあたりの焼き物の出土点数の比較で階層性が見えるという考え方をとってお

ります。そういう意味ではそれを買ったのか、もらったのかはあるけれど、所有している状況を示して評価するという作業はやってますね。

遠山

1点よろしいですか。実は今の陶磁器の流通について贈答なのか購入なのかというお話が出たんですが、参考になるかどうかなのですが、「金沢文庫文書」のほうに、今日お話した東禅寺の湛睿が唐物を求めてるといふ文書が出てくるんです。ですから寺院にいた湛睿の場合は自分で求めたんじゃないかなと思います。贈答に関しては、「金沢文庫文書」にかなり出てくるんですけど、お茶を贈りあっていますね。お茶は贈答品として寺院間とかあと在地の武士にもお茶を贈答しているという例がありますので、多分、私の考えですけども、高級品はどちらかというと自分で求めたのかなという気がしています。以上です。

久保

いまちようど私がかがおうと思っていた質問—お二方になのですけれど、「モノ」と「人」という流れの具体的な問題です。遠山先生のお話の中で、享徳の乱以前の称名寺との関係で、「寺院の僧侶が移動する」とありました。私の個人的な関心でもあるのですけれど、僧侶の移動に伴う「モノ」と「人」の流れという、いわば「どのような人が移動したのか」という問題です。前半期につきましては、非常に明確な称名寺と千葉湊の六浦との文書で確認できるというお話がありましたけれども、中世後期もやはり盛んに僧侶が移動したというようなことが文献的に確認できるのでしょうか？

遠山

そうですね。中世後期、それこそ日蓮宗の妙満寺派の、現在は顕本法華宗になってますけれども、日泰上人が品川から船で渡って浜野へ来るわけなんです。教線の拡大ということで日泰が房総へ渡ってきます。そのあと本行寺を中心に上総、東金酒井のいわゆる七里法華といわれていますが、あの辺一帯が妙満寺派のお寺に変わるわけですが、それはやはりそういう積極的な教線拡大ということ、それから外山さんと私の最初の頃の研究で、同じ日蓮宗ですけど日意上人の朗門派（日朗門



流)の教線拡大ということで、かなり房総でも広い地域にわたって教線が伸びてゐるわけですが、これはやはり僧侶の移動を考えないとできないことかな、と思います。

久保 ありがとうございます。話題はまた元に戻るのですね。道土先生から遠山先生に、「宿」の問題のご質問と「中世の集落社会」というもののイメージについてのご質問とがあったのですが、その辺りのところももう少しかえればと思います。

遠山 なかなか宿と在地の村との関係って正直難しくして私そこまですてをつけてはいないんですけども、宿地名ですね。一文字でシユクという小字が現在千葉県では七十例ほど見つかっています。これは隣の茨城、常陸の国になりますと百四十近くあるんですね。ほぼ街道沿いの宿

場町と考えてよろしいかと思うんですが、その宿に対して在地の村落がどういう関係にあったのか。なかなかこれ難しい問題でお答えがなかなかできないんですけども、例えばニイジユクとかシンジユクという地名が宿に伴う場合が何例かありますが、そういう場合はある程度その宿に周辺の農村部から人が集まってくる、ということがいえるのかなと。

そうなったときに、では在地の村はどうなったのかという問題があるんですけども、ちょうど戦国大名の家臣を城下に移住

させるといって、朝倉氏の有名な分国法がありますけども、それも集まったのは重臣クラスだけが対象です。いわゆるその下の土豪クラスは在地のままだったということがいわれております。それから敷衍できるか分かりますが、一応宿と別に在地の村は存在したのかな、という感じが私はしています。ただこれは裏付けになるものはありません。

久保 いろいろ、ありがとうございます。私が今日お話をうかがっていて、お二人の先生のご講演で「共通する」というか、まさに「クロスする」話題として、房総が地理的な特徴として「内海を持つていること」、その内海の中での「水運の拠点」がありました。道上先生は「船橋の津」という問題からアプローチされて、遠山先生は冒頭の享徳の乱以前の「千葉の湊」の問題でした。享徳の乱以後では「浜野」など、そうした内海の拠点を軸に据えて、そこからの陸運による物流にかかるお話で、「船橋」につきましては「モノ」が「津」を起点にして移動したことが周辺に遺された「道」に確認できるといったお話で、それぞれに共通した問題をたどられてきたと思います。やはり「水運の拠点」プラス「モノ」を動かす陸の交通路、その交通路をいかに政治的に周辺氏族と関係を保ちながら確保していくか、という問題をお話しいただいたと思います。私のこの理解について、付け加えることとか相互にコメント等がありましたら、是非お願いしたいのですが。

遠山 では、まず私から申し上げますと、今おっしゃられた内海、内海に湊がある、それが拠点になるというのはそうなんです。実は中小河川にも、江戸内海、太平洋岸、それから香取内海、これらに注ぐ川の要所要所に船戸とか船津という小字が点在するんです。

これは私もだいたい前に書かせてもらったことがあるんですけども、先ほどから出てきます多古の千田庄東禅寺のすぐ目の前に栗山川が流れているんですが、そこに字船戸というのがあるんです。これは土橋城という城の直下にあるんですけども、先ほどから申し上げております「金



沢文庫文書」の中に、その東禅寺にいたであろう蔵禅そうぜんというお坊さんの手紙が出てくるんですね。その手紙で何を言ってるかというと、東禅寺から上流に数キロさかのぼったところに三倉くら、三つの倉と書くところがあるんですが、三倉寺、現在の西徳寺とくじというお寺の僧侶に宛てた手紙で、東禅寺から頼まれていた炭を二駄そちらに持つていくので、そちらの船津に人を待たせておいてくれ、という文書があります。

これを見つけた時は本当に嬉しかったんですけども、栗山川に河川交通があったということの証明がこれでできたわけなんです。同じように栗山川には船戸地名が確か八カ所、九カ所点在してまして、これがいわゆる近世の栗山川水運にもつながってくると思うんですね。このような形で実は夷隅川にも船戸地名、それから一宮川の上流のほうにもあります。というわけで中小の河川交通も重要ではないかなと考えるわけです。以上です。

道上 今の遠山先生のお話は房総の東部の方の話で、比較的大きな河川が発達するところなのかなと思うんですが、船橋のあたりだと細い台地の間を小さな河川があって、例えば海老川が南北に流れる船橋南部では一番大きな川なんですが、それもそんな奥地まではさかのぼらない状況です。そういう河川の地理的な状況がある中では、多分その川で

いってみたいして上流にさかのぼれないので、先ほど『下総之国図』をお示ししましたけど、船橋湊で荷を下ろしたあとは、陸路で行くんだろかなど。地理的な条件からそういうふうに思っています。

久保 地理的な話題として最初に出していただきましたが、房総半島は現在のイメージとは全く違う、むしろ本当に古代の頃は「島」だったのだろうとイメージさせる、非常に水域が入り組んだ地形をしていました。『平家物語』等の「妙見説話」では、やはり「妙見さんは水を渡す」、「千葉氏にとって渡す神様」という説話として伝わっています。お話をうかがっていて、「水を越える」とか「渡らなければならぬ川」といった水域に関する問題というのは、やはり房総半島の氏族たちが常に抱えていた問題だったのか、という素朴な感想を抱きました。

房総半島の地理的な状況の変化を話題にしてまいりましたが、現代の「千葉に住む私たち」が「たえば「千葉街道」と言ったら国道一四号線というようない、普段使っている「道」と少し脇に逸れた「かつての道」の話をお話の楽しさを感じたいと思います。そこで、現代につながる今日のお話の楽しみ方と言うのでしょうか、歴史の楽しみ方ですね。「こういう所を今日のお話を受けて見ていただきたい」とか「歩いていただきたい」とか、ご覧になって市民の方々が「歴史を楽しむ」方法について、何かアイデアがありましたらお話しいただきたいと思えます。

遠山 そうですね。私は本当に道が大好きといいますが、これも元はといえば千葉県の道の調査に三十数年前に関わらせていただいて、当時の指導員の先生方と一緒に歩かさせていただきました。それではまっちゃんです。

ですからやはり現在視聴されてる方々も、今日挙げました例えば明治の『迅速図』ですとかかなり昔の道が分かっています。現在は今日も使わせていただいたGoogle Earthというのを使いますと、今の道とちよ



ど同じ線で出てくるわけなんです。ですから、当時の『迅速図』の道はどこなんだというのが一目で分かりますのでそういったものを使ったり、あるいは地形図でもある程度昔の道が追えるので、実際に歩いていただく道標があったりとか本当に楽しいと思うんですね。今日ご覧になってた方はあの『迅速図』をご覧になって、現在お住まいのところが全く景観が違って驚かれたと思うんですけども、そういうのを比較しながら歩いていただけると楽しめるかなと思います。

久保

船橋地域はいかがですか。

道上

全くおっしゃる通りだと思います。そういった道沿いに、

例えば中世起源のお寺もまだ残っていますし、今日の先生のお話でも古代の東海道を踏襲する、あるいはその脇に道ができるといった古代ま

でさかのぼれるような道もありますので、ぜひそういうルートを確認しながら歩いていただければ。あとは遺跡というのは高台にある館であったり、今日の峰台のように低地の湿地帯に面する遺跡であったり、そういった遺跡がたくさん房総にはあって、ぜひその場所へ出かけていただいで高さを感じていただきたいです。船橋大神宮も小高い砂丘の上にありますけれども、そういった地形を感じていただけると、すごく楽しんでいただけるのかなと思います。

久保

ありがとうございます。まだいろいろとかがいたい、特に生実城の状況とか興味があったのですが、お時間になってしまったので、本日のクロストークは以上で終わらせていただきたく思います。

遠山先生、道上先生、ありがとうございました。

閉会にあたって

天野 良介（千葉市立郷土博物館館長）

千葉市立郷土博物館の天野でございます。映像配信によるお二方の講演およびクロストークのほうお楽しみいただけただけでしょうか。趣旨説明でもございましたが、千葉市と千葉大学の共催の形で開催をさせていただきました

いただきました本日の公開市民講座でございますが、本年度で四回目ということになりました。昨年は千葉大学けやき会館を会場に、たくさんの方のご参加をいただき、大変に盛況なうちに終了させていただきました。ただ、残念ながら今年度は新型コロナウイルス感染症の広がりに鑑みまして、このような映像配信の形での開催とさせていただきますました。本来であれば会場にて、参加をした皆さま方にご質疑をいただきながら内容を深められるところでございます

が、今年度はこのような形での開催を何卒ご容赦いただければと存じます。ただ、形態は異なれど、本講座の開催が叶いましたことを心より嬉しく思っておる次第でございます。それも今回ご講演を賜りました遠山先生、道上先生に慣れない条件の中でご講演を快く引き受けてくださいましたこと、大学入試やりモート授業等で業務繁多の中、千葉大学には収録会場をご提供いただきましたことに、心より感謝を申し上げます。改めまして関係各位には心より御礼を申し上げる次第でございます。

千葉市は令和三年（二〇二一）元日をもって市制施行から一〇〇回目の誕生日を迎えることになりました。そして一〇〇年後の未来を見据え、新たな一步を踏み出したところでございます。さらには令和八年（二〇二六）には、千葉常重が大椎の地から千葉の中心地に本拠を移し、千葉の町の礎を築いてから九〇〇年という記念すべき年を迎えることとなります。二つの重要な機会を生かし、市といたしましても多くの事業を進めて参る所存でございますが、本館におきましても関連特別展等をはじめ多くの行事を開催して参りたいと考えております。今後の本館の活動にもぜひご期待をくださいますようお願い申し上げます。

結びに、今後の郷土史研究のますますの発展、それから本日も視聴をいただきました皆さまのご健勝、そして現在のコロナ禍が一刻も終息するよう祈念いたしまして、言葉整いませんがごあいさつに代えさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

令和2年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録

千葉氏の領域における交通と流通

—水と陸でつながる人・モノの中世—

令和3年3月発行

発行 千葉市・千葉大学

編集 千葉市立郷土博物館

千葉市中央区亥鼻1-6-1

印刷 株式会社 世広

